

夏目漱石の世界
こころ (先生と私)

目次

こころ

序 はじめに

上、 先生と私

- 一、 冒頭の文章
- 二、 先生との出逢い
- 三、 当分鎌倉の宿に留まる
- 四、 私は毎日海へ入りに出掛けた
- 五、 先生と白い皮膚の西洋人
- 六、 日本の海水浴の歴史
- * * *
- 七、 先生への好奇心
- 八、 先生への接近
- 九、 先生の眼鏡を拾い上げる
- 十、 先生の後をに続いて海へ飛び込む
- 十一、 先生と懇意になる
- * * *
- 十二、 東京に帰る
- 十三、 先生宅を訪ねる
- 十四、 雑司ヶ谷がやの墓地
- 十五、 墓ほひの墓標いぢようと銀杏の木
- 十六、 先生宅訪問たくを重ねる
- 十七、 墓参ほさんと散歩の区別
- 十八、 私は寂さびしい人間です
- * * *
- 十九、 先生宅で食事や酒を飲む
- 二十、 夫婦間の子供の話
- 二十一、 仲いの好いい夫婦いっついの対たい
- 二十二、 先生と奥いさんの喧嘩けんか（言逆いさかい）
- 二十三、 天下にただ一人いしかいない相手同士
- * * *
- 二十四、 私と奥いさんの会話
- 二十五、 恋（恋愛）は罪悪いです
- 二十六、 人間いが自分いは信いじられない
- 二十七、 先生いの思想いはどこから生いじたのか
- * * *

- 二八、盗難よけの留守番を頼まれる
二九、もし奥さんがいなくなったら、先生は、
三十、元は、ああじゃなかったんです
三一、実は、少し思いあたる事が……
三二、先生が十時頃帰宅する
三三、秋が暮れて冬が来る……
* *
三四、父の病気のことで国へ帰る
三五、先生宅に暇乞いを兼ねて金を借りに行く
三六、父の病気は思った程悪くはなかった
三七、先生にお札の手紙を書く
三八、父の将棋の相手をする
三九、東京へ帰りたい気持ちが生じて来る
* *
四十、東京へと戻る
四一、父の病気についての談義が続く
四二、卒業論文に専念する
四三、論文完成させ、先生宅訪ねる
*
四四、先生を散歩へと誘い出す
四五、何々園の中に入る
四六、財産の話をする
四七、人はいざという間に急に悪人になる
*
四八、犬と子供の突然の出現
四九、犬と子供の去った後のこと
五十、やがて二人は植木屋を出て行く
*
五一、人間は誰でもいざという間に急に悪人になる
五二、先生は、さつき少し興奮しましたね
五三、私は他に欺かれたのです
五四、やがて二人は電車に乗って帰る
五五、あなたはほんとうに真面目ですか
* *
五六、大学を無事に卒業する
五七、先生の家へ御馳走に招かれていた
五八、先生の家で御馳走にあずかる
五九、これから何をする気ですか
*
六十、父の病気の話からどちらが先に死ぬか

六一、先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか

六二、先生宅の玄関先にある木犀もくせいの木を見て

* *

六三、帰郷への準備をする

六四、汽車で故郷へと帰る

* *

※ 上「先生と私」のまとめ

※ 参考文献

上
(先生と私)

上

序 はじめに

例えば、夏目漱石の代表的な「作品」の一つには、いわゆる『こころ』という作品があるかと思うが、それは、「先生と私」、「両親と私」、「先生と遺書」という「三部」から成るものであり、最初は、第一部（「先生と私」）の部分から考えてみたいと思う。

まず、「先生と私」という第一部の内容は、私（或いは「奥さん」という第三者から見た（つまり「外から見た」）時の「先生」という存在の「行動（言動）」の描写などが主であり、それは、いわば「外的事実」であり、例えば、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）を初めとして、その時々表れる「先生」という人間の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他、また、生い立ち、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」の描写になるかと思う。——例えば、私が初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）であった。そして、「先生」という人は、外から見ると、終始静かであり、落ち着いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切ることがあった。また、先生には美しい奥さんがいたが、子供はなく、大学出身でありながら、仕事もしないでぶらぶら遊んでいる。それは、それなりの「財産」があるからではあるが、私は、「……先生は、なぜ宅で考えたり勉強したりするだけで、世の中に出て仕事をなさらないのですか？」と聞くと、「……私は世間に向かって働きかける資格のない男だから仕方がない」と答える。また、体は健康であるが、友だちは少なく、それは、人間は信用できないからだということであり、外出は嫌いでも、毎月友人の墓参りだけは行なっている。もちろん、夫婦仲は悪くはないが、ただ、なぜ夫が人を嫌い（避ける）のか？ 奥さんにもよく分からないという。むしろ私が聞きたいくらいだと答えるのである。それが、外から見た「先生」という「人間の姿」であったということである。

上 先生と私

一、冒頭の文章（一）

まず、日本で最も読まれている夏目漱石の『こころ』という作品の、その余りにも有名な「冒頭部分」であるが、それは、次のようなものである。

つまり、「……私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち開けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ『先生』といたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない」とある。——これは、これから何かが「始まる」という内容の文章ではなく、それは、すでに過去にあったことを「回想」しているという文章になるかと思う。

二、先生との出逢い（一）

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は

多少の金を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費さんちやした。ところが、私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分からなかつた。けれども、実際、彼の母が病気であるとすれば、彼はもとより帰るべきであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は、鎌倉に一人残された。(本文)

*

*

さて、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢つたのは、夏の鎌倉の海岸(浜辺)の「海水浴場」であつた。その時、私はまだ若々しい書生(大学生)であり、一方の友達は、ある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたが、その友達は、急に国元から母が病気だから帰れという電報を受けるが、それを信じなかつた。というのも、友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていたからである。——これは、当時は、多くの場合、親が「子供の結婚」を決めていたのであり、また、主人公の「先生」も、両親を賜チフスでほぼ同時に失つた後、東京の「高校」へと進んだが、毎年、夏休みに実家に帰ると、叔父おじから同じように「勧めない結婚」を強いられるような経験をしているのである。それはともかく、友達は、まだ年も若く、それに肝心の当人が気に入らなかつたので、夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。けれども、実際、彼の母が病気であるとすれば、彼はもとより帰るべきであり、それで彼はとうとう帰る事になり、せつかく来た私は、鎌倉に一人残されたとなるのである。

三、当分、鎌倉の宿に留まる(一)

学校の授業が始まるにはまだ大分日数だいぶんひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよしという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかつた。従つて、一人ぼっちになつた私は、別に恰好な宿を探す面倒ももたなかつたのである。——宿は鎌倉でも辺鄙へんびな方角にあつた。玉突たまつきだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇なまを一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘は其所そこにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、「……学校の授業が始まるにはまだ大分日数だいぶんひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよしという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした」とある。——まず、当時の「大学」は、三年制であり、しかも、「新学期」は、九月から始まる制度であつた。それに加えて、友達は、中国(地方)のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたが、学校が学校なのと年が年なので、これは、私立でなく国立大学であり、しかも、まだ学生なので、生活の程度は私とそれほど変わりもなかつたということ

である。従つて、一人ぼっちになつた私は、別に恰好な宿を探す面倒もたなかつたのであるが、これは、友達は、金持ちの息子だからと言つて、特別高い宿ではなく、ごくふつうの宿を借りていたので、別に恰好な宿（他に安い宿）を探す面倒もたらずに、そのままその宿に留まる覚悟をしたということである。

そして、その宿は、鎌倉でも辺鄙な方角にあり、玉突だのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇（田んぼ道）を一つ越さなければ手が届かなかつたとある。――まず、玉突だのアイスクリームだのというのは、幕末維新の頃に、西洋人とともに日本に入つて来たものであり、それが徐々に「ハイカラなもの」として人気を得て普及するようになるのである。また、「車」で行くとあるが、これは「人力車」のことであり、この周辺には、個人の別荘なども其所所にいくつでも建てられていて、しかも、海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていたとある。

四、私は毎日海へはいりに出掛けた（一）

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思ふほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裏まれて、砂の上に寝そべてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑踏の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着替場を拵えていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なものであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ入るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた。（本文）

さて、「私」という人は、「……毎日海へはいりに出掛けた」とある。そして、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思ふほど、浜辺は避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裏まれて、砂の上に寝そべてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。――そして、「……私は実に先生をこの雑踏の間に見付け出した」というのである。

それは、「……その時、海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた」とある。そして、長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着替場を拵えていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なものであつた。――というのも、彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ入るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた」とある。

まず、「掛茶屋」とあるが、それを「辞書」で見ると、「……道端などによしずなどをかけて簡単に造った茶店であり、注文に応じて茶や和菓子などを提供する処」とある。これは、よく時代劇などでも旅人たちが休憩のためにちよつと立ち寄るあの茶店のことであるが、ここでは特に「海水浴場」用に設けられた簡易な「掛茶屋」になるのである。

ところで、日本には江戸時代まで「海水浴」の風習などは全くなく、幕末から明治時代に入って、まず最初は、日本にいた外国人たちが「海水浴」を始めるようになり、やがて、日本の政財界や華族などの「上流階層」の人たちが海岸に保養を兼ねた別荘などを建てるようになるが、それが、まさに「長谷辺に大きな別荘を構えている人たち」であり、一方、明治末から大正・昭和には、一般の人たちにも海水浴は「体に良い」ということで非常に普及して大ブームとなり、本文のような大変な賑わいになるのである。そして、当時の「掛茶屋」がいわば今日の「海の家」のような役割をしていたのである。

五、先生と白い皮膚の西洋人（二）

私とその掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであった。私はその時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上がって来た。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であったにも拘わらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴っていたからである。——その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった」（本文）とある。

というのも、私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていた。私の凝としていた間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆なの前に立っているこの西洋人が如何にも珍らしく見えた」（本文）とある。

六、日本の海水浴の歴史

これは、まさに日本の「海水浴」の歴史をそのまま物語っているものであり、まず、日本での最初の「海水浴」の幕開けは、幕末から明治に「横浜や築地」の「居留地」で暮らしていた「外国人」たちが、それは、日本に居住していた欧米各国の公使たちをはじめ、宣教師や商人たち、その他の上流階層の人たちが現在の横浜市金沢区の「富岡海岸」を療養・保養地として、夏は、そこで「海水浴」を好んで楽しんでいたのである。——やがて、日本の政界人（高官）をはじめ、華族や財界人の「上流階層」の人たちも、そこに「避暑」で訪れたり、また、長期滞在のための「別荘」なども数多く建られるようになるのである。

そして、明治十六年（一八八三年）には、鎌倉の由比ヶ浜に「海水浴場」が開設されたり、また、明治十八年（一八八五年）には、大磯の照ヶ崎海岸にも「海水浴場」が開設されることになるが、特にこの大磯の「海水浴場」では、大勢の人たちで大変な賑わいを見せるようになるのである。——それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、もちろん、鉄道の「交通網の発達」であり、例えば、「大磯海水浴場」が大変な賑わいを見せるようになった理由の一つには、従来の「富岡海水浴場」の場合には、鉄道の駅から「人力車や小舟」などで移動する必要があったそうであるが、一方、大磯の「海水浴場」では、「大磯駅」から歩いてすぐに「海水浴場」へと行けたのである。そして、様々な「鉄道」の開通によって、「海水浴場」への交通の便もよくなると、一部の「上流階層」の人たちだけではなく、やがて、様々な「社会階層」（つまり庶民）の人たちも海岸（浜辺）での「海水浴」を楽しむようになるのである。

それを本文でみると、「……海岸には掛茶屋が二軒あり、私という人は、その一軒の方に行き慣れていた。そして、長谷辺に大きな別荘を構えている人と違って、各自に専有の着替場を拵えていない、ここのらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なのであった」とある。——これは、まさに先生も私も一人の西洋人も、いわば「一般の人たち」であり、一方、「……長谷辺に大きな別荘を構えている人（たち）と違って」というのは、それは、まさに「上流階層や富裕層」の人たちということになるのだろう。そして、「……私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としていた間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆の前に立っているこの西洋人がいかにも珍らしく見えた」とある。——これは、ホテルから出て来て泳いでいる西洋人たちとは、まさに「上流階層」（或いは「富裕層」）の人たちであり、特に「上流階層」の人たちというのは、いわば「道徳や倫理或いは宗教、その他」などの理由から、自分たちの「裸体」を人前に曝すようなことを極力避けていたのである。

一方、先生と一緒にいた「西洋人」という人は、恐らく、「上流階層」でも「富裕層」でもなく、ごく一般の「西洋人」であり、それゆえ、「……猿股一つで済まして皆の前に立っていた」ということになるのだろう。——ところで、当時の「日本人」は、一体、どのような「格好」で泳いでいたのかと問えば、男性の場合は、ふつうは「褌」で泳いでいたかと思うが、一方、女性の場合は、最初の頃は、ただ見ているだけか、或いは、衣服を身に付けて、海水を浴びたり浸かったりすることが中心で、泳ぐというようなことはあまりなかったようで、明治二十三年には、日本で初めての女性用水着が誕生し、そして、明治末期には、現代の「水着のルーツ」につながる「シマウマ水着」などが、初めて、ここに登場することになるのである。

*

*

七、先生への好奇心

七、先生への好奇心(二)

さて、本文に戻りたいが、「……純粹の日本の浴衣を着ていた彼(西洋人)は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった」とある。そして、「……彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにこんなでいる日本人に、一言二言何か言った。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。——私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守っていた。すると彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまつた」(本文)とある。

*

*

さて、少し前の本文に、「……私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであつた」というのがあるが、これは、「……先生が丁度着物を脱いで、(禪姿になつて)、海へ入ろうとするところであつた」ということであり、しかも、先生は、「……砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した」とある。これは、西洋人の「頭に護謨製の頭巾を被っている」のを真似てのことなのか？ それとも、暑さよけか？ それとも、泳ぐ時に、「……髪の毛が濡れて邪魔になつたりするので、そうしているのか？」、そのどれかと思うが、一方、色白の西洋人は、まさに「猿股一つ」の状態で、二人は、並んで浜辺を下りて行き、彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そして、「……遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまつた」とある。

さて、「……二人とも泳ぎ出した。(そして)、彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った」とある。それでは、先生は、一体、どのような「泳ぎ方」をしたのだろうか？ 頭がずつと見えていたということは、もちろん、今日の「自由形」(クロール泳法)ではなく、むしろ、日本泳法の「抜き手」という方法だと思ふが、それは、首から上を出したままの状態で、抜き手で泳ぐというものである。もちろん、「平泳ぎ」もあつたかと思ふが、それはともかく、沖の方まで行つて、また、一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこかにいつてしまつた」ということであれば、それは、まさに「泳ぐことを第一の目的」として、この海岸(浜辺)へと来ていたのであり、しかも、泳ぎが軽々と出来るだけの「健康な肉体」をも持ち合わせていたということである。

八、先生への接近(二)

さて、「私」という人は、「……彼らの出て行った後、私はやはり元の床几に腰をおろして烟草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうも何処かで見えた事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしても何時何処で会った人が想い出せずにしまった。——その時の私は屈托がないというより寧ろ無聊（退屈）に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋まで出かけて見た。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽を被ってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追い付かなくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切つた。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって岸の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った」（本文）とある。

* * *

まず、その時の「私」は、無聊（退屈）に苦しんでいた。これは、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、経験することであり、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に時を過ごしてしまう時期でもあるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であり、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人」は、もしかしたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくださいませんか」というような感じであり、（そういう雰囲気を感じ出して、だからこそ、無意識の内にも、自然と「先生」と呼ぶようになるのであり、まさに「先生」と呼ぶのが最もふさわしい感じの人だ、ということになるのだろう）。その「感じ」から何故か「心惹かれていく」のであり、それゆえ、「……私は急にその後が追い掛けたくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳ねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切つた。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった」とある。——この「私の目的」というのは、むしろ、先生と「懇意」になるということであるが、一方、先生は、恐らく、勢いよく泳いで自分の方に迫って来る若者を見た時に、今は他人を避けて生きている先生にとつて、取り敢えずは、それを「避けた」ということになるのだろう。

九、先生の眼鏡を拾い上げる（三）

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物を言い掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と

帰って行った。周囲がいくら賑やかでも、それには殆ど注意を払う様子が見えなかった。最初一所にきた西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であった。——或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」(本文)とある。

*

*

さて、この場面は、「私」という人は、何度も「先生」との接触を試みようとしたが、なかなか「……物を言い掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。しかも、先生はいつでも一人であった」とある。——これは、「先生」という人は、何となく人との「関わり」を避けるような雰囲気はどこか醸し出していたということである。——ところが、それは、ほんの一寸した偶然の「出来事」から、何と「先生」と接触できる機会を得ることになるが、それは、「……或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」とある。——これは、「私」という人が、「先生」の「行動」を意識して、注意深く見守っていたからであり、そうでなければ、誰も気づきようのない余りにも小さな一瞬の「出来事」(眼鏡が板の隙間から下へ落ちた)のを見つけて、「……私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」とはならないのである。——この先生の「有難う」は、ごく自然な「有難う」ではあるが、しかし、もし、「私」という人が見付けてくれなかったら、眼鏡をかけない先生は、その「眼鏡」を見つけ出すのにかなり苦労したかも知れないという、そういう「意味合い」も含まれた「有難う」にもなるのである。これによって、二人は、全くの「他人同士」ではなく、まさに一つの「縁」が出来たということであり、だからこそ、次のような積極的な「行動」も可能になるのである。

十、先生の後につづいて海へ飛び込んだ(三)

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたぱたりと手足の運動を已めて仰向けになったまま浪の上

寝た。私もその真似をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と言って私を促した。比較的強い体質をもった私は、もつと海の中で遊んでいた。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。——私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かって、「君はまだ大分長くここにいますつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分かりません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいらなかった。これが私の口を出した先生という言葉の始まりである。(本文)

*

*

さて、一つの「縁」が出来たことで、「私」という人は、非常に積極的に「先生」のところへと近づいて行くが、それは、「……次の日は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁(約二二八呎)ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた」とある。——これは、「先生」にしてみれば、恐らく、「若者」は自分の後を追って泳いで来るだろうと予測していたことであり、それは、そういうことが実際に一度あったからであり、だからこそ、今度は逃げずに、「……先生は後ろを振り返って私に話し掛けた」となるのである。——それは、一体、なぜなのかと敢えて問えば、それは、「先生」という人は、妻以外、これという「話し相手」もなく、いわば「孤独な人」であったが、それゆえ、自分の「思いや考え」などを真摯に語り合える相手を、知らず識らずのうちに、誰か信頼できる「話し相手」というものをどこか探し求めるようなところがあったということである。そして、この「若者」であれば、あるいは自分の「話し相手」として「悪くはないかも知れない」と次第に思うようになって行くのである。——そして、しばらく、先生は、手足の運動を已めて仰向けになったまま浪の上に乗っていたが、やがて、その姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と言って、二人とも、また元の路を浜辺へと引き返して来るのであった。そして、——私はこれから先生と懇意になった。そして、それから三日目の午後だったと思うが、先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かって、「君はまだ大分長くここにいますつもりですか」と聞いたので、何の考えのない私は、「どうだか分かりません」と答えた。一方、にやにやと笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいらなかった。これが私の口を出した先生という言葉の始まりであった、とある。

まず、二人とも相手の「名前」を知らない状態であり、それゆえ、相手をどう呼ぶかは、一つの問題になるが、先生の方は、自然と「君は」という言葉を使っている。一方、「私」という人は、どう呼ぶかは少し迷ったかと思うが、ふつうであれば、「あなたは」と呼ぶところかも知れないが、「私」という人は、思わず「先生は」と言ってしまったということである。そして、なぜ、「先生」と呼んだのかは、「私」自身にもよく分からなかったかも知れないが、しかし、潜在的には、そのように「相手」を見ていたということになるのだろう。(例えば、「私」という人は、いわば東京帝国大学(今の東大)の学生である

ので、それなりの能力《教養》もあるかと思うが、一方、「先生」という人も、外国人と一緒にいたこともあったので、ふつう一般の人とは少し違って、少なくとも英語を理解でき得る能力《教養》などはあるのだらうと見ているのである。

十一、先生と懇意になる(三)

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と言っても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解った。私が先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉にいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際をもたないのに、そういう外国人と近付きになったのは不思議だと言つたりした。私は最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと言つた。若い私はその時暗に相手も私と同じような感じを持つてはいはしまいかと疑つた。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟したあとで、「どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですか」と言つたので私は変に一種の失望を感じた。(本文)

*

*

さて、「……私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と言っても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した」とある。——ここで、再び、なぜ「先生先生」と呼ぶのが問題になっているが、それに対して、「……私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した」とある。もちろん、その通りだとしても、すべての「年長者」に対して、すべて「先生先生」と呼ぶ人はいないのであり、やはり、それなりの「存在感や雰囲気などを持った人」でなければ、ふつう「先生」とは呼ばないものである。……

また、「……私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。それに対して、先生は、日本人にさえあまり交際を持たないのに、そういう外国人と近付になったのは不思議だと言つたりした」とある。——これは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、やはり、誰か「話し相手」というものをどこか渴望するようなところがあったのである。そして、そのような「精神状態」のところに、全く偶然にも若い「書生」(それは帝大の学生)が突然として目の前に現われ出たということである。もちろん、最初は、その「若者」を避けてはいたが、結局は、それを受け入れることになるのである。——それは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、人生をあれこれ深く語り合える、そういう「相手」(話し相手)というものをどこか渴望していたということであり、そういう二人が、夏の鎌倉の海岸(浜辺)において、偶然にもばつたりとめぐり逢つたということである。

また、「私」という人は、「……最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと言つた。それに対して、先生はしばらく沈吟したあとで、どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですかと言つたので、

私は変に一種の失望を感じた」とある。——これは、「私」にとって、「先生」という人は、もちろん、初めて会った人に過ぎないが、それでも、全くの「他人」として見えているというよりは、むしろ、なぜか遠い昔から知っているような感じに見えているということであり、それは、「先生」に対して、どこか「親しみ」を感じているからということになるのだろう。例えば、われわれ人間は、毎日、毎日、実に様々な人間と直接的でも間接的にも出合っていることになるが、その中で、ある人に対しては、なぜかいつまでたっても「他人」という感じが残る人と、ある人に対しては、なぜか最初の頃からどこか「親しみを感じるような人」とがいるかと思うが、それは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、いわばお互いの「相性や雰囲気或いは考え方や性格その他などがどこか合うような場合と合わないような場合とがある」ということになるのだろう。

さて、ここまですが「先生」と「私」との鎌倉の海岸（浜辺）の「海水浴場」での二人の「出逢いの場面」になるかと思うが、この二人の「出逢い」というのは、作品上の設定では、恐らく、明治天皇崩御の一年前の「明治四十四年」（一九一一年）の夏の鎌倉の「海水浴場」ということになるかと思う。

*

*

十二、東京に帰る

十二、東京に帰る（四）

さて、私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅へ伺っても宜ござんすか」と聞いた。先生は単簡にただ「ええいらっしやい」と言っただけであった。その時分の私は先生とよほど懇意になったつもりでいたので、先生からもう少し濃かな言葉を予期して掛ったのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もつと前へ進みたくなった。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなった今日になって、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える。（本文）

*

*

まず、私は先生と別れる時に、「……これから折々お宅へ伺っても宜ござんすか」と聞いた。すると、先生は単簡にただ「ええいらっしやい」と言っただけであつた。——これは、他人を避けて生きている先生にとつては、まさに「最上級の歓迎の言葉」だと思つた。まだ若い「私」という人にとつては、どこか物足りない返事で少し失望されられたとある。しかし、「……私はこのような軽微な失望を繰り返しながらも、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もつと前へ進みたくなった。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた」とある。これは、もちろん、自分はなぜ「先生」に「心惹かれるのだろうか？」という問題でもあり、先生が醸し出しているその「魅力と秘密」とは、一体、どこから生じて来るものなのだろうか？ それは、「……もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた」ということであり、（だからこそ、先生宅を頻繁に訪ねるようになるのである）。そして、先生の亡くなった今日になって、始めて解つて来たことは、「……先生は始めから私を嫌っていたのではなく、傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える」とあるが、それは一体なぜなのかの「疑問や問題点」などは、まさに第三部の「先生と遺書」の中でやがて明らかになって行くという展開になるのである。

* * *

ところで、私はむろん先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来たが、授業の始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行っておこうと思いつながら、しかし、帰って二日三日と経つうちに、鎌倉にいた時の気分が段々薄くなり、その上、大都会の空気が往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じ、私はしばらく先生の事を忘れた。――授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛みが出来てきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始め、そして、私の頭には再び先生の顔が浮いて出て、私はまた先生に会いたくなつたのである。(本文)

ちなみに、この頃の帝国大学の「新学期」というのは、今とは違って、九月から始まつていたとともに、この「私」という人は、大学三年目であり、しかも、当時の大学は「三年制」で三年で卒業になるのである。

十三、先生宅を訪ねる(四)

私が始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えてゐる。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好日和であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立つてゐた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へ這入つた。すると奥さんらしい人が代つて出て来た。美しい奥さんであつた。――私はその人から鄭寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。「……たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうに言ってくれた。私は会釈して外へ出た。賑やかな町の方へ一丁(約一〇九畝)ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行つてみる気になつた。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵を回らした。(本文)

* * *

さて、いよいよ「先生の宅」を訪ねることになるが、最初は、留守で、二度目も留守であつたが、その時は、すぐに玄関先を去らずに躊躇してそこに立つてゐると、やがて、奥さんらしい人が代つて出て来て、美しい奥さんであつたが、「……先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだ」と話してくれた。しかも、「……たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうに言ってくれたとある。――まず、「先生の宅」を訪ねてみたら、二度とも留守であつた。先生からは、いつでも大抵宅にいと聞いていたので、理由もない不満をどこかに感じたが、その美しい奥さんらしい人からは、「……先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだ」と鄭寧に先生の出先を教えなくてもらうことになる。――それでは、この「或る仏」とは、一体、誰なのか? こここそ、先生の「行動」(「言動」)のすべての「謎と答え」とが奥深く隠されているのであるが、それはここでは伏すとして、「私」という人は、やがて、散歩がてら雑司ヶ谷へ行つ

てみる気になるが、それは、そこへ行って、先生に会えるか会えないか（果たして、そのどっちなのかという、そういう）好奇心も働いたということである。

十四、雑司ヶ谷の墓地（五）

私は墓地の手前にある苗島なえはたけの左側から這入はいって、両方に楓かえでを植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端はすれに見える茶店ちやみせの中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡めがねの縁ふちが日に光るまで近く寄って行った。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。そして、「どうして……、どうして……」と、先生は同じ言葉を二遍ふたへん繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼の中に異様な調子をもって繰り返された。私は急に何とも応えられなくなった。「私の後あとを跟つて来たのですか。どうして……」と、先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいった。けれどもその表情の中には判然はつきり言えないような一種の曇りがあった。私は私がどうして此処ここへ来たかを先生に話した。すると、「誰だれの墓へ参りに行ったか、妻さいがその人の名を言いましたか」と聞くので、「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」と答える。「そうですね。——そう、それは言うはずがありませんね、始めて会ったあなたに。言う必要がないんだから」と、先生はようやく得心とくしんしたららしい様子であった。しかし私にはその意味がまるで解わらなかつたとある。（本文）

*

*

さて、この雑司ヶ谷ざうしがやの墓地での「出来事」は、夏目漱石の『こころ』という作品の中なかでも、最も大事な「場面」の一つであるが、それは、次のような理由からである。——つまり、この「先生」のその尋常じんじょうとも思えぬ「驚き方」、それは、「どうして……、どうして……」という、この「先生」の異常なまでの「心の激しい動揺」、こそは、まさにすべてを物語っているものであり、それは、「……決して誰にも見られてはいけないところを、突然、誰かに知られてしまったような、或いは、決して誰にも知られてはならないことを、突然、誰かに知られてしまったような」時の、そういう時のような凄まじいまでの「動揺と驚愕おどろおどろと戦慄せんりつ」とに襲われているのである。——このことだけは決して誰にも知られてはならない、その「人の心」の最も奥深い所に秘められている或る「事実」（或いは或る「真実」）、これがために、その人を「苦しみ悩まし続けている大元おおもと（元凶）」そのものを、この「私」という若者にもしかしたら感づかれてしまったかも知れないという「動揺と驚愕と戦慄」であり、だからこそ、先生は、「どうして……、どうして……」と叫なばずにいられず、また、「私の後あとを跟つて来たのですか。どうして……」と問い正しては、さらに、「……誰だれの墓へ参りに行ったか、妻さいがその人の名を言いましたか」と聞きかすにはおられず、そして、「そうですね。——そう、それは言うはずがありませんね、始めて会ったあなたに。言う必要がないんだから」と、先生はようやく得心とくしんしたらしい様子であったとある。——つまり、このことだけは決して誰にも知られてはならない、その「人の心」の最も奥深い所に秘められている或る「事実」（或いは或る「真実」）、これがために、その人を「苦しみ悩まし続けている大元おおもと（元凶）」そのものについて、当然のことながら、この「若者」にそれを感じられるはずもないと考え直して、やっと得心とくしん（安心）したということである。

十五、墓の墓標と銀杏の木（五）

さて、「……先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあった。全権公使何々というのもあった。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「……これは何と読むんでしょう」と先生に聞いた。「……アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」と言つて先生は苦笑した。——先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼此言いたがるのを、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに「……あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありませんね」と言つた。私は黙つた。先生もそれぎり何とも言わなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「……もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」と言つた。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。向うの方で凸凹の地面をならして新墓地を作っている男が、鍬の手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利かなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶら一緒に歩いて行つた。——「……すぐお宅へお帰りですか」、「……ええ別に寄る所もありませんから」、「二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。「……先生のお宅の墓地はあそこにあるんですか」と私がまた口を利き出すと、先生は、「いいえ」と答える。そこで、「……どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」と聞くと、「いいえ」と、先生はこれ以外に何も答えなかつた。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻つて来た。「……あすこには私の友達の墓があるんです」、「……お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」、「そうです」、先生はその日これ以外を語らなかつた。（本文）

さて、先生と私は「通り」へ出ようとして墓の間を抜けたが、その時に、若者は、様々な墓石の「墓標」を見ては、しきりに彼此言いたがるのを、先生は、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに、「……あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありますね」と言つた。私は黙つた。先生もそれぎり何も言わなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「……もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」と言つた。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ一緒に歩いて行き、そして、「……すぐお宅へお帰りですか」と聞くと、「……ええ別に寄る所もありませんから」、「……先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と聞くと、「いいえ」と答え、「……どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」と聞くと、「いいえ」と答えるだけであつた。それから、一町（約一〇九呎）ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻つて来た。「……あすこには私の友達の墓があるんで

す」と言い、「……お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」と聞くと、「そうです」と答えるだけであつた。先生はその日これ以外に何も語らなかつたとある。

さて、この場面は、「墓地」(「人の死」) というものに対する「若者の意識」と「先生の意識」との「決定的な違い」がはっきりと浮き彫りにされているところであり、それは、この「若者」にとつては、「墓地」(「人の死」) というのは、まだ自分とは「直接には何の関係ない」いわば「他人事の場合」に過ぎないが、一方、先生にとつては、決して「他人事の場合」などではなくて、先生のその「人生」とまさに直結している、「現実の場所」になつているのである。——それにしても、毎月一度の「墓参り」(その命日) を欠かさないとするのは、誰がどう考えても「多過ぎる」という感じを抱かせることになるが、その「謎」も、第三部の「先生と遺書」の中で、やがて明らかにされる事になるのである。

十六、先生宅訪問を重ねる(六)

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であつた。先生に会う度数が重なるにつれて、私はますます先生との交際へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になつたその後も、あまり変りはなかつた。先生は何時も静かであつた。ある時は静か過ぎて淋しいくらいであつた。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思つていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に對してもつていたものは、多くの人のうちで或いは私だけかも知れない。しかし私の私だけにはこの直感が後になって事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと言われても、馬鹿げていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとかく頼もしくまた嬉しく思つている。人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手を拵げて抱き締める事の出来ない人、——これが先生であつた。(本文)

*

*

さて、先生のお宅を訪ねることを何度も重ねていくうちに、次のようなことが分かつて来た。それは、「……先生の私に対する態度は、初めて挨拶をした時も、懇意になつたその後も、あまり変りはなかつた。先生は何時も静かであつた。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思つていたが、それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に對してもつていたものは、多くの人のうちで或いは私だけかも知れない」とある。——つまり、先生にはどこか他人を避けて近づけないようにしているところがあるとともに、一方では、「私」という若者をなぜか惹きつけて止まない不思議な「魅力と謎」とを深く秘めているところがあつたということである。そして、その「先生」という人は、もともとは「人間嫌い」でも何でもなく、「……人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて、(ある出来事をきっかけとして)、自分の懐に入ろうとするものを、(無条件で)手を拵げて抱き締める事の出来ない人(或いは出来なくなつてしまった人)、——これが先生であつた」ということである。

十七、墓参りと散歩の区別（六）

今言った通り先生は始終静かであった。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があった。私が始めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であった。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞に過ぎなかった。私の心は五分と経たないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れていた。再び、それを思い出させられたのは、小春の尽きる頃の或る晩の事であった。先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏の大樹を眼の前に想い浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例として墓参りに行く日が、それからちようど三日目に当たっていた。その三日目は私の課業が午で終える楽な日であった。私は先生に向かって、「……先生雑司ヶ谷の銀杏はもう散ってしまったでしようか」と聞くと、「……まだ空坊主にはならないでしょう」と言うので、そこで私はすぐさま、「……今度お墓参りにいらつしやる時にお伴をしても宜ごさんすか。私は先生と一緒にあすこいらが散歩してほしい」と言うと、先生は、「……私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」と答えるので、「……しかし、ついでに散歩をなすたらちようど好いじゃありませんか」と言うと、先生は何とも答えなかった。

しばらくしてから、「……私のは本当の墓参りだけなんだから」と言つて、どこまでも墓参りと散歩を切り離そうとする風に見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になった。「……じゃお墓参りでも好いからいっしょに伴れて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」と言つた。実際、私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると、先生の眉がちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであった。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。「私は」と先生が言つた。「……私はあなたに話す事の出来ない理由があつて、他といっしょにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行つた事がないのです」と答えるのであつた。（本文）

*

*

さて、この場面は、まだ若い「私」という人と、心に「深い傷」（影）を持つ「先生」との、人の「死」やその「墓参り」に対する「考え方」の「根本的な違い」の表れているところであり、それは、次のようなことである。——まず、この「私」という若い人（書生）の、その「家族」（両親や兄や妹その他）などは、まだ生きてるのであり、それゆえ、まだ親しい人の「死」に直面したという生の「経験や想い出」などの持ち合わせがないのである。それゆえ、人の「死」もその「墓参り」も、まだどこか他人事のように感じられて、その「重み」（「現実味」「リアリティー」）というものが感じられないのである。だからこそ、「……実際、私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われた」となるのである。——つまり、「散歩」と「墓参り」、それは「全く違うもの」であるが、この「私」という若者にとつては、ほとんど同じように見えているのである。

一方、心に「深い傷」（影）を持つ「先生」にとつては、自分の「行動」（言動）が、

結果として、親友を「死に追いやるようなこと」になつてしまったことに、……あの時、自分は、なぜ、あのようなことを言つてしまつたのか？ 或いは、あの時、自分は、なぜ、あのような行動をしてしまつたのか？ そのような「後悔の念や自責の念」などに襲われているのであり、その「想い」が、先生の「心」を「深く苦しめている」とともに、毎月一度の「墓参り」を欠かさずさせているのであり、それゆえ、「……私のは本当の墓参りだけなんだから」と言うのも、それは、まさに親友にいわば「懺悔（謝罪）に行つてゐる」ようなものであり、それゆえ、他人は邪魔になるだけであるとともに、そのような「姿」は、誰にも見られたくないし、ましてや、誰よりも「妻」に知られることを何よりも恐れているのである。それが、つまり、「……私はあなたに話す事の出来ない理由があつて、他といつしよにあそこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴つて行つた事がないのです」という言葉になるのである。

十八、私は寂しい人間です（七）其の一

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかつた。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるところの時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。（本文）

*

*

さて、「……私は不思議に思った」とある。これは、「……何かよほどの理由があるのだらうとは思つた」が、「……私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかつた。（それゆえ）、私はただそのままにして打ち過ぎた」。——それは、つまり、先生の「心の中」を根ほり葉ほり探るようなことはしなかつた。それが結果としてよかつたのであり、「……もし間違えて裏（探り）へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたからである」となるのである。

十八、私は寂しい人間です（七）其の二

さて、私は、月に二度若しくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は、突然私に向かつて聞いた。それは、「……あなたは何でそう度々私のようなものの宅へやつて来るのですか」、「……何でと言つて、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔なんですか」、「……邪魔だとは言いません」と言う。なるほど迷惑という様子は、先生の何処にも見えなかつた。私は先生の交際の範圍の極めて狭い事を知つていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものは殆

ど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。すると、「……私は淋しい人間です」と先生が言った。「……だからあなたに来て下さる事を喜んでいきます。だからなぜそう度々来るのかと言って聞いたのです」、「……そりやまた何故です」と、私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て、「……あなたは幾歳ですか」と聞いた。この問答は私にとつてすこぶる不得要領のものであったが、私はその時底まで押さずに帰ってしまった。(本文)

*

*

さて、私は、月に二度若しくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は、突然私に向かつて聞いた。それは、「……あなたは何でそう度々私のようなもの宅へやってくるのですか」と聞くと、「私」という人は、「……何でと言つて、そんな特別な意味はありません。——しかし邪魔なんですか」と聞き返すので、先生は、「……邪魔だとは言いません」と言う。そして、「……私は淋しい人間です」、「……だからあなたに来て下さる事を喜んでいきます。だからなぜそう度々来るのかと言つて聞いたのです」、「……そりやまた何故です」と、私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかったとある。

まず、先生が、「……あなたは何でそう度々私のようなもの宅へやってくるのですか」と聞くのは、それは、「……一体、何がよくてそう度々やって来るのですか」と聞いているのである。それに対して、「私」という人は、「……何でと言つて、そんな特別な意味はありません」と答えている。それは、まだ本人にも「よく分かつていない」ということなのかも知れない。すると、先生は、「……私は淋しい人間です」と言うのであった。

それでは、この「……私は淋しい人間です」というのは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、一言で言えば、それは、まさに「話し相手」がないということであるが、しかし、それは、ごく「ふつう一般に世間話などをするような話し相手」のことではなく、もっと「心を割つて親しく話し合える話し相手がいない」ということである。だからこそ、(比較的信頼できて親しく話せる)「……あなたの来て下さる事を喜んでいきます」となるのである。——これは、何度も書き記しているように、「先生」という人は、妻以外、これという「話し相手」もなく、いわば「孤独な人」であったが、それゆえ、自分の「思いや考え」などを真摯に語り合える相手を、知らず識らずのうちに、誰か信頼できる「話し相手」というものをどこか探し求めるようなところがあったということである。そして、そのような「精神状態」のところに、全く偶然にも若い「書生」(それは帝大の学生)が突然として目の前に現われ出たということである。もちろん、最初は、その「若者」を避けてはいたが、結局は、それを受け入れることになるのである。——それは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、単なる世間話などをするような相手ではなく、もっと人生をあれこれと深く語り合える、そういう「相手」(真の「話し相手」)というものをどこか渴望していたということであり、そういう二人が、夏の鎌倉の海岸(浜辺)において、偶然にもばつたりとめぐり逢つたということである。

そして、「先生」という人は、「心の中」ではまさに真に信頼でき得る「話し相手」というものを、知らず識らずのうちに、探し求めていたのであり、一方、「私」という人

は、無聊（ぶりょう）に苦しんでいたが、これは、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、経験することであり、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に時を過ごしてしまふ時期でもあるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものがあり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真（まこと）に「深く満たしてくるもの」であり、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人」は、若（わか）しかしたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくれる人かも知れない」というような感じであり、そういう雰囲気を醸し出していたからこそ、無意識の内にも、自然と「先生」と呼ぶようになったのである。

ところで、先生は、私の顔を見て、「……あなたは幾歳ですか」と聞いて来た。この間答は私にとつてすこぶる不得要領（ふとくようりょう）（要点がはつきりしないもの）であつたが、私はその時底まで押さずに帰つてしまつたとある。——この「底まで押さずに帰つた」というのは、恐らく、「……なぜ、年齢のことなどを聞くのですか？」と問い詰めることはせずに、そのまま帰つたということである。

十八、私は寂しい人間です（七） 其の三

しかし、それから四日と経たないうちに、（私は）また先生を訪問した。先生は、座敷へ出るや否や笑い出した。「また来ましたね」と言つた。「ええ来ました」と言つて自分も笑つた。私は外の人からこう言われたらきつと癩（しやく）に触つたろうと思う。しかし、先生にこう言われた時は、まるで反対であつた。癩（しやく）に触らないばかりでなくかえつて愉快だつた。「……私は淋しい人間です」と、先生は、その晩またこの間の言葉を繰り返した。「……私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか……」と言つと、「……私はちつとも淋しくはありません」と答える、先生は、「……若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそう度々私の宅へ来るのですか」と聞く。ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。そして、「……あなたは私に会つてもおそろくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外の方を向いて今に手を広げなければなりません。今に私の宅の方へは足が向かなくなりませう」と、先生は、こう言つて淋しい笑い方をしたとある。（本文）

さて、それから四日と経たないうちに、（私は）また先生を訪問した。先生は、座敷へ出るや否や笑い出した。「また来ましたね」と言つた。「ええ来ました」と言つて自分も笑つたとある。——これは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、単なる世間話などをするような相手ではなく、もつと人生をあれこれと深く語り合える、そういう「相手」（真の「話し相手」）というものを二人とも非常に強く渴望していたということである。すると、先生は、「……私は淋しい人間ですが、ことによ

るとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか」と言うのと、「……私はちつとも淋しくはありませぬ」と答える、先生は、「……若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそう度々私の宅へ来るのですか」と聞くのであった。

これは、誰であれ、特に若い時期には、「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であるが、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人は、若しかししたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくれる人かも知れない」というように感じたということである。しかし、「先生」という人は、「……あなたは私に会ってもおそろくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。（それゆえ）、あなたは外の方を向いて今に手を広げなければならぬくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなりませぬ」と言うのであった。——それは、一体、何故なのか？（本来であれば、この若者のその期待に応えて、彼の人生を正しく導くようなことを言ったりやったりして上げたいが、また、本来、それができ得る人でありながら）、先生の「言葉」を借りて言えば、「……私は世間に向かつて働きかける資格のない男だから仕方がない」（つまり私は他人に「働きかける資格」のない人間だからそれが出来ない）ということであり、この「謎めいた言葉」というのは、「第三部」（先生と遺書）を読み解くことによつて、やがては明らかになるということである。

*

*

十九、先生宅で食事や酒を飲む

十九、先生宅で食事や酒を飲む（八）其の一

幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私は、この予言の中に含まれている明白な意義さえ了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行つた。その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになった。——普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇から言つて、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因かどうかは疑問だが、私の興味は往來で出会う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたびに同じ印象を受けない事はなかった。しかしそれ以外に私はこれと言つてとくに奥さんについて語るべき何物も持たないような気がした。——これは奥さんに特色がないと言うよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方が正當かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになつていた。それで始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残っていない。（本文）

* * *
この場面は、まさに「書いてある通り」だと思つて、まず、「……その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになった」とある。この「先生の食卓で飯を食うようになった」とすれば、当然のことながら、先生とはより親しくなつて行くだろうし、また、奥さんとも話をするようになる。——例えば、人と「親しくなる方法」の一つとして、食事を一緒にする（或いは「飲み食いを一緒にする」というのは、まさに「基本中の基本」（古典中の古典）であり、例えば、「友達関係」であれ、「男女関係」であれ、その他、どのような関係であれ、相手と「親しくなろう」とするならば、その極めて有効な「方法」の一つとして、遙か遠い大昔から、相手と「食事を一緒にする」（或いは「飲み食いを一緒にする」）ことによつてこそ、一般的に、それだけ「親しさを増して行く」ことになるのである。それはともかく、「私」という人にとつて、「……始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残っていない」とあるが、しかし、やがては、「奥さんとも親しく話をするようになる」ことによつてこそ、この「私」という人は、今まで知り得なかつた「先生に関する実様な事実を知る」ことになるのである。

十九、先生宅で食事や酒を飲む（八）其の二

さて、ある時、私は先生の宅で酒を飲まされた。その時、奥さんが出て来て傍で酌をしてくれた。先生は、いつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは、「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下のような会話が始まつた。「……珍ら

しい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多にないのにね」、「……お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むといいよ。悪い心持になるよ」、「……ちつともならないわ。苦しいぎりでもあなたは大変ご愉快そうね、少しご酒を召し上がると」、「……時によると大変愉快になる。しかし何時でもという訳にはいかない」、「今夜はいかがです」、「今夜はいい心持だね」、「……これから毎晩少しづつ召し上がると宜ござんすよ」、「そうはいかない」、「……召し上がって下さいよ。その方が淋しくなくて好いから」と言うのであった。(本文)

*

*

さて、この「夫婦の会話」は、実に自然かつ滑らかに進んでいるが、それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、この「二人の間」には、第三者の「私」という人が存在するからである。——まず、夫が、奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは、「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。そして、「……珍しい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多にないのにね」となるのである。——だとすれば、先生は、酒を飲む時は、ほとんど「ひとりで飲んでいること」が多くて、奥さんは傍にいて、その先生のお酒のお酌をしていることになるのだろう。だとすれば、例えば、「夫婦二人」だけで、「……世間話をするにしろ、自分たちの話をするにしろ、その他、どのような話をするにせよ」、どうしても「相手との直接的な対話形式」にならざるを得ないものである。——つまり、「……夫がこう言えば、妻はそれに対してこう応え、妻がこう言えば、夫はそれに対してこう応える」というような二人だけの「対話形式」がずっと続くことになる。特にこの「先生」の場合は、妻と直接面と向かつて「一対一」になることは、死んだ親友をなぜか「想い出す」ことになってしまい、それは、非常に辛いことになるのである。——ところが、そこに「第三者」が入れば、「夫と妻だけ」の対話だけではなく、「夫から第三者」(逆に「第三者から夫」)、また、「妻から第三者」(逆に「第三者から妻」)というように、実に様々な「対話形式」が自然と生じて来ることになり、それだけいわば「楽な気持ち」になれるのである。

例えば、その「第三者」が「夫婦の間」の「実の子供(たち)」であれ、また、可愛がつている犬やネコの「愛玩動物」(ペット類)であれ、或いは、親戚、親友、友達、その他、誰であっても、いわば気心の知れた「第三者」であれば、「夫婦だけの時」とはまた違つて、一般に、何かもつと「楽な気持ち」になれるものではないかと思う。特に「先生」の場合は、妻と「直接面と向かうこと」を出来るだけ避けているのであり、それゆえ、そこに「私」という「第三者」がいることで、最初から最後までずっと妻と「向き合う」必要がなくなり、それだけ「楽な気持ち」になれて、この時の「夫婦の会話」のように、実に自然かつ滑らかに進んで行くことにもなるのである。

二十、夫婦間の子供の話(八)

ところで、先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は、宅の中にいるものは先生と私だけのよう気がした。「……子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて言った。私は、「……そうですね」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らな

った。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。「……一人貰もらってやろうか」と先生が言った。「……貰もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。「……子供はいつまで経たつたつてできっこないよ」と先生が言った。奥さんは黙もくっていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時、先生は、「天罰だからさ」と言いって高く笑わらった。(本文)

*

*

それでは、なぜ、先生「夫婦」には、子供がいなかったのだらうか？ それは、次のような理由からなのである。——まず、「……子供でもあると好いいんですがね」と、奥さんは、私の方を向いて言いった。これは、極めて「大事な言葉」であり、それは、奥さんの心の底からの「本音」そのものだからであり、この「言葉」に対して、夫（先生）がどのように「反へん応おう」するのかわをじつと見ているのである。それに対して、夫（先生）は、「……一人貰もらってやろうか」と言いった。「……貰もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向むいたとある。これは、当然のことながら、夫（先生）の「子供こそが欲しい」であり、何も「他人の子供」が欲しいということではないのである。すると、夫（先生）は、実に「恐おそるべき言葉」を発するのである。それは、「……子供はいつまで経たつたつてできっこないよ」と先生が言いった。この「言葉」を聞いて、妻（奥さん）は、まだ「希望」を捨すてずに抱かかっていた、その「想おもい」が、まさに一気に「地獄の底」へと突き落とされてしままうのである。だからこそ、奥さんは黙もくっていた（いや黙もくり込むしかなかったのである）。そこで、「なぜです」と私が代りに聞いた時、先生は、「……天罰だからさ」と言いって高く笑わらった、とある。——それでは、その「天罰」とは、一体、具体的にはどのようなものになるのかについては、ここでは「伏ひそして」、後述の「第三部」（先生と遺書）のところこで、出来るだけ詳しく考察してみたいと思おもう。

二一、仲の好い夫婦の一对（九）

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对いっぴであった。家庭の一員として暮くした事のない私のことだから、深い消息は無む論解わらなかつたけれども、座敷で私と対たい坐ざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼よばないで、奥さんを呼よぶ事があった。（奥さんの名は静しずと言いった）。先生は「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向むいた。その呼よびかたが私には優やさしく聞きこえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚はなだ素直すじであった。ときたまご馳走ちせうになつて、奥さんが席へ現あわれる場合などには、この関係が一層明らかあに二人の間あいだに描えがき出でされるようであった。——先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの芝居しばだのに行いった。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根はこねから貰もらった絵端書えはぎをまだ持っている。日光にっこうへ行いった時は紅葉もみぢの葉を一枚封じ込めた郵便も貰もらった。当時の私の眼に映うつつた先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。(本文)

*

*

さて、私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对いっぴであった。座敷で私と対たい坐ざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼よばないで、奥さんを呼よぶ事があった。そして、先生は、「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向むいた。その呼よびかたが私には優やさしく聞き

こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であった。ときたまご馳走になつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描き出された。——先生は時々奥さんを伴れて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あったとある。——これは、「私」という人から見た、まさに先生「夫婦」のいわば「外的事実」であるが、しかし、一方、先生「夫婦」の間には、当然のことながら、二人だけにしか解りようのない「内的事実」というものもあつたのである。それは、まさに次のようなものである。

二二、先生と奥さんの喧嘩（言逆い）（九）其の一

そのうちにたった一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくって、どうも言逆いらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつていて、格子の前に立っていた私の耳にその言逆いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ帰つた。——妙に不安な心持が私を襲つて来た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようと言つて、下から私を誘つた。先刻帯の間へ包んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は帰つたなりまだ袴を着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。（本文）

*

*

さて、今度は、先生と奥さんとの「喧嘩」（言逆い）であるが、それは、「……先生の宅の中から、尋常の談話でなくって、どうも言逆いらしい声が聞こえてきた。そして、そのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた」とある。——もちろん、これだけでは、この夫婦がどのようなことで揉めているのかは全く分からないが、しかし、もうちよつと先を読み進んでいくと、次のような言葉が出て来る。それは、先生が、「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまつたんです」、「……妻が私を誤解するのです。それを誤解だと言つて聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……妻が考えているような人間なら、私だつてこんなに苦しんでいやしない」と言うのであつた。むろん、これだけでは、具体的なことは何一つ分からないが、しかし、この先をずっと読み進めていけば、やがては分かつて来る問題であり、それゆえ、これはこのままにして前に進みたいと思う。——ところで、「私」という人は、その時、どうしようかと迷つたが、そのまま下宿へ帰つた。……すると、驚いたことに、「……先生は散歩しようと言つて、下から私を誘つた」とある。もしそうだとすれば、先生の「宅」と「私」という人の「下宿先」とは、二人が歩いて、「往き来でき得るような距離」（約一時間内）に住んでいるということであり、そして、二人は、散歩に出かけることになるのである。

その晩私は先生といっしよに麦酒を飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であった。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険の出来ない人であった。「……今日は駄目です」と言って先生は苦笑した。「……愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。——私の腹の中には始終先刻の事が引つ懸っていた。肴の骨が咽喉に刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止した方が好かるうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。「……君、今夜はどうかしていますね」と先生の方から言い出した。「……実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」と聞かれて、私は何の答えもし得なかつた。「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」と先生がまた言った。「どうして……」とだけ、私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかつた。「……妻が私を誤解するので。それを誤解だと言って聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……どんなに先生を誤解なさるんですか」と聞くと、先生は私のこの問いに答えようとはしなかつた。「……妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」と言うのであつた。先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。（本文）

*

*

さて、「その晩」（正確には夜八時過ぎ以降であるが）、外で、私は先生といっしよに麦酒を飲んだ。（中略）、そして、「……今日は駄目です」と言つて先生は苦笑したとある。これは、前に、先生が、奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した時には、先生は、「……今夜は好い心持だね」と言つていた。ところが、今回は、「……今日は駄目です」と言つて先生は苦笑したとなるのである。それは、当然のことながら、奥さんと「喧嘩」（言逆い）を起こしているからである。——つまり、「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」、「……妻が私を誤解するので。それを誤解だと言って聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」と言うのであるが、この「問題」を解く鍵としては、次のような「言葉」を参考までに書き記しておきたいと思う。

それは、少し後で、「私」と「奥さん」の「二人の対話」の中に出て来るものであるが、それは、次のようなものである。つまり、「……若い時はあんな人じゃなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く變つてしまつたんです」、「……若い時つていつ頃ですか」、「書生時代よ」、「……じゃ先生がそう變つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……あなたからそういわれると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからというだけで、取り合つてくれないうです」、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改め

るからって、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなって仕様がないうんです、涙が出てなあの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」とある。——つまり、「……先生は、なぜ変わってしまったのか？ それをどうしても打ち明けてはくれなかった」ということである。

二二、先生と奥さんの喧嘩（言逆い）（十）其の三

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁（約一〇九頁）も二丁（約二一八頁）もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。「……悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えたら女は可哀そうなものです。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」、先生の言葉はちよつとそこで途切れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移って行った。「……そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」、「……中位に見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅へ帰るには私の下宿のついで傍を通るのが順路であった。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に済まないような気がした。「……ついでにお宅の前までお伴しましょうか」と言った。先生は忽ち手で私を遮った。「……もう遅いから早く帰りました。私も早く帰ってやるんだから、妻君のために」、先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰ってから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかった。——先生と奥さんの間に起った波瀾が、大したものでもない事はこれでも解った。それがまた滅多に起る現象でなかった事も、その後絶えず出入りをして来た私にはほぼ推察ができた。それどころか先生はある時こんな感想すら私に洩らした。（本文）

*

*

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えたら女は可哀そうなものです。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」、そして、「……もう遅いから早く帰りました。私も早く帰ってやるんだから、妻君のために」と、先生は最後に付け加えたのである。——これは、先生がいかにどれだけ「奥さん」のことを心の底から愛しているかがはっきりと分かるところであり、だからこそ、次のような「言葉」を先生は（ある時）語ることもなるのである。——それは、先生の「本心」そのものである。

二三、天下にただ一人しかない相手同士（十）

つまり、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」。——私は今前後の行き掛りを忘れてしまったから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判然言う事が出来ない。けれども先生の態度の真面目

であったのと、調子の沈んでいたのとは、今だに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」という最後の一句であった。先生はなぜ幸福な人間と言い切らないで、あるべきであるかと断わったのか。私にはそれだけが不審であった。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であった。先生は事実をたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中で疑らざるを得なかった。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬られてしまった。(本文)

*

*

さて、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」と言うのであった。

これは、お互いが「天下にただ一人しかない相手」と深く思っているものであり、それゆえ、当然のことながら、この世で誰よりも「仕合わせな夫婦の一对」であるべきはずであるが、実際は、そうなっていないところに、先生「夫婦」には何か大きな「謎」が奥深く匿されているということである。

*

*

二四、私と奥さんの会話

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向いで話をする機会に出合った。先生はその日横浜を出帆する汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋へ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃の習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義としてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ帰るから留守でも私に待っているようにと言ひ残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話をした。(本文)、——この「奥さん」と話をするこゝによつてこそ、今まで知り得なかつた先生に関する「実に様々な情報その他」などを得ることになるのである。

その時の私はすでに大学生であつた。始めて先生の宅へ來た頃から見るとずっと成人した氣でいた。奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまつた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていて、しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ歸つて少し経つてから始めて分かつた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。——先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密切の關係をもっている私より外に敬意を払うもののあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜しい事だと言つた。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利いては濟まない」と答えるがりで、取り合なかつた。私にはその答えが謙遜過ぎてかえつて世間を冷評するようにも聞こえた。實際先生は時々昔の同級生で今著名になつてゐる誰彼を捉えて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々してみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でいるのが残念だつたからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がありません」と言つた。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇氣が出なかつた。(本文)

さて、「私」という人は、八月の「夏休み」に鎌倉の海水浴場で始めて「先生」に出逢つた。そして、九月にはいよいよ「新学年」が始まるが、この時、「私」という人は、恐らく「大学三年生」になつたはずであるが、本文では何も詳しくは記されていない。しかも、当時の「帝国大学」は「三年制」であつた。そして、九月に「……始めて先生の宅へ來た頃から見るとずっと成人した氣でいた」とある。——それは、つまり、九月、十月、十一月……と過ぐすことで、「……奥さんとも大分懇意となり、私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をする」ようになっていたのである。

ところで、先生は大学出身(帝国大出)でありながら、何もしないで遊んでいた。それ

は、両親から譲り受けた「財産」がかなりあったからではあるが、それに対して、「……私は常に惜しい事だと言った」。それは、「……世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである」とある。——それに対して、先生は、「……私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と言い、また、「……どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」と語るだけであった。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかつたとある。

それでは、先生は、なぜ、「……私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と言い、また、「……どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」と言うのか？ この「問題」は、第三部の「先生と遺書」のなかで解明されるべきものであり、それゆえ、ここでは伏して前に進めたいと思う。

二四、私と奥さんの会話（十一） 其の二

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟っていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——そりや女だからわたくしには解りませんが、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのしょう。それでいて出来ないんです。だから気の毒ですわ」と言う。「……しかし先生は健康から言つて、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」、「……丈夫ですとも。何にも持病はありません」、「……それでなぜ活動が出来ないんでしょう」、「……それが解らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。分からないから気の毒でたまらないんです」、奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけでは微笑が見えた。外側から言えば、私の方がむしろ真面目だつた。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。「……若い時はあんな人じゃなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く変つてしまつたんです」、「……若い時つていつ頃ですか」と私が聞いた。「書生時代よ」、「……書生時代から先生を知つていらつしやつたんですか」と聞くと、奥さんは急に薄赤い顔をした。（本文）

*

*

さて、夏目漱石の『こころ』という作品の中でも、この「二人の会話」で様々な「言葉」というのは、実に「大事なもの」であり、まず、「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」とある。これこそは、最大の「謎」の一つではあるが、それに対して、奥さんは、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟つていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——そりや女だからわたくしには解りませんが、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのしょう。それでいて出来ないんです。だから気の毒ですわ」と語るのであつた。つまり、「……やっぱり何かやりたいのしょう。それでいて出来ないんです。だから気の毒ですわ」

ということであるが、それは、一体、なぜなのか？ その真の「理由」を、二人（私も奥さん）も全く「知らない」状態にあるということである。そして、奥さんは、「……若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変わってしまったんです」、「……若い時っていつ頃ですか」、「書生時代よ」と続くのである。

二四、私と奥さんの会話（十二） 其の三

奥さんは東京の人であった。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは、「……本当いうと合の子なんですよ」と言った。奥さんの父親はたしか鳥取かどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸と言った時分の市ヶ谷で生れた女なので、奥さんは冗談半分そう言ったのである。ところが先生は全く方角違いの新潟県人であった。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであった。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずに聞いた。

先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々な問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何も聞き得なかった。私は時によると、それを善意に解釈しても見た。年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎んでいるのだろうと思った。時によると、またそれを悪くも取った。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もともとどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。（本文）

*

*

さて、奥さんは「東京」の人であった。父親はたしか「鳥取」かどこかの出であり、母親は、まだ江戸と言った時分の「市ヶ谷」で生れた人であった。それゆえ、奥さんは、「……本当いうと合の子なんですよ」と冗談半分にそう言っていたのである。一方、先生は、全く方角違いの「新潟県人」であった。それゆえ、先生と奥さんとは、「郷里の関係」から親しくなった間柄ではないことは明らかであった。——つまり、二人は、先生が「書生」（大学生）、一方、奥さんは「女学校の学生」の時に、東京で、奥さんの「母親」（軍人の未亡人であった）が、自分の家の「空き部屋」（一つの部屋）を個人に貸すという「素人下宿」を行っていたが、その「空き部屋」（一つの部屋）に先生（その時は大学生）がたまたま下宿することになったので、自然と、その家の「奥さん」（軍人の未亡人）と「お嬢さん」（今の奥さん）とも親しくなることになったという経緯があるのである。

そして、「……先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々な問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何も聞き得なかった」とある。そのことについて、「私」という人は、最終的には、「……二人とも私にはほとんど何も話してくれなかった。（その理由として）、奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために」としているのである。

二四、私と奥さんの会話（十二） 其の四

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた。——私は今この悲劇については何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たとも言える二人の恋愛については、先刻言つた通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつた。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。（本文）

*

*

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……私はただ恋の半面（花やかなロマンスの面）だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた」とある。——これは、すでに「すべてを知っている私」という人のいわば感想（感慨）であり、そして、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることの、いわば一つの「実例」にもなっているのである。ただ、「……私は今その悲劇については何事も語らない」としているのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十二） 其の一

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時花時分に私は先生といつしよに上野へ行つた。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添つて花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あつた。「……新婚の夫婦のようだね」と先生が言つた。「仲が好さそうですね」と私が答えた。先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の外に置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。「……君は恋をした事がありますか」、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」、私は答えなかつた。「……したくない事はないでしょう」、「ええ」、「……君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交つていましょう」、「……そんな風に聞こえましたか」、「……聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解つていますか」、私は急に驚かされた。何とも返事をしなかつた。（本文）

*

*

まず、「……或る時花時分に私は先生といつしよに上野へ行つた。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添つて花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あつた」とある。そして、「……

：新婚の夫婦のようだね」と先生が言った。「仲が好きそうですね」と私が答えた。そのあと、「……君は恋をした事がありますか」と聞くので、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」と言われて、私は答えなかった。「……したくない事はないでしょう」と言うので、「ええ」と答えると、「……君は今あの男と女を見て、冷評ひやひやしましたね。あの冷評ひやひやのうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声こゑが交まじわりましたよ」と言うので、「……そんな風ふうに聞こえましたか」と応こたえると、「……聞こえませんでした。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」と先生は言うのであった。私は急に驚かされた。何とも返事をしなかったとある。

さて、先生は、最後のところで、「……君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」と言っている。それを聞いて、「私」という人は、「……私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった」とある。——これは、まだ若い「私」という人にとっては、確かに「驚くべき言葉」かも知れないが、しかし、人生経験の長い「先生」にとっては、それは、それほど「驚くべき言葉」ではなく、むしろ、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、先生は、まさにわが身を以て誰よりも骨身に染みてよく知っているのであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪ですよ、と言うのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の二

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉うれしそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。「……恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。「……罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。「……なぜですか」、「……なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」、私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であった。思いあたるようなものは何にもなかった。「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」、「……目的物がありませんから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」、「……今それほど動いちゃいません」、「……あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」、「……それはそうかも知れませんが。しかしそれは恋とは違います」、「……恋に上のぼる階段かいでんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」、「……私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われます」、「……いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられない人間なのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。」（本文）

*

*

さて、当然のごとく、「私」という人は、「……恋は罪悪ですか」と聞いている。すると、先生は、「……罪悪です。たしかに」と、先生の語気は前と同じように強かったとあ

る。それは、もちろん、先生は、まさに「わが身を以って誰よりもそれを骨身に染みてよく知っている」からではあるが、しかし、それだけではなく、たとえどれほど「知性や理性に強く支配されている君子・聖人」であつたとしても、ひとたび、「恋（恋愛）の世界」に心からどっぷりと深く陥（おちい）つてしまえば、誰であれ！ まさに「正気」を失つてしまうものである。……それは、先生も、また、まさに「そうだった」ということである。

さて、まだ若い「私」という人は、先生の「恋は罪悪です」という言葉を聞いて、それは、「……なぜですか」、「……なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずです。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」、私は一応自分の胸の中を調べて見た。しかし、「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」と言つと、先生は、「……目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思つて動きたくなるのです」とある。

* *
これは、非常に「興味深い言葉」であり、つまり、「恋」というのは、すなわち、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであるが、例えば、自分は、「お金」がないから、恐らく、不幸なのだろう。だから、その「お金」（大金）が手に入れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、多くの人たちは、まさに「金儲け」へと動き出すのである。また、自分は、「恋」（恋愛）をしていないから不幸なのだろう。だから、「恋」（恋愛）をして「恋人」でも出来れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、「恋」（恋愛）へと動き出すのである。しかし、「恋」（恋愛）というものは、一方では、確かに、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」を持ち合わせてはいるが、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせてはいることを、誰でも、遅かれ早かれ、嫌が上でもまさに「思い知る」ことになるのと同時に、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責（かしゃく）」などにさいなまれることにもなるのである。——つまり、何かが欠けているから、自分は不幸なのだろう。だから、その「欠けているもの」を充たせば、きっと幸せになれるだろうと思つて、われわれ人間というのは、まさにその方向へと「動き出す」のである。

* *
さて、「私」という人は、「……今（私は）それほど動いちゃいません」と言つと、先生は、「……あなたは（ほかの人では）物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」と言う。それに対して、「……それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」と言う。すると、先生は、「……恋に上る階段（かいだん）なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」と言う。すると、「……私には二つのものが全く性質を異（こと）にしているように思われます」と言う。先生は、「……いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないのです。私は実際お気の毒に思つています。（なぜなら、「私」という人は、知らず識らずのうちに、先生から「何かを得よう」として、先生の所に来てはいるのである。ところが）、あなたが私から（満足できるようなものが得られず、やがて）よそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです」となつていくのである。

* *
さて、ここで「最も大事」なことは、次のようなことであり、それは、まだ若い「私」

という人は、「恋」というものは、まさに男女間の「恋愛」だけだと限定して、それだけが「恋」だと思ひ込んでいるのである。一方、先生は、男女間の「恋愛」だけではなく、「恋」というのは、もつと幅広く、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであると見ているのである。——それゆえ、人間、動物、植物、自然、人工物、宇宙、その他、何であれ、例えば、ゲームに心惹かれ、夢中になっている、また、カラオケに心惹かれ、夢中になっている、或いは、ゴルフに心惹かれ、夢中になっている、もちろん、誰かに心惹かれて、夢中になっている。或いは、ある動植物（ペット類）などに心惹かれ、夢中になっている。その他、何であれ、ある「対象」に「……心惹かれて、夢中になっている心の状態」というのは、基本的には、すべてその「対象」にまさに「恋をしている状態」と同じような「心のあり方」になっているのである。——つまり、「恋」というのは、何であれ！ ある対象に「心惹かれている心の状態」のことであるが、その中でも、われわれ人間というのは、特に男女間の「恋」（恋愛）こそは、まさに格別の「恋」（数多くの「恋」の中でも最上無比の「恋」）だと思ひ込んでいるのである。それは、当然のことながら、われわれ人間の「本能的性的欲求」（それは「愛情欲」と「セックス欲」それに「子孫欲」から成る）とも深く結びついているからである。——つまり、「心の渴き」は、「愛情」によって深く満たされ、また、「肉体の渴き」は、「セックス」によって深く満たされ、そして、「子孫保存欲」は、生まれ育つ「子供たち」によって深く満たされるのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の三

私は変に悲しくなった。「……私が先生から離れて行くようにお思ひになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起こった事はまだありません」と言うと、先生は私の言葉に耳を貸さなかった。「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつた。その上私は少し不愉快になつた。——「……先生、罪悪という意味をもつと判然言つて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」と言うと、「……悪い事をした。私はあなたに真実を話している気でした。ところが実際は、あなたを焦慮していたのだ。私は悪い事をした」と言い、先生と私とは博物館の裏から鶯溪の方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣の隙間から広い庭の一部に茂る熊笹が幽邃に見えた。「……君は私がなぜ毎月雑司ヶ谷の墓地に埋まっている友人の墓へ参るのか知っていますか」と聞く、先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこう言った。「……また悪い事を言つた。焦慮せるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」と言うのであつた、私には先生の話がますます解らなくなつた。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかつたのである。（本文）

*

*

さて、私は変に悲しくなった。「……私が先生から離れて行くようにお思いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起こった事はまだありません」とある。これは、まさにその通りであり、「先生」が亡くなった今も、こうして「先生」について語っているのである。つまり、「先生」からは、離れていないのである。——例えば、晩年のソクラテスは、七〇歳の時、「……ソクラテスは、国の認める神々を認めず、別の新奇な鬼神のまつりを導入するという罪をおかし、かつまた、青年たちに有害を与えるという罪をおかしている。これは死刑に値する」という罪状で訴えられて、その結果、「刑死」（毒杯を仰いで従容として死んでいく）という悲惨な結末になるが、それに対して、「晩年」（七十四歳）のプラトンは、その『第七書簡』のなかで、「……当時の人々のなかでいちばん正しかったと言ってもおそらくわたしの恥にはならないであろう方を、——わが敬愛すべき年長の友ソクラテスを、……」と記している。……これは、すでに七十四歳という晩年を迎えていながらも、今なおそのプラトンの「心の中」には、「師ソクラテスへの敬愛の情」というものが、すこしも色褪せない状態で存在していたことの明らかな証拠となるものである。——つまり、ソクラテスの「刑死」後も、プラトンという人は、師ソクラテスからは少しも離れることはなかったということである。

それはともかく、先生は、「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつたとある。——例えば、先生は、「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている。これは、例えば、この『こころ』という作品の中でも、例えば、親友とお嬢さんとが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——つまり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥ってしまうのである。それが、まさに男女間の「恋」（恋愛）なのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の四

さて、「私」という人は、「……先生、罪悪という意味をもっと判然言つて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」と言う。すると、先生は、「……悪い事をした。私はあなたに真実を話している気でした。ところが実際は、あなたを焦慮していたのだ。私は悪い事をした」と。

やがて、「……君は私がなぜ毎月雑誌司ケ谷の墓地に埋まっている友人の墓へ参るのか知っていますか」と聞く、先生のこの問いは全く突然であった。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかった。すると先生は始めて気が付いたようにこう言った。「……また悪い事を言った。焦慮せるのが悪いと思って、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」とある。（本文）

さて、これは、まだ若い「私」という人にとっては、男女間の「恋」（恋愛）については、どうしても、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」の方ばかりを見てしまう傾向があり、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」の方は、まだ経験がないからなかなかイメージ出来難いのである。——ところが、一方の、先生の方は、男女間の「恋」（恋愛）については、その実に恐ろしい「悲劇の一面」を、まさに「わが身を以って誰よりも骨身に染みてよく知っている」のであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪です、と言うのである。しかも、ここで最も大事なことは、——これは、先生だけの問題ではなく、実は、この世の誰であれ、遅かれ早かれ、やがては、嫌が上でもそのことを「思い知る」ことになると共に、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などにさいなまれることにもなるのである。

二六、人間が自分は信じられない（十四）其の一

年の若い私は稍ともすると一凶になり易かった。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まりを言えば、教壇に立って私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。「……あんまり逆上ちゃいけません」と先生が言った。「……覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯がってくれなかった。「……あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」。「……私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」、「……私はお気の毒に思うのです」、「……気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」と言うのであった。（本文）

さて、「私」という人は、「……私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まりを言えば、教壇に立って私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった」とある。——だからこそ、その「人」を、まさに「先生」と呼ぶのが最もふさわしいということにもなるのだろう。それはともかく、「……あんまり逆上ちゃいけません」と先生が言った。それに対して、「……覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯がってくれなかった。「……あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」とある。

つまり、「先生」は、君は私を「過大評価し過ぎていて」と言っているのである。やがて、私の「本当の姿」（その「実体」）を知ったならば、恐らく、がっかりするか、軽蔑するようになるだろう。だからこそ、「……私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、な

お苦しくなります」となるのである。ところが、一方の、「私」という人は、「……その時の熱に浮かされてものを言い、その熱がさめればもう厭になるという、そういう取るに足りない軽薄な人間だと思つて居るのですか」と、言つて居るのである。それが、まさに「……私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」、「……私はお気の毒に思うのです」、「……気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」と言い寄つて居るのである。

二六、人間が自分は信じられない（十四）其の二

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をばたばた点じていた椿の花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた。「……信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」、その時生垣の向うで金魚売りらしい声が出た。その外には何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外静かであつた。家の中はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間に奥さんのいる事を知つていた。黙つて針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知つていた。しかし私は全くそれを忘れてしまつた。「……じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。——先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。「……私は私自身さえ信用して居ないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになって居るのです。自分を呪うより外に仕方がないのです」、「……そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしょう」、「……いや考えたんじゃない。やつたんです。やつた後で驚いたんです。そうして非常に怖くなつたんです」と言うのであつた。（本文）

*

*

さて、先生は、「……迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をばたばた点じていた椿の花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた」とある。——この「椿の花」というのは、有名な『草枕』の中にも出て来る「花」であり、それは、「……あの『花の色』は、ただの『赤』ではない。余は深山椿を見るたびにいつも妖女の姿を連想する。目を醒すほどの派手やかなの奥に、言うに言われぬ調子を持つて居る。黒ずんだ、毒気のある、恐ろしい味を帯びた調子である。屠られたる（処刑された）囚人の血が、おのずから人の目を惹いて、おのずから人の心を不快にすることく一種異様な『赤』である。——そして、見ていると、ぼたりと赤い花が水の上に落ちた。しばらくするとまたぼたりと落ちた。あの花は決して散らない。かたまつたまま枝を離れる。ぼたりぼたりと落ちる。際限なく落ちる」とある。——つまり、庭にその「椿の木」が植えられていて、しかも、「……先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた」とすれば、或いは、夏目漱石という人は、「……余は深山椿を見るたびにいつも妖女の姿（世にも妖しき女性の姿）を連想させられるが、その『椿の花』があるいは好きだつた」（つまり「なぜか心惹かれる対象であつた」）のかも知れない。

そして、「先生」という人は、「……信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」と言う。すると、「私」という人は、「……じゃ奥

さんも信用なさらぬですか」と先生に聞いてゐる。――まず、先生は、「……信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」と言つてゐる。これは、両親を「腸チフス」でほぼ同時に亡くした後、家の「財産の管理」はずべて「叔父」に任せていたが、その「叔父」に裏切られて、「家の財産」の多くを奪われてしまふのである。――それ以来、まさに「人間不信」が生じて来るが、しかし、それは、まだ「決定的なもの」ではなく、それに加えて、先生自身、自らが「親友」を裏切るような行動をしてしまふのである。それが、まさに「……いや考えたんじゃない。やつたんです。やつた後で驚いたんです。そうして非常に怖くなつたんです」という「言葉」になるのである。それゆえ、まさに「……私は私自身さえ信用していません。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになってゐるのです。自分を呪うより外に仕方がないのです」という「言葉」になるのである。――ちなみに、「……じゃ奥さんも信用なさらぬんですか」と聞かれて、もちろん、先生自身は、「……奥さんを信用している」のであるが、しかし、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)には、次のような「想ひ」があるのである。それは、つまり、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という「言葉」になるのである。それは、「……自分自身がまさにそうだったから」という意味合いを含んでゐる」のである。

二六、人間が自分は信じられない(十四) 其三

私はもう少し先まで同じ道を辿つて行きたかつた。すると襖の陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」と言つた。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間へ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解らなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ帰つて来た。「……とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」と言う。「……そりやどういふ意味ですか」と聞くと、「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」、私はこういう覚悟をもつてゐる先生に対して、言うべき言葉を知らなかつた。(本文)

*

*

さて、先生は、「……とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」と言う。すると、「私」といふ人は、「……そりやどういふ意味ですか」と聞くと、先生は、「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わ

わなくてはならないでしょう」と言うのであった。私はこういう覚悟をもっている先生に對して、言うべき言葉を知らなかった、となるのである。

これは、前にも記したように、「……君は私を『過大評価し過ぎている』のである。やがて、私の『本当の姿』(その『実体』)を知ったならば、恐らく、君は、がっかりするだろうし、また、軽蔑し、今度は、何でこんな人間に自分は跪いたのかと後悔をし、そして、逆に、侮辱するようになるだろう」と言っているのである。それが、まさに「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです」という「言葉」になるのである。だからこそ、「……私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです」と言うのである。そして、「……自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」と言うのであった。——これは、例えば、江戸時代の「封建時代」のような社会であれば、その「主従関係」や「上下関係」或いは「人間関係」などはそれなりにしつかりとしていただろうが、明治時代という、この「……自由と独立と己れ(エゴ)とに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲(代償)として、お互いの「人間関係」や「上下関係」或いは「主従関係」なども容赦なく激変するような「淋しさ」(孤独や悲哀など)を誰もが味わわなくてはならないのでしよう」と語っているのである。

例えば、親子関係なども、封建時代には、「……父上、母上」と呼び、自然と親を敬い、子が親に逆らうなどは、とでもでき難い時代であったろうが、今日では、平気で親に逆らい、平気で親の悪口を言い、そして、平気で親を馬鹿にするのである。それが、まさに「自由と平等とエゴ」の社会であり、それは、親だけではなく、ありとあらゆる人間との関係において、その他、すべてにおいて同じことが言えるのである。さらに加えて、今日のよいうな「インターネット時代」ともなれば、その規模は一気に拡大して、世界中の何十億というありとあらゆる階層のありとあらゆる分野のありとあらゆる人たちが実在にありとあらゆる「意見」(むろん実在に多種多様な罵詈雑言なども含めて)絶えず飛び交うような時代になっているのである。

二七、先生の思想はどこから生じたのか(十五) 其の一

その後、私は奥さんの顔を見るたびに気になった。先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であったから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかったから。

私の疑惑はまだその上にもあった。先生の人間に對するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだろうか。先生は坐つて考える質の人であった。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかった。先生の覚悟は生きた覚悟らしかった。火に焼けて冷却し切った石造家屋の輪廓とは違っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、

強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。(本文)

*

*

まず、「私」という人は、「……先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか」とある。先生は、奥さんに対しては、出来るだけ「優しくしようとしている」のである。ただ、奥さんと直接面と向かうことはどこか避けるようなところがあるのである。それが奥さんにとっては不満なのである。それに加えて、私の疑惑はまだあった。それは、「……先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を観察したりした結果なのだろうか。……私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった」とある。——もちろん、それは、その通りであるが、それについては、「第三部」(先生と遺言)を読めば、すべては明らかになることであり、ここではこのまま伏して、次に進みたいと思う。

二七、先生の思想はどこから生じたのか(十五) 其二

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯のようであった。……私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震わせた。(本文)、——この部分は、それ(先生が経験した事実)が具体的には一体どのようなものであつたかはよく分からなかつたが、しかし、何か得体の知れないそら恐ろしいものをなぜか感じて、私の神経を震わせたのである。

私は先生のこの人生観の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。(無論先生と奥さんとの間に起つた)。先生がかつて恋は罪悪だと言つた事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがなかつた。「かつてはその人の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとする」と言つた先生の言葉は、現代一般の誰彼について用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののようにもあつた。(本文)、——外から見ると、先生と奥さんとの間はそれなりにうまく行っているように見える。それゆえ、二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがないと思うが、しかし、男女間の「恋」(恋愛)には、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」もあることを、どうしてもイメージ出来ないでいたということである。

雑司ヶ谷にある誰だか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命の断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取つてその墓は全く死んだものであつた。二人の間にある生命の扉を開ける鍵にはならなかつた。むしろ二人の間に立つて、自由の往来を妨げる魔物の

ようであった。(本文)、——この「ぞうし雑司ヶ谷がやにある誰だれだか分らない人の墓」、それは、「…
：私に取ってその墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎには
ならなかった」とあるが、しかし、この「墓」、こそは、実は、凡てすべの「謎なぞ」を解き明かす、
まさに「鍵かぎ」そのものになっていくのである。

*

*

二八、盗難よけの留守番を頼まれる

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の一

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た。その頃は日の詰って行くせわしない秋に、誰も注意を惹かれる肌寒の季節であった。先生の附近で盗難に罹ったものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵の口であった。大したものを持って行かれた家はほとんどなかったけれども、這入られた所では必ず何か取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空けなければならぬ事情が出来てきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外の二、三名と共に、ある所でその友人に飯を食わせなければならなくなった。先生は訳を話して、私に帰って来る間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。（本文）

*

*

さて、「……そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た」とある。——この「私と奥さんと二人だけの会話」をするという機会には、何度かあるが、そのどれも非常に「大事な場面」であり、それは、一体、なぜかと問えば、それは、先生からは直接聞き出せないような実に様々な「情報」（特に先生に関する情報）を、奥さんから直接聞くことができ得るからである。

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の二

私の行ったのはまだ灯の点くか点かない暮方であったが、几帳面な先生はもう宅にいなかった。「時間に後れると悪いって、つい今しがた出掛けました」と言った奥さんは、私を先生の書斎へ案内した。

書斎には洋机と椅子の外に、沢山の書物が美しい背皮を並べて、硝子越に電燈の光で照らされていた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲団の上へ私を坐らせて、「……ちつと其所いらにある本でも読んでいて下さい」と断って出て行った。私は丁度主人の帰りを待ち受ける客のような気がして済まなかった。私は畏まったまま烟草を飲んでみた。奥さんが茶の間で何か下女に話している声が聞こえた。書斎は茶の間の縁側を突き当って折れ曲った角にあるので、棟の位置から言うと、座敷よりもかえって掛け離れた静かさを領していた。一しきりで奥さんの話し声が已むと、後はしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝としながら気をどこかに配った。

十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。「おや」と言って、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に来た人のように鹿爪らしく控えている私をおかしそうに見た。「……それじゃ窮屈でしょう」、「いえ、窮屈じゃありません」、「……でも退屈でしょう」、「……いいえ。泥棒が来るかと思って緊張しているから退屈でもありません」と言うのであった。（本文）——この場面は、まだ若い書生のどこか女性慣れしていない初々しさや真面目さなどが描かれているところになるのかも知れない。

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の三

奥さんは手に紅茶茶碗を持ったまま、笑いながらそこに立っていた。「……ここは隅っ

こだから番をするには好くありませんね」と私が言った。「……じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ご退屈だろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければ彼方で上げますから」、私は奥さんの後に尾いて書斎を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鉄瓶が鳴つていた。私はそこで茶と菓子の御馳走になった。奥さんは寝られないといけなうと言つて、茶碗に手を触れなかつた。——「……先生はやっぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」、「……いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌になるようです」、「……言つた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたので、私はつい大胆になつた。「……それじゃ奥さんだけが例外な人ですか」、「……いいえ私も嫌われている一人なんです」、「……そりや嘘です」と私が言つた。「……奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」、「なぜ」、「……私に言わせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」、「……あなたは学問をする方だけあつて、なかなかお上手ね。空っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだとも言われるじゃありませんか。それと同なじ理屈で」、「……両方とも言われることは言われますが、この場合は私の方が正しいのです」、「……議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃でよくああ飽きずに献酬（酒杯のやり取り）ができると思ひますわ」、奥さんの言葉は少し手痛かつた。しかしその言葉の耳障から言うと、決して猛烈なものではなかつた。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。（本文）

*

*

まず、「……先生はやっぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」、「……いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」、「……言つた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたとある。——これは、奥さんは、すでに何度となく先生になぜですかと問い正しても、先生は全く取り合つてくれないので、今ではもう仕方がないというような心の状態になつているのである。そこで、「私」という人は、「……それじゃ奥さんだけが例外なんですか」と聞くと、「……いいえ私も嫌われている一人なんです」と答える。これは、奥さんの「実感」であり、それは、「……奥さんを避けるようなところがある」からである。すると、「……そりや嘘です」と私が言つた。「……奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」、「なぜ」、「……私に言わせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」とある。これは実に分かり難い「理屈」であるが、恐らく、「……誰よりも奥さんがこの世で一番好きになつたので、それに比べれば、世間の人々などはもうどうでもよい」というようなことであり、それに対して、奥さんは、「……世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだとも言われるじゃありませんか」と言う。こちらの方が、遙かに無理のない「考え方」になるかと思うが、「私」という人は、「……両方とも言えますが、この場合は私の方が正しいのです」と言い張る根拠は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、先生の次のような「言葉」にあるのである。それは、「……私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しか知らない男と思つてくれます。そういう意味から言つて、私たち

は最も幸福に生れた人間の「一対」であるべきはずだ」という、この「言葉」を根拠として
そう言うのである。

ちなみに、男たちの「議論好き」に対して、奥さんは、「……よく男の方は議論だけな
さるのね、面白そうに。空の盃でよくああ飽きずに献酬ができると思いますわ」と言
うのは、実に面白いところであり、また、「議論好き」は、「……自分に頭脳のある事を
相手に認めさせて、そこに一種の誇り（や優越感）などを見出す」という説明も、非常に
面白いところである。

二九、もし奥さんが亡くなったら先生は（十七）其の一

私はまだその後（あと）に言うべき事をもっていた。けれども奥さんから徒らに議論を仕掛け
る男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗の底を覗い
て黙っている私を外らさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶
碗を奥さんの手に渡した。「……いくつ？ 一つ？ ニっつ？」、妙なもので角砂糖をつ
まみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数（かず）を聞いた。奥さんの態度
は私に媚びるといふほどではなかったけれども、先刻の強い言葉を力めて打ち消そうとす
る愛嬌（あいぎょう）に充ちていた。私は黙つて茶を飲んだ。飲んでしまつても黙つていた。「……あな
た大変黙り込んだね」と奥さんが言った。「……何か言うともまた議論を仕掛ける
なんて、叱り付けられそうですから」と私は答えた。「まさか」と奥さんが再び言った。

（本文）

*

*

まず、「……飲み干した紅茶茶碗の底を覗いて黙っている私」とあるが、ここに出て来
る「紅茶茶碗」というのは、恐らく、（夏目漱石の趣味から言つても）、イギリス製の表
面の肌（はだ）のきめ細やかで滑らかな「磁器」の「紅茶茶碗」に違いなく、それゆえ、でこぼこ
とした「陶器」の茶碗とは違うのである。——例えば、『草枕』の中でも、主人公の「画
工」は、まず、自分は羊羹が好きで、それは、べつだん食べたくはないが、その「肌合」
が滑らかで、緻密（ちみつ）なのが良くと賞賛し、また、青磁の菓子皿も良いとほめる。（これが本
当であるならば、夏目漱石は、陶器よりも磁器をより好んだ人かも知れない。）

次に、「……奥さんの態度は私に媚びるといふほどではなかったけれども、先刻の強い
言葉を力めて打ち消そうとする愛嬌に充ちていた」とあるが、これは、もつと「相手（私）
と話がしたい」という態度の表れであり、それが、まさに「……あなた大変黙り込んだま
ったのね」という「言葉」となつて外に現われ出るのである。（これは、奥さん自身、《先
生の事で》あれこれ話してみたいという思いがどこ潜在的にあつたということなのか
も知れない）。一方、「私」という人は、「……何か言うともまた議論を仕掛けるなんて、叱
り付けられそうですから」と答えると、「まさか」と奥さんが再び言ったとあるが、もち
ろん、大事なものは、これから先の「文章」である。

二九、もし奥さんが亡くなったら先生は（十七）其の二

二人はそれを緒口にまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題

にした。「……奥さん、先刻の続きをもう少し言わせて下さいませんか。奥さんには空な理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上の空で言ってる事じゃないんだから」。「じゃおっしゃい」、「……今奥さんが急になくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」、「……そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」、「……奥さん、私は真面目ですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」、「……正直よ。正直に言っただけに私には分らないのよ」、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」、「……何もそんな事を聞き直つても好いじゃありませんか」、「……真面目くさつて聞かなくとも好いじゃありませんか」、「……真面目くさつて聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「……まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急になくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白くない先生は、あなたが急になくなつたら後でどうなるでしょう。先生から見てもいいわ、あなたから見てですよ。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」、「……そりや私から私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そう言うのと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があつても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」、「……その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思いますが」、「……それは別問題ですわ」、「……やっぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」、「……私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんです。世間というより近頃では人間が嫌いになつていらるでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」、奥さんの嫌われているという意味がやつと私に呑み込めた。（本文）

*

*

さて、「私」という人は、突然、「……今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」と聞く。すると、奥さんは、「……そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」と答える。そこで、「私」という人は、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」と聞く。すると、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直つて聞かなくとも好いじゃありませんか」、「……真面目くさつて聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「……まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなつたら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白くない先生は、あなたが急にいなくなつたら後でどうなるでしょう。先生から見てもいいわ、あなたから見てですよ。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」と聞く。すると、奥さんは、「……そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが。そういうと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていま

すわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」と答える。

*

*

まず、「私」という人は、なぜ、このような「質問」をしたのかと問えば、それは、結局は、奥さんの「心の中」を確かめてみたかったからである。——例えば、先生は、前に、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」と言っていた。ほんとうにそうなのか？ それを奥さんに直接聞いて、奥さんの「心の中」を確かめてみたかった。——それは、本文では、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」と聞く。すると、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直って聞かなくても好いじゃありませんか」、「……真面目くさって聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」と答えるのであった。

すると、「私」という人は、再び、最初の質問に戻って、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどつちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」と聞く。——これは、まさに「……私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずである」が、なぜ、そうなっていないのか？ また、先生の「考え方」は、なぜ「厭世的な思想」を帯びてしまうのか？ それらの「疑問」を解くための「質問」でもあるが、それに対して、奥さんは、「……そりゃ私から見れば分つています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが。そういうと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」と答えるのであった。

つまり、「……私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ」、さらに加えて、「……私は嫌われてとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになっていくんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」と言っている。——だとすれば、「……私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずである」が、なぜ、そうなっていないのか？ また、先生の「考え方」は、なぜ「厭世的な思想」を帯びてしまうのか？ それらの直接の「……原因は奥さんにはない」ということになるのである。

三十、元は、ああじゃなかったんです（十八）其の一

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私

の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。——私は女というものに深い交際つぎあいをした経験のない迂闊うかつな青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた。奥さんに対して私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均ふへいという考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。(本文)

*

*

まず、最初は、「私」から見た「奥さん」の「感想や評価」になっているが、それは、「……私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった」とある。——まず、奥さんは、当時の「女学校」をしっかりと卒業しているのであり、それゆえ、「……奥さんの理解力や奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも」一応領けるとともに、「……その頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった」とすれば、その時々「流行やブーム」などにすぐに影響を受けて流されてしまうタイプの女性ではなく、どこか芯のある女性なのかも知れない。——一方、まだ若い「私」という人の「女性観」であるが、それは、「……私は女というものに深い交際つぎあいをした経験のない迂闊な青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた」とある。

これは、恐らく、多くの若い男性に共通した意識であり、まず、「男性」というものは、「……異性に対する本能から、(女性は)憧憬どうけいの目的物(あこがれの対象)」として常に女を夢みている」ものであるが、しかし、「……実際の女の前へ出ると、私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた」とある。——つまり、「……一方では、引き付けられ、一方では、反発する、これは、一体、どういう心理かという問題である」が、まず、一方では、引き付けられる、これは、まさに「本能的なもの」からであるが、一方では、男女の「脳」の違い等、そこから生じる実に様々な「意見の違い」などから反発し合う、そして、もう一つは、お互いに「自分の存在」を主張し合って反発し合うのである。……ところが、「奥さん」に対しては、そのような「反発心」、「……そんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均ふへいという考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた」とある。——これは、意味なく「反発し合う相手(女)」としてではなく、私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として「奥さんをそのまま素直に受け入れた」ということである。

三十、元は、ああじゃなかったんです(十八) 其の二

そこで、「……奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのだろうと言つて、あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだつて」、「……ええ言いました。実際あんなじゃなかったんだつて」、「……どんなだったんですか」、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」、「……それがどうして急に変化なすつたんですか」、「……急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」、「……奥さんはその間始終先生といつしよにいらしたんでしよう」、「……無論いしましたわ。夫婦ですもの」、「……じゃ先生がそう変つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……それだから困るのよ。あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言うだけで、取り合つてくれないんです」とある。(本文)

*

*

さて、この場面では、非常に「大事な言葉」が数多く出て来ますが、まず、最初は、「……あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだつて」、「……ええ言いました。実際あんなじゃなかったんだつて」、「……どんなだったんですか」と聞くと、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」とある。——つまり、先生という人は、前々から今のような状態だったのでなく、元は、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だった」ということであり、だからこそ、奥さん(当時のお嬢さん)は、その先生(当時は大学生)に強く心惹かれて、結婚をしたのである。そこで、「私」という人は、「……それがどうして急に変化なすつたんですか」と聞くと、奥さんは、「……急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」と答えるのであった。

例えば、「急に變化した」のであれば、その「原因」を見つけ出すのも比較的容易かも知れないが、一方、それが「段々に變化した」のであれば、その「原因」を見つけ出すことも難しいことになるのだろう。だからこそ、次のような「会話」が続くのである。——つまり、「……奥さんはその間始終先生といつしよにいらしたんでしよう」、「……無論いしましたわ。夫婦ですもの」、「……じゃ先生がそう變つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……それだから困るのよ。あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言うだけで、取り合つてくれないんです」とある。

さて、ここで最も「大事な言葉」はと言えば、その一つは、まさに「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」というこの「言葉」であり、(例えば、前に出て来た「夫婦喧嘩」などもまさにこの事なのである)。そして、もう一つは、まさに「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言うだけで、取り合つてくれないんです」というこの「言葉」

である。——つまり、奥さんは、「どうしてもその原因が知りたい」がために、「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」となるのであり、一方、先生の方は、逆に、「……何があつてもそのことだけは絶対に話すことは出来ない」と思っているからこそ、まさに「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからと言うだけで、取り合つてくれないんです」となるのである。これでは、どこまで行つても二人の「思い」は、「平行線」であるしかないのである。

三十、元は、ああじゃなかつたんです(十八) 其の三

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切らした。下女部屋にいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。「……あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然奥さんが聞いた。「いいえ」と私が答えた。「……どうぞ隠さずに言つて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんが言った。「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」。「……そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」、奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言ふんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなのおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」、奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めたとある。(本文)

*

*

さて、ここにも極めて「大事な言葉」が出て来ますが、その前に、奥さんは、「……あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然言い出した。「いいえ」と私が答えると、「……どうぞ隠さずに言つて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまた言った。「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」。「……そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」と言うのであった。——まず、奥さんは、「……私に責任があるとそう思われるのは身を切られるより辛い」と言い、また、「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」と言っている。つまり、奥さんは、夫(先生)のために「身も心も尽くしている」と言いたいのである。それだけ「夫(先生)のことを心の底から愛している」ということでもあるのである。

それは、まさに「その通り」であり、それに加えて、ここで何より「大事な言葉」というのは、それは、次の言葉になるのである。——つまり、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言ふんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなのおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」と、奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた、となるのである。

さて、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めます」からと。これは、もうどうにも行き詰まつての「捨て身」の訴えであり、たとえ「どんな欠点(悪い所)を露骨に指摘されようとも、また、どんなに聞くに堪えない罵詈雑言などを浴びせられようと、それを甘んじて受け入れる……」というような、まさに必死の「覚悟」の表れになるのである。それに対して、先生は、「……お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言ふんです」とある。——これは、極めて「大事な言葉」であり、つまり、奥さんには、文字通り、「何の欠点もない」のである。それゆえ、奥さんが、「……私にはどう考えても、考えようがないんですもの」と言うのも、もつともなことである。つまり、「……欠点はおれ(先生)の方にあるだけだ」と言っているが、それは、まさにその「言葉通り」なのである。……それでは、その「欠点」とは、一体、具体的には何かと問えば、その「ヒント」として、「……実は、少し思いあたることがある」と続くのである。

*

*

ちなみに、「……そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなくなるんです」とあるが、これは、前のところで、「先生と奥さんの喧嘩(言逆い)」があつた時の、その二人の「喧嘩(言逆い)」の「原因」こそは、まさに「この事」であり、一つは、「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません」、しかし、先生は、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言うだけで、取り合つてくれないうんです」。そして、もう一つは、「……私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めます」と言つても、先生は、「……お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだ」と言うだけであり、「……そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなくなるんです」と、奥さんは、ただ泣くばかりになつてしまふのである。

三一、実は、少し思いあたること(十九) 其の一

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私はその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に變つて来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かした。始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。——奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられたなかつた。底を割ると、かえつてその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、どうとう世の中まで厭になったのだらうと推測していた。けれどもどう骨を折つても、その推測を突き留めて事実とする事が出来なかつた。先生の態度はどこまでも良人らしかつた。親切で優しかつた。疑いの塊りをその日その日の情合で包んで、そつと胸の奥にしまつておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。「……あなたどう思つて？」と聞いた。「……私からあんなつたのか、それともあなたの言う人世観とか何とかいうものから、あんなつたのか。隠さず言つて頂戴」、私は何も隠す気はなかつた。

けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。「……私には解りません」、奥さんは予期の外れた時に見る憐れな表情をその咄嗟に現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。「……しかし先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしょう」と言った。(本文)、

*

*

さて、「……奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓(心)を動かし始めた」とある。そして、「……自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあった。——奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちっともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭になったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事が出来なかった」とある。——つまり、真の「原因」が一体何なのかは、奥さんにはどうしても「解りかねていた」のである。しかも、「……先生の態度は、どこまでも良人らしく、親切で優しくかった」のである。

奥さんは、その「疑いの塊り」をそつと胸の奥にしまっておいたが、その晩、その包みの中を私の前で開けて見せた。「……あなたはどう思つて?」、「……私からあんなつたのか、それともあなたの言う人世観とか何とか言うものから、あんなつたのか。隠さず言つて頂戴」と聞くのであつた。(もちろん、その両方とも違うのである)。それに対して、「私」という人は、「……私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこ存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた」とある。——つまり、「私」という人は、「……そこに私の知らないあるものが(きつと何かがあるに違いない)と信じていた」が、それが、一体、何であるかは、私も奥さんも未だ「知らない状態」にあつたということである。しかし、はつきりと言えることは、「……先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしょう」となるのである。……

三一、実は、少し思いあたること(十九) 其の二

奥さんは何とも答えなかつた。しばらくしてからこう言つた。「……実は私すこし思いあたる事があるんですけども……」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」と聞くと、奥さんは言い渋つて膝の上に置いた自分の手を眺めていた。「……あなた判断して下さつて。言うから」、「……私にできる判断ならやります」、「……みんなは言えないのよ。みんな言うところから。叱られないところだけよ」、私は緊張して唾液を呑み込んだ。「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する

少し前に死んだんです。急に死んだんです」、奥さんは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「……実は変死したんです」と言った。それは、「どうして」と聞き返さずにはいられないような言い方であった。「……それっ切りしか言えないのよ。けれどもその事があってから後のちなんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」、「……その人の墓ですか、雑司ヶ谷ぞうしがやにあるのは」、「……それも言わない事になってるから言いません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに變化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪たまらないんです。だからそ

*

*

さて、いよいよ「核心かくしんに迫るヒント」が登場して来るのである。それは、「……実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」、「……先生がああいう風ふうになった原因げんいんについてですか」、「……ええ。もしそれが原因げんいんだとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」と聞くと、「……あなた判断して下すって。言うから」、「……みんなは言えないのよ。みんな言うところから。叱しかられないところだけよ」、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、「……それっ切りしか言えないのよ。けれどもその事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」と言うのであつた。

さて、ここで最も「大事な言葉」としては、一つは、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、そして、もう一つは、「……その事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」となるのである。

つまり、大学時代に、非常に仲のいい友達が一人いたが、その友達が卒業する少し前に急に死んだ、実は変死したのである。しかし、なぜ「変死」したのか？ それは、「……私には解らないの」という言葉こそ、最も「大事な言葉」(キーワード)であり、奥さん(当時はお嬢さん)は、「その人が死んだ」ということだけは知らされたが、その人がどのような状態で死んでいたかなどの、それ以外のことは何一つ知らされてはいなかったのである。ここにこそ「大きな謎」が隠されていることになるが、それはともかく、奥さんは、「……その事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々変って来たのは。……それから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」となるのである。すると、「私」という人は、「……その人の墓ですか、雑司ヶ谷ぞうしがやにあるのは」と聞くと、奥さんは、「……それも言わない事になってるから言いません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに變化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪たまらないんです。だからそ

こを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」と聞くのであった。——つまり、奥さんにとつての「最大の疑問」は、「……人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」となるのである。それに対して、「……私の判断はむしろ否定の方に傾いていた」となるのである。

三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十）其の一

私は私のつかまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまた出来るだけ私によって慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合った。けれども私はもともと事の大根を攫んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事が出来なかった。従って、慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚束ない私の判断に縋り付こうとした。（本文）

*

*

さて、二人は、「……同じ問題（先生のこと）でいつまでも話し合った」が、しかし、「……私はもともと事の大根（大元）を攫んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事が出来なかった」とある。——つまり、私も奥さんも、その事の「大元」（ほんとうの原因）は、全く知らないでいた。あり、それゆえ、慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながらも、奥さんはどこまでも手を出して、覚束ない私の判断に縋り付こうとした。——つまり、奥さんは、先生がなぜ変わってしまったか？ その「真の原因」を何があても知りたくて、覚束ない「私の判断」に縋り付こうとしていたのである。

三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十）其の二

十時頃になって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までの凡てを忘れたように、前に坐っている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格子を開ける先生を殆ど出合い頭に迎えた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行った。下女だけは仮寝でもしていたと見えて、ついに出て来なかった。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜った涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた人の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかったならば、（実際それは詐りとは思えなかったが）、今までの奥さんの訴えは感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかった。もつともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。（本文）

* *
さて、夜十時頃に「先生」が帰って来る。それは、「……十時頃になって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐っている私をそつちのけにして立ち上がった。そうして格子を開ける先生をほとんど出合い頭に迎えた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行つた」とある。——これは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、考えられることは、「奥さん」というのは、まさに夫の「妻」であり、それゆえ、その「夫の帰宅」というものには、無意識のうちにも、どこか「心待ち」にするようなところがあるとともに、一般的に、その「夫の帰宅」には敏感に反応しやすいものなのである。ましてや、奥さんは、夫（先生）を心から愛しているのである。——もちろん、それだけではなく、今晚の「奥さん」は、「私」という人と「先生のこと」でいろいろ話をすることによって、自分が「先生に嫌われているのではなく、むしろ愛されている」ことを「私」から聞かされて、また、先生が変わつた原因にしても、自分が「直接の原因」ではないらしいことを知って、むしろ「ほっとした」のである。だからこそ、「……先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた（となるのである）。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜つた涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた」とある。が、それは、今までの「疑いの塊り」を「私」という人に打ち明けることによって、かえつて「心の重荷」が取り除かれ、むしろ「心が軽くなつた」ということである。

三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十） 其三

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合が抜けやしませんか」と言った。——帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰させて気の毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒が這入らなくて気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそう言いながら、先刻出した西洋菓子の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂へ入れて、人通りの少ない夜寒の小路を曲折して賑やかな町の方へ急いだ。（本文）、——この場面は、先生と奥さんとがいかにも「幸せな夫婦」のように見えているのである。

* *
私はその晩の事を記憶のうちから引き抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実を言うと、奥さんに菓子を貰つて帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日午飯を食いに学校から帰つて来て、昨夜机の上に載せて置いた菓子の包みを見ると、すぐその中からチョコレートを塗つた鶯色のカステラを出して頬張つた。そうしてそれを食う時に、必竟この菓子を私にくれた二人の男女は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わつた。（本文）

* *
さて、ここで「大事な言葉」としては、「……私はその晩の事を記憶のうちから引き抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実を言うと、

奥さんに菓子を買って帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった」とある。——それは、一体、何故なのかと問えば、それは、若しも「……先生が自殺という形で亡くなるということがなければ、恐らく、その晩のことを思い出すようなこともなかったに違いない」とともに、今もなお、「……必竟この菓子を私にくれた二人の男女は、幸福な一对として世の中に存在しているのだ」と、私は思い続けていたに違いないということである。

三三、秋が暮れて冬が来る（二十）

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅へ出這りをするついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだ。それまで繻絆というものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであった。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえって退屈凌ぎになって、結局身体のだ位ぐんいの事を言っていた。——「……こりゃ手織りね。こんな地の好い着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪いのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭で針を二本折りましたわ」、こんな苦情を言う時ですら、奥さんは別に面倒くさいという顔をしなかった。（本文）

*

*

さて、先生とは、夏、鎌倉の「海岸」（海水浴場）で初めて出逢い、その後、東京に帰って来てからは、九月の「新学年」以降、「私」という人は、先生の宅を頻繁に出這りするようになり、九月、十月、十一月、そして、今は、十二月、秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかったとある。そして、私は先生の宅へ出這りをするついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだとある。——これは、奥さん（当時のお嬢さん）は、いわゆる「女学校」に通いながらも、一方では、「縫いもの」（仕立て方）などを習いに通っていたのである。というのも、当時は、当然のことながら、まだ「ミシン」などは一般家庭には普及しておらず、すべては「手縫い」であり、それがここで役立っているということである。

*

*

三四、父の病氣のことで国へ帰る

三四、父の病氣のことで国へ帰る（二十一）

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。現に父は養生のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで来たように客が来ると吹聴していた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った。家内のもは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間があった。私は学期の終りまで待つていても差支えあるまいと思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗めた私は、どうしよう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。（本文）

*

*

さて、今度は「私」という人の「家族」の問題が出てくるが、それは、まず、「……母から受け取った手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子で、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった」とある。そして、「……父はかねてから腎臓を病んでいたが、父のこの病は慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。（中略）、その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った。家内のもは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになった」とある。

まず、この「私」という人の「家族」構成であるが、それは、父や母の「両親」をはじめ、九州で働く「長男」と、大学生である「私」（次男）と、そして、もう一人は、他国（他県）に嫁に行き、今は妊娠中の「妹」（長女）の、全部でこの「五大家族」から成るものである。——そして、そのうちの「父親」が、まさに慢性的「腎臓病」を患つていて、母の手紙によると、「……庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った」ということで、家族は、最初、軽い「脳溢血」だろうと思ひ違ひをして、そのような手当をしたが、医者の話だと、それは、やはり「持病（腎臓病）の結果」だろうという判断を得て、初めて「卒倒」と「腎臓病」とを結び付けて、考えるようになるのであった。

それでは、なぜ慢性的「腎臓病」なのか？ その「理由」の一つとしては、例えば、突然の「脳溢血や心筋梗塞」などでは余りに話が急過ぎて、その病状に応じた「話の展開」が出来にくいと共に、もう一つは、恐らく、先生の「奥さん」（元お嬢さん）の「母親」（軍人の未亡人）も、同じ病氣で亡くなっているという設定にして、その両者を親密に「関連付ける」ことで、作者（夏目漱石）は、いわば「話の展開」を巧みに組み立てているの

である。

三五、先生宅に暇乞いを兼ねて金を借りに行く(二十一)

先生は少し風邪の気味で、座敷へ出るのが臆劫だと言って、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸から冬に入って稀に見るような懐かしい和らかな日光が、机掛けの上に射していた。先生はこの日当たりの好い室の中へ大きな火鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盥から立ち上る湯気で、呼吸の苦しくなるのを防いでいた。——「……大病は好いが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものですね」と言った先生は、苦笑しながら私の顔を見た。先生は病氣という病氣をした事のない人であった。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなつた。「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」、「……そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」、私は先生の言う事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。「……そりゃ困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」、先生は奥さんをお呼びで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それは奥の茶箆笥か何かの抽出から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭重に重ねて、「……そりゃご心配ですね」と言つた。「……何遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。「……手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」と聞くと、「ええ」と応え、先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病氣で亡くなつたのだという事が始めて私に解つた。「……どうせむずかしいんでしょう」と私が言つた。「……そうさね。私が代られれば代つてあげても好いが。——嘔気はあるんですか」、「……どうですか、何とも書いてないから、大方はないでしょう」、「……吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんが言つた。私はその晩の汽車で東京を立つた。(本文)

*

*

まず、先生は、少し風邪気味で、「座敷」(茶の間)へ出るのが臆劫だと言って、私を先生のいるその「書齋」へと通した。そして、先生は、「……大病は好いが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものですね」と言つて、苦笑しながら私の顔を見たという。一方、病氣らしい病氣をした事のない先生の言葉を聞いて、私は笑いたくなつた。そして、「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」と言つと、先生は、「……そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」と言うのであつた。

さて、これらは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。——まず、われわれ人間にとつて何よりも「恐いもの」は、それは、自分が「死ぬ」ということである。自分にとつて、「死ぬ」こと以上に怖いものは、この世に何もないのである。それゆえ、「死」に直結しない「病氣」であれば、多くの場合、それほど「怖い」とは思わないものである。むしろ、何の病氣であれ、誰でも「真平御免」ではあるのである。だからこそ、「私」という人は、まさに「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」と言うのである。つまり、「病氣」で苦しむのは、誰でも「真平御免」

ではあるが、それ以上に「真平御免」なのが、まさに「自分が死ぬ」ということである。これが最も一般的な「考え方」であるが、それは、この世に「一秒でも長く生きていたい」と願う人たちの心から自ずと生じて来る「考え方」である。……

一方、「先生」という人には、いわば「自殺願望」というものが潜在的にあり、それゆえ、先生は、「……大病はいいが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものですね」と言ったり、また、「……そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてゐる」と言うのである。それは、「……大病ならば、まさに『死ぬる』が、風邪や（大病ではない）病気などでは、ただ『苦しむ』だけであつて、とても『死ぬる』からであり」、だからこそ、先生は、「……（死ねない）病気になるくらいなら、（死ぬる）死病に罹りたいと思つてゐる」という「言葉」になるのである。それに対して、「私」という人は、「……私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた」とある。それは、つまり、「……先生は、何か冗談か、或いは、自分をからかうために、そんなことを言つてゐるのだろう」と思つて、軽く聞き流してしまつたからである。……といふのも、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）のその奥深くに、まさか「自殺願望」が棲み付いてゐるなどとは、夢にも、また、露ほども決して思へなかつたということである。

*

*

次に、「私」という人は、「……すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た」とある。すると、先生は、「……そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」と言う。先生は、奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それは奥の茶箆筒か何かの抽出から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭重に重ねて、「……そりやご心配ですね」と言つたとある。——まず、父の病気の経過が面白くない様子なので、そのことが日ごとに心配になり、結局、国へ帰る決心をしたが、そのために、国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。すると、先生は、「……そりや困るでしょう」といふことで、快くお金を立て替えてくれて、奥さんも、「……そりやご心配ですね」と、心やさしく言つてくれるのであつた。

すると、先生は、「……何遍も卒倒したんですか」と聞いて来た。これは、先生の奥さんの「母親」が同じ病気で亡くなつていたので、その「腎臓病」の症状については、よく知つていたということである。すると、「私」という人は、「……手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」と聞くので、先生は、「ええ」と答えて、先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなつたのだという事が始めて私に解つたということになるのである。そして、「……どうせ（治るのは）むずかしいんですよ」と私が聞くと、先生は、「……そうさね。私が代られれば代つてあげてもいいが」とあるが、この「……私が代られれば代つてあげてもいいが」といふのは、実に不思議な返答であるが、これは、先生の心の奥深くには「自殺願望」があつて、それがこのようなところにもふと姿を表すのである。そして、「……嘔気はあるんですか」と先生が聞くので、「……どうですか、何とも書いてないから、大方ないんですよ」と答えると、今度は、「……吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんが言つたとある。これは、奥さんも「腎臓病」のことは、当然のことながら、「母親」の看病等で、誰よりもよく「熟知してゐた」といふことである。そして、私は、その晩の汽車で東京を立つた、

となるのである。

三六、父の病氣は思ったほど悪くはなかった（二十二）

父の病氣は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床の上に胡坐をかい、
「……みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じょうとしている。なにもう起きてもいいの
さ」と言った。しかもその翌日からは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせて
しまった。母は不承無性に太織の蒲団を畳みながら、「……お父さんはお前が帰って来
たので、急に気が強くなるんだよ」と言った。私には父の挙動がさして虚勢を張って
いるようにも思えなかった。——私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の
事がある場合でなければ、容易に父母の顔を見る自由の利かない男であった。妹は他国へ嫁
いだ。これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。兄妹
三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしている私だけであった。その私が母のいい
付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰って来たという事が、父には大きな満足で
あった。——「……これしきの病氣に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山
な手紙を書くものだからいけない」、——父は口ではこう言った。こう言つたばかりでな
く、今まで敷いていた床を上げさせて、いつものような元気を示した。「……あんまり軽
はずみをしてまた逆回すといけませんよ」と言う、私のこの注意を父は愉快そうにしかし極
めて軽く受けた。「……なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」と言う。
実際、父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じ
なかった。ただ顔色だけは普通の人も大変悪かったが、これはまた今始まった症状で
もないので、私たちは格別それを気に留めなかった。（本文）

*

*

さて、父の病氣は思ったほど悪くはなかった。そして、着いた時は、床の上に胡坐をか
いていたが、翌日からは、母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。
一方、母は「不承無性」（しぶしぶ）太織の蒲団を畳みながら、「……お父さんはお前
が帰って来たので、急に気が強くなるんだよ」と言った。——むろん、その通りだと
思うが、息子が帰って来て素直に「嬉しかった」とともに、もう一つの理由としては、少
しでも元氣なところを見せて、息子に余計な心配をかけまいという気持ちもあったのかも
知れない。——ところで、私の兄は、ある職を帯びて遠い九州にいた。また、妹は、他国
へと嫁いだ。それゆえ、両方とも「万、一の場合」でもなければ、家に容易には帰って来ら
れないのである。つまり、兄妹三人のうちで、一番便利なのは、やはり書生をしている
私だけであり、その私が母のいい付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰って来た
という事が、父には大きな満足であったとある。

さて、この「……父には大きな満足であった」というのは、まず、「……親の言うこと
を聞いて、素直に帰って来てくれた」ことが、少しでも自分のことを気に掛けて心配して
くれているのかと思つて、素直に「嬉しい」のである。——例えば、子供も大人になると、
何だかんだと理由を付けて、帰ってこないことも多く、それは、親からすれば、どこか子
供に見捨てられたような、そのような「淋しい」感じを抱くことにもなるのである。そし
て、もう一つは、父親は、「……自分の病氣はすでに末期近くで、いつどうなるか分から

ないことは自ずと感じている」のであり、その「心細さや淋しさ」などから、また、元気で生きている間に、息子に逢えたことが素直に「嬉しい」ということにもなるのだろう。そして、父親は、「……これしきの病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山（大げさ）な手紙を書くものだからいけない」と言っているが、これは、息子に「気を遣うこと」ではあるが、実際、この時は、まだ「元氣そうにしていた」のである。一方、「私」という人は、先生からこの「病気の怖さ」を聞かされていたので、父親のことを心配して、「……あんまり軽はずみをしてまた逆回すといけませんよ」と注意を促すが、父親は、「……なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」と言って、極めて軽く受け流した。——それは、「……実際、父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのです、私たちは格別それを気に留めなかった」とある。——もちろん、この「病氣」（腎臓病）の最大の「怖さ」は、本人にも「自覚症状」があまりないということであり、今回倒れたということは、やがて「何回も倒れる」ことが続く前ぶれでもあり、その末期症状は、もうそこまでやって来ているのである。

三七、先生にお礼の手紙を書く（二十二）

私は先生に手紙を書いて恩借の礼を述べた。正月上京する時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わった。そうして父の病状の思ったほど陰悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈も嘔気も皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪についても一言の見舞を付け加えた。私は先生の風邪を実際軽く見ていたのである。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の噂などをしながら、遥かに先生の書齋を想像した。「……こんど東京へ行く時には椎茸でも持つて行つてお上げ」、「……ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うかしら」、「……旨くはないが、別に嫌いな人もないだろう」と言うのであった。私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であった。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかったの、（より）驚かされた。先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一という私と先生の間で書信の往復がたびたびあったように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わっておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰っていない。その一通は今言うこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長いものである。——父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外へは出なかつた。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一を氣遣つて、私が引き添うように傍に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて応じなかつた。（本文）

*

*

まず、「私」という人は、故郷に帰つてから、手紙で先生に「恩借」（好意で金銭を借

り受けたこと)の礼を述べたとある。これは、当然のことながら、当時は、まだ電話も一般には普及しておらず、急な時は、電報、ふだんは、手紙かはがきで連絡を取り合っていたのである。金銭は、正月上京する時に持参して返済すること、また、先生も気にしているだろうと思つて、父親の「病状」については、「……父の病状は、思ったほど険悪ではなく、この分なら当分安心であり、眩暈も嘔気も皆無なことなどを書き連ねて、そして、最後に先生の風邪(かぜ)についても一言の見舞を付け加えた。私は先生の風邪(かぜ)を實際軽く見ていたので」という内容になるが、最後の「……私は先生の風邪を實際軽く見ていたので」とすれば、実際の先生はその「風邪」をこじらせていたのかも知れない。そして、先生からの返事が来た時には、私はちよつと驚かされたのである。——これは、例えば、何らかの用件で手紙を出した場合には、その「用件」についての「返答」が返つて来ても何の不思議も特別なこともないが、これという「用件」もないのに、その「返信」が返つて来るのは、「……先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった」とある。これは、——例えば、大好きな芸能人やその他の人にファンレターやその他の手紙などを書いたが、恐らく、返事などは返つてこないだろうと思つていたら、何と丁寧な手紙が送られて来て、非常に嬉しかったというような心理と基本的には全く同じことである。

*

*

さて、先生と私との間の「手紙」のやり取りは、まず、最初は、十二月の中頃(冬休み前)、私の方から先生に「恩借の礼」や「父親の病状」などを書いた手紙を一通送つた。それに対して、先生の方からは丁寧な「返信の手紙」が送られてきた。この時は、それだけであったが、翌年、「私」という人は、卒業論文に専念して、やがて無事に大学を卒業する。そして、その「卒業証書」を持って、七、八月、再び、故郷へと帰ることになる。父親の病状は、小康な状態を保っていたので、この頃、先生にこちらの様子を書いた「手紙」を一通書いて送つたが、その「返信の手紙」は送られて来なかった。

一方、七月、明治天皇のご病気の報知があり、やがて、七月三十日、崩御の報道が伝えられると、父親は、その新聞を手にして、「……ああ、ああ、天子様もとうとうお隠れになる。己も……」と、父の元氣は、一気に衰えて行くのである。そこで、母親は、父親を安心させるためにも、「……お前の先生先生という方にも(就職先を)お願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言われて、そこで仕方なく、先生に「手紙」を書くが、いつまで経つてもその返事は送られて来なかった。この時、先生は、自分をどうしたらよいか深く悩んでいて、私の就職先どころではなかったということである。

そして、九月、「私」という人は、東京に帰京しようとするが、突然、父親が風呂場で倒れて帰れなくなる。やがて、九月十三日、明治天皇の御大葬の日、「乃木大将の殉死」という報道が流れる。翌日、先生から、「……ちよつと会いたいが来られるかという」内容の「電報」(急報)を受ける。「私」という人は、父の病状が悪化して、「……行かれない」という「電報」(返電)と(それに関連した詳細の手紙)を出すと、今度は、二日後、先生は、「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打つて来る。

その後、しばらくして、「私」という人は、父親の「看病」をしている時に、先生からの実に長い「手紙」を受け取るが、それがまさに「先生の遺書」であり、本文では、「……先生が死ぬ前にとくに私宛で書いた大変長いもの」というものであり、これらが「先生

と私の間」での「手紙や電報」のやり取りの全部になるのである。

三八、父の将棋の相手をする（二十三）其の一

私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かった。二人とも無精な性質なので、炬燵にあたったまま、盤を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、わざわざ手を掛蒲団の下から出すような事をした。時々持駒を失くして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付け出して、火箸で挟み上げるといふ滑稽もあった。――「……碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤はいいね、こうして楽に差せるから。無精者には持って来いだ。もう一番やろう」、父は勝った時は必ずもう一番やろうと言った。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうと言った。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であった。始めのうちは珍らしいので、この隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴って、若い私の気力はそのくらいな刺戟で満足できなくなった。私は金や香車を握った拳を頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくびをした。（本文）

*

*

さて、私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かったとある。――例えば、炬燵の中に足を入れて、父親と「息子」（大学生）との二人が向き合って行なう遊びとしては、やはり「将棋か囲碁」になるかと思うが、しかし、「……碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤はいいね、こうして楽に差せるから。無精者には持って来いだ。もう一番やろう」と、父は勝った時は必ずもう一番やろうと言い、そのくせ負けた時にも、もう一番やろうと言った。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であったとある。一方、「息子」（大学生）の方は、「……始めのうちは珍らしいので、この隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴って、若い私の気力はそのくらいな刺戟で満足できなくなった」とある。そこで、私は金や香車を握った拳を頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくび（退屈の仕草）をしたり、或いは、次のようなことを考えるようになる。

三八、父の将棋の相手をする（二十三）其の二

私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。――私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどっちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかった。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭といるのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸と言いたい。肉のなかに先生の力が喰い込んでいると言っても、血のなかに先生の命が流れていると言っても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまた言うまでもな

く、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。(本文)

*

*

さて、今度は、「父親」と「先生」との比較対照になるが、それは、「……私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどっちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた」とある。——まず、「……両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどっちも零であった」とある。これは、一言で言えば、まさに「社会的な活動」(つまり世の中に出て「仕事」など)を行なっていないからである。

また、「……この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた」とあるが、それは、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、「父親」は、それらの様々な「教養」なども先生ほどには豊かではなく、また、人間としての「成熟度」なども先生ほどではないという感じとして、それゆえ、この世のいろいろな問題であれこれと人生を深く「語り合える相手」としては物足りない、と、そのように「父親」を見ているのである。——一方、先生に対しては、逆に、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、それらに対する様々な「教養」などを豊かに持ち合わせていると共に、人間としても真に「内的成長(成熟)」している、この世のいろいろな問題であれこれと人生を深く「語り合える相手」である、と見ているのである。だからこそ、「私」という人は、その「先生」という人に、うそ偽りなく、強く心惹かれているとともに、次のようにも語るのである。

*

*

つまり、「……ただ頭というのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸と言いたい。肉のなかに先生の力が喰い込んでい、と言つても、血のなかに先生の命が流れていると言つても、その時の私には少しも誇張でない、ように思われた」。だからこそ、「私」という人は、「……私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた」となるのである。そして、「……私は父が私の本当の父であり、先生はまた言うまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた」とあるが、これは、本来であれば、「私」という人間の、その「……肉のなかに本来実の『父親の命』が喰い込んでい、るはずのものであるが、しかし、実際は、そうではなく、全くの赤の他人に過ぎない「先生」という人の、その「先生の力」が自分(私)の肉のなかに喰い込んで「力」となっているとともに、「先生の命」が自分(私)の血のなかに流れて赤き「血潮」となっているからこそ、自分(私)の、「……漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動が聞こえるが、それは、先生の力で強められているように感じた」となるのである。

そして、全くの赤の他人に過ぎない「先生」からは、意外なほど大きな「影響」を受けているのに比べて、一方、実の「父親」からは、これという「影響」をあまり受けていないことを知って、まるで「初めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いている」のである。——むろん、これは、「私」という人がまだ「若い」ので、極めて「上昇志向」(ここでは「自分を少しでも成長させようとする気持ち」)がより強いために、全くの赤の他人に過ぎない「先生」ではあるが、その「先生」の方に、「私」という人は、実の「父親」よりも「より強く心惹かれて、いる」ということである。

三九、東京へ帰りたいたい気持ちが生じて来る(二十三)

私がゆる事もなく退屈のつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになって来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほやもてな歓迎されるのに、その峠を定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持って帰った。昔で言うと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼に留とまった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなつた。

父の病氣は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにならぬ遠くから相当の医者いしやを招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知つている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つと言ひ出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。「……もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母が言った。「……まだ四、五日いても間に合うんだらう」と父が言った。私は自分の極きめた出立しゅつたつの日を動かさなかつた。(本文)

*

*

さて、「……私がゆる事もなく退屈のつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになって来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほやもてな歓迎されるのに、その峠を定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである」とある。——例えば、一般に、最初は、大事や親切にされても、やがて、普通ふつうになり、最後には、嫌いやがられるようになって行く。これは、結局、今までの生活の中に「第三者」(元家族でも)入つて来ると、今までは生活が変わり、最初のうちはそれでよくても、やがて、普通ふつうになり、最後には、嫌いやがられるのも、「第三者」が居いるといふこと自体わづらが煩わづらわしいことになり、その「第三者」のいない元の「今までの生活に戻したい」といふ気持ちになるからである。むろん、そうならない場合も、多々、あるといふことである。

それはともかく、「……私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持つて帰った。昔で言うと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持つて

帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留まった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなった」とある。——まず、「儒者の家」というのは、いわば「昔からの古い保守的な考え方をする家」のなかに、切支丹キリシタン（それは「西洋風の新しい考え方」の臭いにおを持ち込むために、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかった。——つまり、「私」という人の「……ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが父や母とは違っているのである。

むろん、「……私はそれを隠していたが、元々身に着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留まった。私はつい面白くなくなった。それは、父や母に理解してもらえないからである。だから、早く東京へ帰りたくなった」となるのである。——しかも、父の病気は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。私は、冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にしたのである。

*

*

四十、東京へ戻る

四十、東京へ戻る（二十四）

東京へ帰ってみると、松飾はいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。——私は早速先生のうちへ金を返しに行った。例の椎茸もついでに持って行った。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれと言いましたとわざわざ断って奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあった。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病気について、色々掛念の問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事を言った。「……なるほど容体を聞くと、今が今どうという事も無いようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」、先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知っていた。「……自分で病気に罹っているながら、気が付かないで平気でいるのがあの病の特色です。私の知ったある士官は、とうとうそれでやられたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝ていた細君が看病をする暇も何にもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいと言つて、細君を起したぎり、翌る朝はもう死んでい たんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思つてたんだつて言うんだから。」（本文）

*

*

さて、ここで「面白い」と思うのは、「……私は早速先生のうちへ金を返しに行った。例の椎茸もついでに持って行った。椎茸は、新しい菓子折に入れてあった。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、『こりや何の御菓子』と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた」とある。——まず、家で栽培した「椎茸」を「新しい菓子折」に入れて持つて行った。当然、奥さんは、中には「何らかの菓子類」が入っているのだらうと思つた。ところが、その「新しい菓子折」を手を持ってみたら、何らかの「菓子類」にしては、あまりに「軽い」ので、ほとんど無意識のうちに、「こりや何の御菓子」と聞いたのである。

例えば、まだ小さな子供であれば、誰かから包装された「何か土産やプレゼントなど」をもらった時に、子供は、とかく無遠慮に「これなーに？」とか、「この中身なーに？」などと、いきなり聞いたりするものであるが、そのような「感じ」があったということである。——つまり、ふつう大人であれば、気を遣つて、手に持つてあまりに軽いからと言って、いきなり「こりや何の御菓子」などと無遠慮の「質問」はしないものであるということである。そういう意味では、そういうことにはあまりこだわらない、さっぱりとした、「……極めて淡泊な小供らしい心を見せた」となるのである。

次に、先生も奥さんも心配していたであろう、私の「父の病気」についての質問がいろいろあつたが、その中で、先生は、「……なるほど容体を聞くと、今が今どうという事も無いようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」と言つた、先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知つていたとある。そして、実例を挙げて、この「病気」（腎臓の病）がいかに「恐ろしいものか」（それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病であること）を語るのであつた。

四一、父の病気についての談義が続く（二十四）

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。「……私の父もそんなになるでしょうか。ならんとも言えないですね」、「……医者は何と言うのです」、「……医者は到底治らないと言うんです。けれども当分のところ心配はあるまいとも言うんです」、「……それじゃ好いでしよう。医者がそういうのなら。私の今話したのは気が付かずに行った人の事で、しかもそれが随分乱暴な軍人なんだから」と言うのであった、

私はやや安心した。私の変化を凝と見ていた先生は、それからこう付け足した。「……然し人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆いものです。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」と言うので、「……先生もそんな事を考えてお出ですか」と聞くと、「……いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」と、先生の口元には微笑の影が見えた。「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言うので、「……不自然な暴力って何ですか」と聞くと、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」と言う。「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですね」と言うのと、「……殺される方はちつとも考えていかなかった。なるほどそう言えばそうだ」と言うのであった。

その日はそれで帰った。帰ってから父の病気はそれほど苦にならなかった。先生の言った自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾度か手を着けようとしては手を引つ込めた「卒業論文」を、いよいよ本式に書き始めなければならぬと思ひ出した。（本文）

*

*

まず、私の「父の病気」については先生との会話のなかで、「……医者は何と言うのです」と聞くので、「……医者は到底治らないと言うんです。けれども当分のところ心配はあるまいとも言うんです」、「……それじゃ好いでしよう。医者が言うのなら。……」と言うのであった。そのあとに、先生は、こう付け足したとある。「……然し人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆いものです。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」、「……先生もそんな事を考えてお出ですか」と聞くと、「……いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」と、先生の口元には微笑の影が見えた。そして、「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言うので、「……不自然な暴力って何ですか」と聞くと、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」と言う。「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですね」と言うのと、先生は、「……殺される方はちつとも考えていかなかった。なるほどそう言えばそうだ」と言い、その日はそれで帰ったとある。

まず、われわれ人間の「死に方」としては、一つは、何らかの「病気」で亡くなる場合、一つは、何らかの「事故」や「自然災害」などに遭遇して亡くなる場合、一つは、人や動物などに「殺害されて」亡くなる場合、一つは、薬や食中毒或いは医療ミスその他などで亡くなる場合、そして、もう一つは、自ら「命を絶って」（自殺をして）なくなる場合、

その他、いろいろとあるかと思うが、先生は、「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言う。すると、「私」という人は、「……不自然な暴力で何ですか」と聞くと、先生は、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょ」と言う。「私」という人は、「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですわね」と言うので、先生は、「……殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそう言えばそうだ」とあるが、ここで最も「興味深い」のは、先生は、「不自然な暴力」としては、「……殺される方はちつとも考えていなかった」ということであり、先生が考えていたのは、まさに「……自ら命を絶つ自殺の方ばかりであった」ということである。……こういうところにも「先生の心」が見え隠れするのである。

一方、「私」という人は、「……帰ってからも父の病気はそれほど苦にならなかったし、また、先生の言った自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を受けただけで、後は何らのこだわりも私の頭に残さなかった」とある。それは、まだ「若い」ので、「死の問題」は、所詮他人事に過ぎないのである。そして、「私」という人の「頭の中」(或いは「心の中」)にあったものは、むしろ「卒業論文」のことであり、「……いよいよ本式に書き始めなければならないと思いついた」ということである。

四二、卒業論文に専念する(二十五) 其の一

その年の六月に卒業する筈の私は、是非ともこの論文を成規通り四月一杯に書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑ぐった。他のものは余程前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあった。私はその決心でやり出した。そうして忽ち動けなくなった。今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけはほぼ出来上っている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論を一寸付け加える事にした。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、いよいよ本格的に「卒業論文」に取りかかることになるが、それは、「……その年の六月に卒業する筈の私は、是非ともこの論文を成規通り四月一杯に書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑ぐった(大丈夫の想いが揺れた)。他のものはよほど前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあつた」とある。そして、実際、「……私はその決心でやり出したら、忽ち動けなくなった」。それは、「……今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけはほぼ出来上っている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を

並べて、それに相当な結論を一寸付け加える事にした」とある。——これは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）だけであれこれ思ったり考えたり空想したりすることは比較的容易にでき得るとしても、それを実際に「卒業論文」としてより、正確かつより、厳密な「文章」として書き連ねていく作業ともなれば、それはもう極めて大変なことになるといふことであり、それゆえ、仕方なく、「……論文の問題を小さくした」ということである。

四二、卒業論文に専念する（二十五）其の二

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうと言った。狼狽した気味の私は、早速先生の所へ出掛けて、私の読まなければならぬ参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうと言った。しかし先生はこの点について毫も私を指導する任に当らうとしなかった。「……近頃はあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」、先生は一時非常の読書家であったが、その後どういふ訳か、前ほどの方面に興味が無くなつたようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思ひ出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。——「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしょう。それから……」、「……それから、まだあるんですか」、「……まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないで恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでも本を、読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と、先生の言葉はむしろ平静であった。世間に背中を向けた人の苦味を帯びていなかっただけに、私にはそれほど手応えもなかつた。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰つた。（本文）

*

*

まず、「……私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうと言つた」とある。それでは、それは、一体、どのような「学問」かと問えば、それは、本文には「何も明記されていない」ので分かりようもないが、ただ、理工系ではなく、文化系であり、法学をはじめ、政治学、経済学、教育学、文学や芸術学、語学、社会学、心理学、歴史学、その他、いろいろあるかと思うが、先生自身は、自らを「思想家」と見ているのであり、それゆえ、恐らく、思想や倫理などを扱う「哲学」（か文学）のようなものではないかと思う。

それはともかく、「私」といふ人は、「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしょう。それから……」、「……それから、まだあるんですか」、「……まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないで恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでもみよ

うという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と、先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味(くみ) (苦言) を帯びていなかっただけに、私にはそれほど手応えもなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰つたとある。

それは、先ず、まだ若い「私」という人は、まさに「向上心」に燃えているのであり、それゆえ、「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」と聞きたくなるのも、当然であるが、一方の「先生」は、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしよう」と言い、また、「……以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らない恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と言うのであつた。

むろん、これには大きな「理由」があるのであり、それは、先生自身は、本来は、社会に出て、出来るならば何らかの活動をしたと思つていた時期もあり。そのために、先生は一時非常の読書家でもあつたが、しかし、先生には、どうしても「社会に出て活動したくとも活動でき得ないような余りに重い『心の傷』(罪) を背負い込んでしまつた」がために、読書に対する「意欲」も次第に衰えてしまつたのである。——一方、それに対して、「私」という人は、「……私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずには帰つた」とある。これは、まさに「向上心」に燃えている若者から見れば、何か「物足りなさ」を感じたということである。

四二、卒業論文に専念する(二十五) 其の三

それからの私はほとんど論文に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前に卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一人は締切の日(しめきり) に車で事務所へ駆けつけて漸く間に合わせたと言つた。他の一人は五時を十五分ほど後(おく) らして持つて行つたため、危く跳ね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたと言つた。私は不安を感じると共に度胸を据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫に這入つて、高い本棚のあちらこちらを見廻した。私の眼は好事家が骨董でも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさつた。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を南へ更えて行つた。それが一仕切経つと、桜の噂(うわさ) がちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭(むち) うたれた。私はついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨がなかつた。(本文)

*

*

さて、この「場面」は、学生にとつて「卒業論文」を書くということが、いかに大変な「一大事業」であるかを友だちの実例などを挙げて書き記しているものであり、「私」自身も、毎日毎日、「論文」に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しみ、そして、「……ついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、あれほど頻繁に行き来していた、先生の敷居をも跨がなかつた」ということである。

ちなみに、当時の大学では、卒業論文提出が「四月一杯」までであり、また、口述試験は、「六月」にあり、そして、卒業式は、ふつう「七月」となっていたそうである。が、ただ、この夏目漱石の『こころ』という作品の中では、卒業は「六月」となっている。

四三、論文を完成させ、先生宅を訪ねる（二十六）

私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった。私は籠を抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一目に見渡しなから、自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行った。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、萌るような芽を吹いていた、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかかそうに日光を映していたりするの、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍らしさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、「……もう論文は片付いたんですか、結構ですね」と言った。私は、「……お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」と言った。——実際、その時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、これから先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々した。先生は何時もの調子で、「なるほど」とか、「そうですね」とか言ってくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であった。それでもその日私の気力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた。（本文）

さて、「……私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった」とある。だとすれば、それは、まさに「五月」のことであり、「……私は籠を抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした」。そして、「……私はすぐ先生の家へ行った」とある。——これは、「卒業論文」を完成させるために長く「部屋」に閉じ籠められていた状態から、やっと解放されて、行きたくともずつと我慢していた、その「先生の家」へとすぐに出かけたが、その道々には枳殻の枝の上に、萌るような芽が吹いていたり、また、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかかそうに日光を映していたりするの、私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍らしさを覚えた、とある。

例えば、われわれ人間というのは、若しも貪欲な「利害損得」などに振りまわされている「目」で「自然」を見た場合、例えば、仕事やその他などに追われている人たちは、まわりの「自然の風景」などをしみじみ見ることもなければ、ましてや道端の「タンポポの花」などには目もくれないだろう。そんなものは、腹の足しにもならなければ、一円にもならないからである。そんなものよりも、遙かに仕事やその他の方が遙かに大事だからである。むろん、それは、それで大事なことではあるが、しかし、それでは、「自然」というもの（敢えて「美」というもの）は、永遠に見えてはこないものである。

つまり、大事なことは、この世（俗世）の実に様々な「利害損得」などに振りまわされ

ている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で「対象」そのものを見ること
によってこそ、初めて、あるがままの「自然の風景」（その「美しさ」）がはつきりと見
えて来ることになるが、しかし、それだけではまだ不十分であり、さらに大事なことは、
次のようなことである。——つまり、われわれ人間は、この世に生まれて今日まで生きて
きた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自
ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道德観、人生観、生
き方、その他」などが生み出されることになるが、しかし、それらは、その人の「色メガ
ネ」であり、それゆえ、その「色メガネ」を一度取り外すことによつてこそ、初めて、百
%純粹な「眼」で「対象」そのものが見えて来ることであり、その結果、実に様々
な「対象」の「色そのもの」、「形そのもの」、「音そのもの」、「匂いそのもの」、「味そのもの」
「感触そのもの」、その他を、初めて、真に「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことができ
得るようになるということである。

さて、先生は嬉しそうな私の顔を見て、「……もう論文は片付いたんですか、結構です
ね」と言った。私は、「……お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」
と言った。——実際、その時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、これ
から先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいたとある。

これは、学生にとつて「卒業論文」を書き上げ完成させるといふことが、いかに大変な
「一大事業」であるかを物語るものであると共に、この上もない「達成感や満足感或いは
開放感」などに充たされていて、だからこそ、次のように語るのである。つまり、「……
私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、し
きりにその内容を喋々とした（つまりしゃべりまくった）」とある。——これは、自分の
論文について、何か凄いとかが、素晴らしいとか、その他、とにかく、先生にほめてもら
いたいという心理からである。ところが、一方、先生は、いつもの調子で、「なるほど」と
か、「そうですね」とか言ってくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物
足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であつたとある。

これは、まだ若い「私」にとつては、「……自分の論文に対して充分の自信と満足を持
つていた」としても、「先生」をはじめ、その分野で何年も何十年も専門かつ最先端の研
究などを行っている大学教授たちにとっては、実に数多くの学生たちが書き上げる「卒業論
文」などを読んでも、多くの場合、そこに真に驚くべき人類的な発見の内容のものを見
出すことは少なく、それゆえ、学生たちが期待するほどの「高い評価」などは得られ難
いのである。それでも、「……その日の私の気力は、因循らしく（それが何だと）見える先
生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた」と続くのである。

*

*

四四、先生を散歩へと誘い出す

四四、先生を散歩へと誘い出す（二十六）

私は青く蘇生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。「……先生何処かへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持です」、「……何処へ」、私は何処でも構わなかった。ただ先生を伴れて郊外へ出たかった。——一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもって、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたように翳鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に「何々園」とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになって入口を眺めて、「這入ってみようか」と言った。私はすぐ「植木屋ですね」と答えた。（本文）

*

*

さて、「私」という人は、「……先生何処かへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持ですよ」と誘うと、先生は、「……何処へ」と聞くのであった。私は何処でも構わなかった。ただ先生を伴れて郊外へ出たかった。そして、——一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私は「かなめの垣」（これは「かなめもちで造った生け垣」）から、若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもって、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いたとある。——この場面は、先生を散歩に誘い出し、そして、約一時間後、あてもなく歩いて辿り着いたその地点とは、まさに次のような場所であったが、これは、結局、その「場所設定」のための導入部分になっているのである。

やがて、若葉に鎖ざされたように翳鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に「何々園」とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになって入口を眺めて、「這入ってみようか」と言った。私はすぐ「植木屋ですね」と答えたとある。——そして、この「場所」（この「何々園」）で、先生の余りにも有名な「せりふ」が登場して来るのである。それは、つまり、どこでその有名な「せりふ」を先生に言わせようかと考えた末に、恐らく、作者（夏目漱石）という人は、まさにこの「場所」を選んだということである。

四五、何々園の中に入る（二十六）

植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があった。明け放った障子の内はがらんとして人の影も見えなかった。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。「……静かだね。断わらずに這入っても構わないだろうか」、「……構わないでしょう」と、二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、「……これは霧島でしょう」と言った。——芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が

来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠の傍にある古びた縁台のよ
うなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹
かした。先生は着い透き徹るような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われて
いた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝
にかけているものは一つもなかった。細い杉苗(杉の苗)の頂に投げ被せてあった先生
の帽子が風に吹かれて落ちた。(本文)

*

*

さて、その「何々園」の中は、次のようなものであった。つまり、「……植込の中を一
うねりして奥へ上ると左側に家があった。明け放った障子の内はがらんとして人の影も
見えなかった。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。「……静
かだね。断わらずに這入っても構わないだろうか」、「……構わないでしょう」、二人はま
た奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかったとある。そして、躑躅が燃えるよ
うに咲き乱れていた。「満開」だとすれば、季節は、まさに「五月」、先生はそのうちで樺色
の丈の高いのを指して、「……これは霧島でしょう」と言った。——芍薬も十坪あまり一
面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかったと
ある。例えば、「……芍薬は、牡丹が咲き終わるのを待つようにして咲く」とある。牡丹
は、東京では、ふつう「五月」頃、その後「芍薬」が咲き匂うということになるのだ
ろう。そして、この芍薬畠の傍にある古びた「縁台のようなもの」の上に先生は大の字
なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹かした。先生は着い透き徹る
ような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよ
く眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝に着けているものは一つもな
かったとある。——これは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害
損得」)などに振りまわされている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で
「対象」そのものを見ているということであり、そのような「見方」によってこそ、初め
て、あるがままの「自然の風景」(その「美しさ」)がはっきりと見えて来るということ
である。その時、細い杉苗(杉の苗)の頂に投げ被せてあった先生の帽子が風に吹かれ
て落ちたとある。

四六、財産の話をする(二十七) 其の一

私はすぐその帽子を取り上げた。所々に着いている赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。
「……先生帽子が落ちました」と言うと、「……ありがとう」と、身体を半分起してそれ
を受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞
いた。「……突然だが、君の家には財産が余程あるんですか」、「……あるという程ありや
しません」、「……まあどの位あるのかね。失礼の様だが」、「……どの位って、山と田地
が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしょう」と言った。

先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであった。私
の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかった。先生と知り合いになった
始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑った。その後もこの疑いは絶えず私の
胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとば

かり思つて何時でも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。——「……先生はどうなんです。どの位の財産をもつていらつしやるんですか」、「……私は財産家と見えますか」。(本文)

*

*

さて、いよいよ「本題」が登場して来るが、それは、まず、「……先生、帽子が落ちました」と言うと、「……ありがとう」と、身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。それは、「財産」のことであるが、「……突然だが、君の家には財産が余程あるんですか」、「……あるという程ありやしません」、すると、先生は、「……まあどの位あるのかね。失礼の様だが」と聞く。私は、「……どの位」って、山と田地が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしょう」と答えるのであった。ここまでは、ふつうの会話ではあるが、しかし、「……先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた」とともに、一方、「私」の方でも、「……まだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑つた。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前を持ち出すのをぶしつけとばかり思つて何時でも控えていた」が、ついに、「……先生はどうなんです。どの位の財産をもつていらつしやるんですか」と問うのであつた。——もちろん、これは、いわば「前振り」に過ぎないのであるが、しかし、その「財産」をめぐる「問題」からこそ、先生は、今日のような先生になつてしまつた「大きな要因」の一つがあるのである。……先生は、「……私は財産家と見えますか」と聞くのであつた。

四六、財産の話をする(二十七) 其の二

先生は平生から寧ろ質素な服装をしていた。それに家内は小人数であつた。従つて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪に這入り込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢と言えないまでも、あたじけなく(けちけちと)切り詰めた無弾力性のもではなかつた。「……そうでしょう」と私が言つた。「……そりゃその位の金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ」、この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐をかいていたが、こう言い終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた。「……これでも元は財産家なんだがなあ」、先生の言葉は半分独言のようであつた。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい黙っていた。「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると、先生がまた問題を他へ移した。(本文)

*

*

さて、「……先生は平生から寧ろ質素な服装をしていた。それに家内は小人数であつた。従つて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪に這入り込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢と言えないまでも、けちけちと切り詰めた無弾力性のもではなかつた」のである。「……そうでしょう」と

私が言った。「……そりゃその位の金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ」となるが、大事なのは、この次であり、この時、先生は起き上つて、縁台の上に胡坐をかいていたが、こう言い終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた。「……これでも元は財産家なんだがなあ」と、先生の言葉は半分独言のようであつた。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい黙っていた。「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑したとある。——さて、「……竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた」とあるが、これは、まさに「過去」を思い出しては、その「怒りや恨み」などで興奮している、「心の状態」から生じている「行為」になるのである。そして、「……これでも元は財産家なんだがなあ」と、先生の言葉は半分独言のように言い、そして、再び、「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑したとあるが、——これは、元々は、まさに「財産家」であつたのである。ところが、その「財産」の多くを「人に欺し取られてしまう」のである。だからこそ、「先生」という人は、「財産」の話になると、その「過去」のことを思い出しては、今でも、その「怒りや恨み」などで興奮してしまうのである。そこで、「……先生はまた問題を他へ移したとなる」のである。

四六、財産の話をする（二十七） 其三

先生は、「……あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」と聞く。私は父の病気について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送ってくれる為替と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病気の訴えはそのうちに殆ど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱してはなかつた。「……何とも言つて来ませんが、もう好いんでしよう」、「……好ければ結構だが、——病症が病症だからね」、「……やっぱ駄目ですかね。でも当分は持ち合つてるんでしよう。何とも言つて来ませんよ」、「……そうですか」と言うのであつた。私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた。（本文）

*

*

さて、今度は、「父の病気」の問題になるが、先生は、「……あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」と聞く。私は父の病気について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送ってくれる「為替」（現金書留）と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病気の訴えはそのうちに殆ど見当らなかつた。（これは、本人だからこそ余計な心配をかけまいと何も書かないのであり、母親であれば、もつといろいろと細かなことを書いて来たかも知れない）。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱してはなかつた。（だとすれば、手の震えは、まだないのだらう）。「……何とも言つて来ませんが、もう好いんでしよう」とあるが、（これは、余りに暢気な言

葉であり)、一方、先生は、「……好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」という根拠は、(妻の「母親」の「腎臓病」を実際に見てきた経験があるからである)。すると、「私」という人は、「……やっぱ、駄目ですかね。でも当分は持ち合ってるんですよ。何とも言つて来ませんよ」とあるが、これは、「父の病氣」は「もう治らない」とは覚悟しているが、しかし、まだ「しばらくは大丈夫だろう」と見ているのである。……先生は、「……そうですか」と言うだけであつた。

ところで、私は、「……先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病氣を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた」とある。——これは、第三部(先生と遺言)を読めば、詳細に書き記されているので、ここではごく簡単に説明をすると、一人息子の「先生」がまだ中学生の終わりの頃、突然、父も母も「腸チフス」の病氣でほぼ同時に亡くなつてしまふのである。そこで、「父親」が遺した実家の旧家の「財産管理」は、親戚の「叔父」(父親の実の弟)にすべてを任せて、「先生」は、東京の「高等学校」に入学することになるのである。そして、夏休みだけは「実家」に戻り、あとは、ずっと「東京」で暮らすような生活をしてきたが、その「高校三年間」の間に、その実家の旧家の「財産」の多くを親戚の「叔父」(父親の実の弟)にまさに「欺し取られてしまふ」のである。そのような絶対に許せない苦々しい「経験」(つまり「生々しい実体験」)があればこそ、先生は、次のようなことを何度も「私」に対して言つたり、また、聞いたりしているのである。

四七、人はいざという間に悪人になる(二十八) 其の一

先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うので、「ええ」と、私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしる、一人もないと私は信じていた。その上先生の言う事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。……あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想して掛かるような言葉遣いをするのが気に触つたら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なもので、いつ死ぬか分らないものだからね」と、先生の口氣は珍らしく苦々しかった。

「……そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と私は弁解した。(本文)

*

*

さて、いよいよ「核心部分」に迫つて来ましたが、先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うので、「ええ」と、私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心

配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実地的なのに、私は少し驚かされたとある。

つまり、「私」という、まだ「若い人」ととって、いわば尊敬する「先生」という人が、なぜ、どうしてこのような「財産の問題」などにここまで執拗にこだわり尋ねて来るのか、その「真意」が全く分かり兼ねているのである。一方、「先生」としては、自分と「同じような経験」をこの若者に絶対にさせたくないという、その「一念」（深い想い）からであり、それは、次のようなことである。——つまり、まだ若い「私」という人は、「……私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた」とある。つまり、「財産問題」などで「家族や親戚」などがまさに「骨肉の争い」などを起こすことなど絶対にあり得ないと固く信じ切っているのである。それは、「それでよい」のである。問題は、絶対により得ないと固く信じ切っていた、その「家族や親戚」などに「裏切られた時」のことを、「先生」という人は、心の底から心配しているのである。なぜなら、「先生」自身、絶対にあり得ないと固く信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」からである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになつて行く。「大きな要因」の一つになつているのである。もちろん、それだけではなく、もう一つの極めて「大きな要因」があつて、それらがまさに「今のような先生にしている」要因であるが、それは、次の機会に説明をするとして、一方、「私」という人は、「……そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と、弁解するのであつた。

四七、人はいざという間に急に悪人になる（二十八）其の二

先生は、「……君の兄弟は何人でしたかね」と聞いた。その上に、私の家族の人数を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問うなどした。そうして最後にこう言つた。「……みんな善い人ですか」、「……別に悪い人間という程のものもないようです。大抵田舎者ですから」、「……田舎者はなぜ悪くないんですか」、——私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。「……田舎者は都会のものより、却つて悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚などの中に、これと言つて、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」（本文）

*

*

さて、夏目漱石の『こころ』という作品のなかで、最も「有名な文章（せりふ）」の一つが、まさにこの「場面」で登場して来るが、それは、次のようなものである。——まず、先生は、「……君の兄弟は何人でしたかね」と聞いた。その上に、私の家族の人数を聞き

たり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問いただした」とある。これは、もちろん、どのような「可能性」があるのかを見ているのである。——例えば、まず、「父親」が亡くなれば、残された「母親」と「三人兄弟」（兄と私と妹）で、その家の「財産」の「分配」を行なうことになるかと思う、その場合、「私」という人は、「……山と田地が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしよう」と言っていた。もちろん、「家」は、母親が受け継ぐことになるだろうが、その他、例えば、その「山や田地」などは誰が「遺産分け」として受け継ぐのかという問題が生じるかも知れない。また、数多くの親戚や叔父や叔母などがあるとして、この「家」の「遺産分け」などにどのように関わって来るのかは分からないが、とにかく、そのような「可能性」を見ているのである。

そして、「先生」は、終に「その言葉」を発するのである。それは、「……みんな善い人ですか」と聞くと、「私」という人は、「……別に悪い人間という程のものでもないよんです。大抵田舎者ですから」と答える。すると、先生は、「……田舎者はなぜ悪くないんですか」と聞く。——私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。「……田舎者は都会のものより、却って悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだと思います。しかし、しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という「言葉」である。

それは、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないよんだ」と言いましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という「言葉」である。

例えば、「夏目漱石」という人は、生後すぐに四谷の古道具屋（一説に八百屋）に「里子」に出されるが、姉が不憫に思い、実家へ連れ戻される。そして、一歳の時、今度は、父親の友人であった塩原家のところへ「養子」に出されるが、義父の「女性問題」から「家庭不和」となり、七歳の時、養母とともに一時生家に戻る。そして、九歳の時、「養父母」の離婚により、生家に戻るようになるが、養父と実父との対立は続き、「塩原」から「夏目家」への復籍は、二十一歳の時になるのである。

その後、「夏目漱石」が有名な「作家」になると、今度は、金銭に困っていたその「義父」（塩原昌之助）という人は、有名になった「夏目漱石」の家にその姿をたびたび現わしては、毎回、お金の「無心」をするようになるのである。そのために、「夏目漱石」という人は、そのことで非常に「悩み苦しむ」ことにもなるのであるが、そのような「経験」（実体験）が実際にあるのであり、そのようなことも「このような言葉」の中には反映されているのである。

それはともかく、ここでの最も「重要な言葉」は、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだ

から恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」ということである。そして、この「言葉」が「先生」の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来た「最大の理由」の一つが、まさに「先生」自身、絶対にあり得ないと固く信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の弟）にその実家の旧家の「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」ということである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになって行く「大きな要因」の一つになっているのである。もちろん、「先生」にはもう一つの「決定的な要因」があるのであるが、それは、第三部の「先生と遺書」のところで詳しく述べたいと思うので、ここでは先へと進みたいと思う。

*

*

四八、犬と子供の突然の出現

四八、犬と子供の突然の出現（二十八）

先生の言う事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何か言おうとした。すると後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被ったまま先生の前へ廻って礼をした。「……叔父さん、這入って来る時、家に誰もいなかったかい」と聞いた。「……誰もいなかったよ」、「……姉さんやおつかさんが勝手の方に居たのに」、「……そうか、居たのかい」、「……ああ。叔父さん、今日はって、断って這入って来ると好かったのに」、先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。「……おつかさんにそう言ってくれ。少しここで休まして下さいって」、小供は伶俐そうな眼に笑いを漲らして、首肯いて見せた。「……今斥候長になつてるところなんだよ」、小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駈け下りて行った。犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じぐらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駈けて行った。（本文）

*

*

さて、「……後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った」とある。これは、今までの先生と私との「会話」を一度中断させるような展開になつてゐる。それでは、なぜ、二人の「会話」を一度中断させるような展開が必要になるのだろうか。むろん、それには様々な「理由」が考えられるかと思うが、まず、考えられることは、二人の「会話」がずっと続いているために、今、二人はどのような「風景の場所」でどのような状況で話をしているのかが分かり難くなつてゐる。そこで、一度、二人だけの「会話の世界」から、「現実の世界」へと引き戻してゐるのである。——例えば、犬が急に吠え出すとか、また、突然、雨が降り出すとか、その他、そのような「変化の描写」を書き加えることによつて、二人が居る、その「現場の状況」がより生々しい「真実味」を以つて再び見えて来るのである。それが、まさに次のような「描写」になるのである。

つまり、「……後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。すると、縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉の苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂って生えていた。犬は、その顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被ったまま先生の前へ廻って礼をした。「……叔父さん、這入って来る時、家に誰もいなかったかい」と聞いた。「……誰もいなかったよ」、「……姉さんやおつかさんが勝手の方に居たのに」、「……そうか、居たのかい」、「……ああ。叔父さん、今日はって、断って這入って来ると好かったのに」、先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。「……おつかさんにそう言ってくれ。少しここで休まして下さいって」、——小供は伶俐そうな眼に笑いを漲らして、首肯いて見せた。「……今斥候長（偵察部隊の隊長）になつてるところなんだよ」と言う。（これは、怪しい二人が何々園の中に侵入したので、子供たちの間でお前が行つて《或いは自分が行つて》話を聞いて来るといふこと出で来たのである）。小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駈け下りて行った。

犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらしい年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駆けて行った、となるのである。

そして、もう一つの「大きな理由」は、一気に「最後の結末」まで行くのではなく、一度、中断して、再び、「最後の結末」の方へと向かうという手法の方が、より強い「鮮明な衝撃」を与えることができ得るからである。それが、次からの「言葉」になるのである。

四九、犬と子供の去った後のこと（二十九）

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事が出来なくなったので、私はいかにその要領を得ないでしまった。先生の気にする財産云々の掛念はその時の私には全くなかった。私の性質として、また私の境遇から言って、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます余地がなかったのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ないためでもあり、また実際その場に臨まないためでもあつたらうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間に、誰でも悪人になるという言葉の意味であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもっと知りたかつた。

犬と小供が去つたあと、広い若葉の園は再び故の静かさに歸つた。そうして我々は沈黙に鎖ざされた人の様にしばらく動かずにいた。うるわしい空の色がその時次第に光を失つて来た。眼の前にある樹は大概楓であつたが、その枝に滴るように吹いた軽い緑の若葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い往來を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁日へでも出掛けるものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑想から呼吸を吹き返した人のように立ち上がった。（本文）

*

*

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間に、誰でも悪人になるという『言葉の意味』（その真意）であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもっと知りたかつた」というこの部分である。——これは、読者も全く「同じ心理」に置かれていたのである。ところが、再び、周りの風景やその様子の描写などになつて行く。なぜ、すぐに「本題」に入らないのか？ それはもちろん、いわば「読者を焦らす」ということでもあるが、それ以上に大事なことは、一方の「私」という人は、「……人間がいざという間に、誰でも悪人になるという『言葉の意味』（その真意）を底まで聞きたかつた」と今もそう強く思っているが、一方の「先生」の方は、犬と子供の突然の出現によつて、あれほど興奮して「財産」のことについて語っていた先生の「心の状態」は、今は本来の「心の静けさ」を取り戻しているのである。だからこそ、次のような言葉になつて行くのである。

五十、やがて二人は植木屋を出て行く（二十九）

先生は、「……もう、除々そろそろ帰りましょう。大分だいぶ日が永くなつたようだが、やっぱりこう安閑あんかんとしているうちには、何時いつの間にか暮れて行くんだね」、先生の背中には、さつき縁台の上に仰向あおむきに寝た痕あとがいつぱい着いていた。私は両手でそれを払い落した。「……ありがとう。脂やにがこびり着いてやしませんか」と聞くので、「……綺麗きれいに落ちました」と言うと、「……この羽織こまひだこしらはつい此間こゝ拵だてしらえたばかりなんだよ。だから無闇むやみに汚して帰ると、妻さいに叱しかられるからね。有難ありがたう」と言い、二人はまただから坂ざかの中途にある家の前へ来た。這入はいる時には誰もいる気色けしきの見えなかつた縁側えんがわに、お上かみさんが、十五、六の娘を相手に、糸巻いとまきへ糸を巻き付けていた。二人は大きな金魚鉢ぼちの横から、「……どうもお邪魔じやまをしました」と挨拶あいさつした。お上かみさんは、「……いいえお構かまい申しも致いたしませんで」と札はを返した後、先刻さうき小供こどもに遣やつた白銅はくどうの札はを述べた。(本文)、――さて、これで、「何々園じやま」(植木屋)の場面は終了して、いよいよ「核心部分かくしんぶぶん」そのものへと入って行くのである。

*

*

五一、人間は誰だれでもいざという間際まぎわに急に悪人になる

五一、人間は誰でもいざという間際に急に悪人に変わる(二十九)

門口を出て二、三町来た時、私はついに先生に向かって口を切った。「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」、「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」、先生は笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないと言った風に。「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」、私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかった。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であった。私は澄ましてさっさと歩き出した。いきおい先生は少し後れがちになった。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。「……そら見たまえ」、「……何をですか」、「……君の気分だって、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」、待ち合わせるために振り向いて立ち留まった私の顔を見て、先生はこう言った。(本文)

*

さて、「何々園」(植木屋)の門口を出て、一、三町(二町は約一〇九メートル)来た時、私はついに先生に向かって口を切った。「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、先生は、「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」と言うのであった。——この「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」というのは、一体、どういう「意味合い」になるのかと敢えて問えば、それは、例えば、「……われわれ人間は、誰でも、遅かれ早かれ、やがては死ぬものだ。これは、理屈じゃないんだ、つまり事実なんですよ」という、そういう「意味合い」を含むものになるのである。

それでは、なぜ、「……人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだ」と言い切れるのか？ それが「最大の問題」になるが、それは、次のようなことである。——つまり、この「悪人」という「言葉」を、どのように「解釈」するかにすべてはかかっているのである。つまり、この「悪人」という「言葉」は、すなわち、「悪い心」になるということであり、これは、ほぼ「百%」近くそうなるということであるが、しかし、その「悪い心」になった時に、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)しない場合とがある。——つまり、「……人間は誰でもいざという間際に悪人(悪い心)になるものである。——つまり、「……人間は誰でもいざという間際に悪人(悪い心)になるものであるが、しかし、その「悪い心」になった時に、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)してしまう場合と、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)しない場合とがある」ということになる」のである。

*

*

例えば、太宰治の『走れメロス』の場合、メロスは、町へと走って戻る途中、一度だけ、親友を裏切るような想い(悪い心)に襲われてしまう。また、人質になっていた「親友」も、一度だけ、メロスを疑う「気持ち」(悪い心)に襲われてしまう。一方、暴君(ディオニス)は、人間が信じられないという想い(悪い心)に襲われて、疑わしい人間は、次

から次へと容赦なく肅正していたのである。つまり、三人が三人とも、いざという間際に（つまり何か追い詰められたような状況に置かれた時に）、みんな悪人（悪い心）になっているのである。しかし、メロスの場合は、その「悪人」（悪い心）に襲われながらも、その想い（悪い心）を振り切って、最後まで走り続けるのである。一方、暴君（ディオニス）の場合は、人間が信じられないという想い（悪い心）に襲われた時に、そのまま「悪人」（悪い心）のままに、実際に、疑わしい人間は、次から次へと容赦なく肅正していたのである。つまり、「……人間というのは誰でもいざという間際に（つまり何か追い詰められたような状況に置かれた時には）誰でも悪人（悪い心）になってしまうものであるが、しかし、その「悪い心」になった時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがあるということである。

*

*

さて、「私」という人は、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は、笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風に。そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであった。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかった。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であったとある。

さて、「先生」という人は、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであった。もちろん、これは、まだ中学生であった「先生」が、父親も母親も心から信頼していたので、「先生」自身も、そのまま信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の恐らく何億何十億という「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」という、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）があつて、その「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、まさに生じて来た「金さ君」という言葉（想い）になるのである。

例えば、道ばたに「大金」が落ちていけば、誰でも「お金」はほしいわけだから、人が見ていなければ、それを「ねこばば」したい気持ち（衝動）に襲われたとしても、それを責めることは出来ないだろう。ただ「問題」なのは、その「ねこばば」したいという気持ち（衝動）のままに実際に「ねこばば」をしてしまう場合と、「ねこばば」したい気持ちは、山々だけけれども、それを「交番」（警察）に届け出る場合とがあるかと思う。——つまり、誰でも「お金」はほしいわけだから、人が見ていなければ、それを「ねこばば」したい「気持ち」（衝動）、つまり、誰でも「悪人」（悪い心）に襲われてしまうものであるが、しかし、その「悪い心」に襲われた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがあるということである。

それでは、どういう時に、その「悪い心」に襲われた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまうのかと問えば、それが、まさに「いざという間際に」（つまり「何かに追い詰められたような状況に置かれた時に」）、誰でも悪人（悪い心）のままに実際に行動（言動）してしまう傾向があるのである。——それが、すなわち、「先生」が言う、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだ

言いましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにに入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際まぎわに（それは『何かに追い詰められたような状況に置かれた時に』、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という言葉の、まさに「真意」になるかと思う。

*

*

さて、「私」という人は、先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つままらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。それゆえ、（不満を抱きながら）、私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後おくれがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。「……そら見たまえ」、「……何をですか」、「……君の気分だつて、私の返事一つ（期待したような返事でなかつたの）で、すぐ変る（不満を抱いている）じゃないか」と、待ち合わせるために振り向いて立ち留どまつた私の顔を見て、先生はこう言つた、となるのである。

つまり、われわれ人間というのは、その人の置かれたその時々状況に依よつて、その人の「よい面」が現われたり、逆に、「悪い面」が現われたり、或いは、何かわけのわからない面が現われたりすることである、つまり、よい人は、いつも「よい人」であり、そして、悪い人は、いつも「悪い人」というようなことではなく、その人の置かれたその時々状況に依よつて、その人の「よい面」が現われたり、また、逆に、その人の「悪い面」が現われたり、あるいは、何かとんでもない面が現われたりすることである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまかつた分ぶんからないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要があり、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考かんえやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまかつた分ぶんからない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

五二、先生は、さつき少し興奮しましたね（三十）

その時の私は腹の中で先生を憎らしく思つた。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘こ泥わる様子を見せなかつた。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払つた歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹しやうはらになつた。何とか言つて一つ先生をやつ付けてみたくなって来た。——「先生」、「何ですか」、「……先生はさつき少し興奮こうふんなさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮こうふんしたのを滅多めったに見た事がないんですが、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」。

先生はすぐ返事をしなかつた。私はそれを手応ておたえのあつたようにも思つた。また的外まじれたようにも感じた。仕方がないから後は言いわない事じにした。すると先生がいきなり道の端はへ寄よつて行いつた。そうして綺麗きれいに刈きり込こんだ生垣いけがきの下で、裾すそをまくつて小便をした。私は先生が用を足す間あいだぼんやりそこに立たつていた。「やあ失敬」、——先生はこう言つてまた歩き出した。私はどうとう先生をやり込める事を断念した。私達の通る道は段々賑にぎやかに

なつた。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つて来た。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹に絡ませたり、金網で鶏を囲い飼いにしたりするのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終気を奪られがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は実際それを忘れていた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのには、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は、笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風に。そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであつた。(先生は本気で答えているのであるが)、私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味になつて、不満の気持ちが残つてしまつた。そこで、「私」という人は、何とか言つて一つ先生をやつ付けてみたくなつて来た。——「先生」、「何ですか」、「……先生はさつき少し昂奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんですが、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」と言うのであつた。

すると、先生は、「……すぐ(には)返事をしなかつた。私はそれを手応えのあつたようにも思つた。また的が外れたようにも感じた。仕方がないから後は言わない事にした。すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。そうして綺麗に刈り込んだ生垣の下で、裾をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間ぼんやりそこに立っていた。「やあ失敬」、——先生はこう言つてまた歩き出した。私はどうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑やかになつた。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つて来た。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹に絡ませたり、金網で鶏を囲い飼いにしたりするのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終気を奪られがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は実際それを忘れていたとある。——これは、一体、どのような「意味合い」のものになるのかと問えば、それは、段々と賑やかになる方向(町中)へと向かつて、二人が道を歩いている間じゆう、「先生」という人は、ずつと、「……先生はさつき少し昂奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんですが、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」という、「言葉」を、先生は「頭の中」(或いは「心の中」)で何度も何度も繰り返しながらずつと「考えていた」ということである。

五三、私は他に欺かれたのです(三十)

先生は、突然、「……私は先刻そんなに昂奮したように見えませんか」、「……そんなにと言う程でもありませんが、少し……」、「……いや見えても構わない。実際昂奮するんだから。私は財産の事を言うときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、

私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」と言うのであった。

先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自分を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力を未だ嘗て想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処に、私の懐かしの根を置いていた。一時の気分が先生にちよつと盾を突いて見ようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこう言った。

「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼等を憎むばかりじゃない、彼等が代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」、私は慰藉の言葉さえ口へ出せなかった。(本文)

さて、先生は、「……私は先刻そんなに昂奮したように見えたんですか」、「……そんなにと言う程でもありませんが、少し……」、「……いや見えても構わない。実際昂奮するんだから。私は財産の事を言うときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」とある。——これは、つまり、「先生」が受けた「心の傷」がいかに「深いもの」であつたかを極めて如実に物語っているものである。

さて、「私」という人は、「……先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自分を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力を未だ嘗て想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処に、私の懐かしの根を置いていた。一時の気分が先生にちよつと盾を突いて見ようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこう言った。

「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」、私は慰藉(慰め)の言葉さえ口へ出せなかったとある。

* *
これは、まだ中学三年生であった「先生」が、父親も母親も心から信頼していたので、「先生」自身も、そのまま信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の恐らく何億何十億という「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」のである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対許せない苦しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになって行く。「大きな要因」の一つになっているのである。それが、つまり、「……私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼等を憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」となるのである。

五四、やがて二人は電車に乗って帰る（三十一）

その日の談話も遂にこれぎりで発展せずじまった。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかったのである。——二人は市の外れから電車に乗ったが、車内では殆ど口を聞かなかった。電車を降りると間もなく別れなければならなかった。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、「……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」と言った。私は笑って帽子を脱した。その時私は先生の顔を見て、先生は果して心のどこかで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと思つた。その眼、その口、どこにも厭世的の影は射していないかった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々あったと言わなければならぬ。先生の談話は時として不得要領に終った。その日二人の間に起つた郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏に残った。（本文）

* *
さて、「……その日の談話も遂にこれぎり発展せずじまった。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかった」とある。そして、「……二人は市の外れから電車に乗ったが、車内では殆ど口を聞かなかった。電車を降りると間もなく別れなければならなかった。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、『……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ』と言った。（今は五月）、私は笑って帽子を脱した。その時私は先生の顔を見て、先生は果して心のどこかで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと思つた。その眼、その口、どこにも厭世的の影は射していないかった」とある。

* *
これは、まさに外から見た「外的事実」であり、その時々表れる先生の様々な「外的事実」（例えば様々な顔の表情や言動その他）というものは、われわれ人間の「五感」を

通じて、いくらでも「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことができ得るとともに、それらをもとにして、われわれ人間というのは、とかく、あの人は、ああいう人、この人は、こういう人と、勝手に決めつけているところがあるかと思うが、一方、先生の奥深くにある「内的事実」というものは、前述の「内容のようなもの」であり、それは、先生自身が「素直に告白しない限り」は、誰にも分かりようがないものである。そして、その「告白」を聞いて、「私」という人は、その余りの「衝撃」のために、いわば「言葉」を失っているのである。それを見ていて、先生は、少しでも元気づかせようとして、常よりは晴やかな調子で、まさに「……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ！」と、明るい顔で言うのであった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々あったと言わなければならぬ。先生の談話は時として「不得要領」（肝心な所が分からないまま）に終わった。その日、二人の間に起った郊外の談話も、この「不得要領」（肝心な所が分からないままに終わった）「二例」として私の胸の裏に残ったということである。

五五、あなたはほんとうに真面目ですか（三十一）

さて、無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はいこう言った。「……頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解ってる癖に、はつきり言ってくれないのは困ります」、「……私は何にも隠してやしません」、「……隠していらいっしやいます」、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」、「先生はあきれたと言った風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し顫えた。「……あなたは大胆だ」、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」、「……私の過去を許してもですか」、「許くという言葉が、突然恐ろしい響きを以て、私の耳を打った。私は今私の前に坐っているのが、一人の罪人であって、不断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼かった。「……あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言った事も真面目です」、「私の声は顫えた。「よろしい」と先生が言った。「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増かも知れませんよ。

それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適當の時機が来なくつちや話さないんだから」、私は下宿へ帰ってから一種の圧迫を感じた。(本文)

*

さて、無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこう言った。「……頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解つてる癖に、はつきり言ってくれないのは困ります」、「……私は何にも隠してやしません」、「……隠していらつしやいます」と言う。——これは、まだ若い「私」という人から見ると、例えば、「……私の伺いたいののは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞いた時にも、先生は、笑い出し、そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのを聞いて、先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。つまり、「……ちゃんと解つてる癖に、はつきり言ってくれない」と不満に思うわけである。ところが、先生は、まさに「……本気で答えているのである」、「つまり、「……私は何にも隠してやしません」となるのであるが、まだ若い「私」という人には「お金ではないもつと何かがあるはずだ」と思うのである。

*

*

そこで、先生は、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」と言うのであった。——つまり、何らの「体験も経験」も踏まえない、ただその人の「頭の中」(或いは「心の中」)だけであれこれ想像したり考え出した「思想や意見」というものがあるとするれば、一方、その人の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」というものがあるということである。そして、「先生」という人の「思想や意見」というのは、言うまでもなく、先生の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」になっているというものである。

そこで、先生は、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」と言う。——つまり、先生の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」というものがあり、その「思想や意見」を無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども、私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になる」と言う。——つまり、自分の「思想や意見」を人に語ることで、自分の「過去」を人に語ることは、全く「別々のこと」だと言っているのである。

一方、「私」という人は、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」と言うのである。——これは、先生の「思想や意見」だけではなく、先生の過去の一体どのような「体験や経験」から、このような「思想や意見」が生み出されて来たのか、その「両方」を「合わせて知りたい」と言っているのである。

すると、先生は、「……あきれたと言った風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し顫えた」とある。——これは、先生は、自分の「過去の或る事」をこれだけは、決して誰にも妻にさへ絶対に語らずと心の奥深くに隠して来たものであり、それを「いきなり語れ！」と言われて、思わず、「……あなたは大胆だ」と言うのである。すると、「私」という人は、先生の「過去の事情」などは何も知らないもので、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言うのである。すると、先生は、「……私の過去を許してもですか」と聞くのであった。……

まず、「私」という人は、先生の「過去の事情」などは何も知らないもので、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言うのであった。……

ところで、まだ若い「私」という人、この書生（大学生）は、帝国大学（つまり東大）の「三年生」だと思うが、この人は、一体、何のために「先生の宅」に頻繁にやって来ては、先生と親しく「話をしていく」のだらうか？ それはもちろん、「遊興」のためではなく、それは、まさに「……先生から人生の教訓を得るため、しかも、それは、ふつう一般的なものでは決してなく、真面目に、『人生から（真の）教訓』を受けたのです」と語るるのである。すると、先生は、「……私の過去を許してもですか」と聞くのであった。

すると、まだ若い「私」という人にとつて、この「……私の過去を許してもですか」という言葉が、突然、恐ろしい「響き」を以て、私の耳を打ったとある。——それは、全く「想像すらし得なかった言葉」であったからであり。だからこそ、まだ若い「私」という人は、「……今、私の前に坐っているのが、一人の罪人であつて、不断から尊敬している先生でないような気がした」となるのである。一方、先生の方はと言えば、それは、「……先生の顔は蒼かった」（蒼ざめていた）ということになるのである。

先生は、「……あなたは本当に真面目ですか」と念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑うにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思つている。あなたはそれのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」と聞く。

例えば、「先生」という人は、（去年の）夏、鎌倉の海岸（海水浴場）で偶然にも出逢つた、この「若者」を、なぜ、どうして自宅に「受け入れる」ようなことにしたのだからか？ というのも、先生は、自ら「人間嫌い」とも「人間不信」だとも言っていたからである。それなのに、なぜこの「若者」を受け入れたのだらうか？ むろん、それにも幾つかの理由があつたかと思うが、その「最大の理由」としては、やはり「話し相手」が欲しかったということである。しかも、その「話し相手」というのは、ごく「一般的な世間

話」などをするような相手ではなく、もっと「……人生を深く語り合える相手である」ともに、人間としても真面目であり、真に信用でき得るような相手」というものを、知らず識らずのうちに、先生は長年探し求めていたということである。そして、一年近く、この「若者」と親身に「付き合つて」みた結果、次のように想うようになったのである。

それが、すなわち、「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思つている。あなたはそれのたった一人になれますか。なつてくれませんか。あなたは腹の底から真面目ですか」と聞く。——ここにこそ、先生の「長年の想い」があるということである。つまり、このまま自分の「思いや考え」などを誰にも語らず、また、誰にも知られず死んで行く、それには堪えられないということである。それゆえ、たった「一人」でもいい、真面目で、信用できる相手に自分の「思いや考え」などをすべて語つてから死にたいということである。だからこそ、先生は、「……あなたは本当に真面目ですか」と、何度も何度も念を押して聞いているのである。そして、もしあなたがうそ偽りなく真に「真面目で、信用できる相手」であるならば、その時は、自分の「過去のすべて」をあなたにすべて語つて上げててもよいと言つているのである。

それが、まさに「……あなたは腹の底から真面目ですか」と先生が聞いた時に、「私」という人は、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言つた事も真面目です」と、その声は震えていたとある。(それだけ緊張感があつたということである)。すると、先生は、「よろしい」と言つた。そして、「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取つてそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増かも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適当の時機が来なくつちや話さないんだから」となるのである。それでは、その適当の時期とは、一体、どのような時期かと問えば、それは、実は、「……自分が死んでもよいと思える時期」ということになのである。一方、「私」という人は、下宿へ帰つてからも一種の「圧迫」(ただ事ではないという感じ)を感じていたということである。

*

*

五六、大学を無事に卒業する

五六、大学を無事に卒業する (三十二)

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかったらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭くなった古い冬服を行李の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであった。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身体を持って余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになった。

私は式が済むとすぐ帰って裸体になった。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室の真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、いよいよ「大学を無事に卒業する」ことになるが、当時の「大学」というのは、「三年制」であり、「私」という人も、今年の一月から、二月、三月、四月一杯をかけて、ひたすら「卒業論文」を書くことに専念をして、ようやく完成させることになる、その間は、先生宅の「敷居を跨がなかった」とある。そして、五月になって、さっそく先生宅を訪ねては、先生を郊外に散歩に誘い出し、そこで「財産」の談話などをすることになるのである。そして、六月になると、「口述試験」があり、また、大学の「卒業式」は、当時は、「七月」(本書では六月)であった。だからこそ、「……私は黴臭くなった古い冬服を行李の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであった。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身体を持って余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになった」となるのである。

そして、「私」という人は、「……式が済むとすぐ帰って裸体になった。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室の真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた」とある。——例えば、大学の「卒業証書」というものは、一体、どれほどの意味のあるものなのか、それとも、それほど意味などないものなのか、という問題であるが、ふつう一般的に言って、大学を卒業した当人にとっては、何々大学(例えば有名校など)を卒業したからと言って、それほどどうということもないものであるが、しかし、世渡りをする時には、これが意外と「大きな役割」を果たすことになるのである。というのも、結局、その人の「……年齢、性別、出身地、学歴、職歴、趣味、その他」、何であれ、それは、結局、その人の様々な「外的事実」(つまりその人の学校や職場或いは趣味や生活や遊びなどでの色々な言動や学歴或いは職歴その他)などからこそ、その人をあれこれ「判断し、評価する」方法しかないからである。一方、その人の様々な「内的事実」などがどのようなようになっていくかなどは、本人が「自分の心の中を素直に告白しない限り」は、誰にも分かりようがないものである。それゆえ、世間一般的

には、その人の「履、歴書」（その中の「学歴」というものが、その人を判断する一つの「ものさし」にもなっているのである。

五七、先生の家へ御馳走に招かれていた（三十二）

私はその晩先生の家へ御馳走に招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩餐は余所で喰わずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であった。——食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあった。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布が美しくかつ清らかに電燈の光を射返していた。先生のうちで飯を食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた。「……カラやカフスと同じ事さ。汚れたのをを用いるくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ」、こう言われて見ると、なるほど先生は潔癖であった。書斎なども実に整然と片付いていた。無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まった。「……先生は癩性ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは、「……でも着物などは、それほど気にしないようですよ」と答えた事があつた。それを傍に聞いていた先生は、「……本当を言うと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗に言う神経質という意味か、又は倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつた。（本文）

*

*

さて、私は、「……その晩、先生の家へ御馳走に招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩餐は余所で喰わずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であつた」とある。むろん、これは、「私」の「卒業祝い」の為のものであるが、一方、作者（夏目漱石）としては、この三人揃つた「晩餐の席」で、最後、私の「父親の病氣から二人のうちどちらが先に死ぬか」という問題を提示する為のものでもあるが、それはともかく、——食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあつた。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布が美しくかつ清らかに電燈の光を射返していた。先生のうちで飯を食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた」とある。——ところで、御馳走として、こういう具体的な「料理」があつたと描写してもよい場面であるが、何も描かれていないという事は、夏目漱石自身、料理への「こだわり」は、それ程はなかつたのかも知れない。それはともかく、先生は、「……カラやカフスと同じ事さ。汚れたのをを用いるくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ」と言う。こゝろを言われてみると、なるほど先生は「潔癖」であつた。書斎なども実に整然と片付いている。無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まつたとある。——これは、「先生」という人の「性格や性質」などがどういふものであるかを、まさに「卓布の純白さ」で表現しているところである。つまり、「不純」を非常に嫌う「潔癖症」のところがあり、それがまた、先生を「苦しめる大きな要因の一つ」にもなっているのである。それが、まさに「……先生は癩性ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは、「……

「でも着物などは、それほど気にしないですよ」と答えた事があった。それを傍に聞いていた先生は、「……本当を言うのと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗に言う「……神経質」という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつたのである。

つまり、先生は、自ら「……本当を言うのと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。これは、夏目漱石の「神経衰弱」とも共通するところがあるのかも知れない。——一方、「私」という人は、先生の「精神的に癩性」という意味については、「……俗にいう神経質」という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた」とあるが、それは、恐らく、両方であり、だからこそ、「先生」という人は、いわゆる「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などに長年悩まされ続けるのである。

五八、先生の家で御馳走にあずかる(三十二)

その晩、私は先生と向い合せに、例の白い卓布の前に坐つた。奥さんは二人を左右に置いて、独り庭の方を正面にして席を占めた。——「御目出とう」と言つて、先生が私のために杯を上げてくれた。私はこの盃に対してそれ程嬉しい気を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもつていなかったのが、一つの原因であつた。けれども先生の言い方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帯びていなかった。先生は笑つて杯を上げた。私はその笑いのうちに、些とも意地の悪いアイロニーを認めなかつた。同時に目出たという真情も汲み取る事が出来なかつた。先生の笑いは、「……世間はこんな場合によく御目出とうと言いたがるものです」と私に物語つていた。奥さんは私に「……結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言つてくれた。私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行つて見せてやろうと思つた。「……先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。「……どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。「……ええ、たしかしまつてある筈ですが」、卒業証書の在処は二人ともよく知らなかつた。(本文)

*

*

さて、「御目出とう」と言つて、先生が私のために杯を上げてくれた。私はこの盃に対してそれほど嬉しい気を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもつていなかったのが、一つの原因であつたとある。——それでは、なぜ、そうなのかと問えば、まず、希望する大学に入学できた時には、まさに「飛び上がるほどの嬉しさ」があつたかと思つたが、一方、大学を卒業する時というのは、多くの場合、ごくふつうに講義に出て、必要な単位を修得すれば、(むろん卒業論文を書く大変さはあるが)、大体、「卒業」出来るようになってるのであり、それゆえ、何か特別に大騒ぎをしてまで喜ばなければならぬほどのものではないからであり、それは、先生も大学を卒業しているのです。そのような「心理」はよく解つていたのである。だからこそ、次のようになるのである。「……けれども先生のいい方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帯びていなかった。先生は笑つて杯を上げた。私はその笑いのうちに、些とも意地の

悪いアイロニー（皮肉）を認めなかったが、同時に目出たいという真情も汲み取る事が出来なかった。先生の笑いは、『……世間はこんな場合によく御目出とうと言いたがるものです』と私に物語っていた」となるのである。

一方、奥さんの方は、私に、「……結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言ってくれた。——これは、いかにも「女性の視点」からであり、大学を卒業出来た当人も「結構」ではあるが、それ以上に、「……さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」という見方になるのである。——一般に、男の場合、先生もそうであるが、そこまでは「気が回らない」ものである。すると、私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行って見せてやろうと思った。「……先生の卒業証書はどうしました」と私が聞くと、「……どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。「……ええ、たしかしまつてある筈ですが」、卒業証書の在処は二人ともよく知らなかったとある。——つまり、何々大学を卒業したという「学歴」こそが大事であり、それを証明する「卒業証書」というものは、多くの場合、どこかにしまい忘れていくという、（なぜか）そのような「扱い」を受けているのである。

五九、これから何をする気ですか（三十三） 其の一

飯になった時、奥さんは傍に坐っている下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない客に対する先生の家の仕来りらしかった。始めの一、二回は私も窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。「……お茶？ ご飯？ ずいぶんよく食べるのね」、奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事を言うことがあつた。しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戲される程食欲が進まなかつた。「……もうお仕舞。あなた近頃大変小食になつたのね」、「……小食になつたんじゃないやありません。暑いで食われないうです」、奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子を運ばせた。「……これは家で拵えたのよ」、用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞うだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更えてもらった。「……君もいよいよ卒業したが、これから何をやる気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で背中を障子に靠たせていた。（本文）

さて、飯になった時、奥さんは傍に坐っている下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない（内々の）客に対する先生の家の仕来りらしかった。始めの一、二回は私も窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。「……お茶？ ご飯？ ずいぶんよく食べるのね」、奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事を言うことがあつた。（それだけお互いに打ち解けた関係になつているのである）。しかし、その日は、時候が時候なので、そんなに調戲されるほど食欲が進まなかつた。「……もうお仕舞。あなた近頃大変小食になつたのね」、「……小食になつたんじゃないやありません。暑いで食われないうです」とある。例えば、日本最初の「扇風機」は、一八九四年（明治二十七年）に発売したものが最初とあるので、この「小説」が書かれる「大正三年」頃は、金持ちであれば、或いは持つていたかも知れない時期に当たる

のかも知れない。すると、奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子^{みずがし}を運ばせた。「……これは宅で拵^{こしら}えたのよ」、用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞^{ふるま}うだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更^かえてもらったとある。明治時代は、アイスクリームはかなり高価な食べ物であったが、大正時代になると、かなり一般化して行くことになるのである。「……君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居^{しきいざわ}で背中を障子^{しょうじ}に靠^もたせていたとある。

五九、これから何をする気ですか（三十三）其の二

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的^{あて}もなかった。返事^{へんじ}にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人^{やくにん}？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。「……本当言うと、まだ何を考えるでもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんです。だいちどれが善いか、どれが悪いか、自分がやって見た上でないと解^{わか}らないんだから、選択に困る訳だと思えます」、「……それもそうね。けれどもあなたは必^{ひつ}竟^{きやう}財産があるからそんな呑気な事を言っているよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちゃいられないから」、私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があった。私は腹の中で奥さんの言う事実を認めた。しかしこう言った。「……少し先生にかぶれたんでしよう」、「……碌^{ろく}なかぶれ方をし下さらないのね」、先生は苦笑した。「……かぶれても構わないから、その代りこの間言った通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでない^{あて}と決して油断はならない」とある。（本文）

*

*

さて、私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的^{あて}もなかった。返事^{へんじ}にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人^{やくにん}？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出したとある。——これは、非常に面白いところであり、例えば、当時、帝国大学（東大など）の「文化系」を出ると、一般的には、「先生か役人」などになる場合が多かったのだらう。夏目漱石も、学校の先生になっている。むろん、政治家や司法界或いは銀行や一流会社、その他、実に様々な職種はあるが、それはともかく、「私」という人は、「……本當言うと、まだ何を考えるでもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんです。だいちどれが善いか、どれが悪いか、自分がやって見た上でないと解^{わか}らないんだから、選択に困る訳だと思えます」、「……それもそうね。けれどもあなたは必^{ひつ}竟^{きやう}財産があるからそんな呑気な事を言っているよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちゃいられないから」と言う。私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があった。私は腹の中で奥さんの言う事実を認めた。しかしこう言った。「……少し先生にかぶれたんでしよう」、「……碌^{ろく}なかぶれ方をし下さらないのね」、先生は苦笑した。「……かぶれても構わないから、その代りこの間言った通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでない^{あて}と決

して油断はならない」とある。——先生は、一貫して「このこと」を気にかけている。

五九、これから何をする気ですか（三十三）其の三

私は先生と一緒に、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮した語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄（すこ）い言葉であった。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあった。「……奥さん、お宅の財産は余ッ程あるんですか」、「……何だってそんな事を御聞きになるの」、「……先生に聞いても教えて下さらないから」、奥さんは笑いながら先生の顔を見た。「……教えて上げるほどないからでしょう」、「……でもどのくらいあったら先生のようにしていただけるか、宅へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」、先生は庭の方を向いて、澄まして烟草を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。「……どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いとして、あなたはこれから何か為さなくっちゃ本当にいいやしませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」、「……ごろごろばかりしていいやしないさ」と先生はちよつと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。（本文）

*

*

さて、先生は、「……かぶれても構わないから、その代りこの間言つた通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産（自分に見合つた財産）を分けてもらつてお置きなさい。それでないと決して油断はならない」と言う。これは、うまく欺（だま）されて、「自分に見合つた財産」以下になってしまう可能性は常にあるからである。——それを聞いて、「私」という人は、「……先生と一緒に、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮した語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄（すこ）い言葉であった。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあった」。

そこで、改めて、「私」という人は、「……奥さん、お宅の財産は余ッ程あるんですか」と聞くと、「……何だってそんな事を御聞きになるの」と訊く。「……先生に聞いても教えて下さらないから」と言うと、奥さんは笑いながら先生の顔を見た。「……教えて上げるほどないからでしょう」、「……でもどのくらいあったら先生のようにしていただけるか、宅へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」と言う。先生は庭の方を向いて、澄まして烟草を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。「……どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いとして、あなたはこれから何か為さなくっちゃ本当にいいやしませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」と言うのであった。

これは、意外と面白いところであり、まず、自分の「財産」については、誰であれ、他人からあれこれ聞かれても、ふつうあまり語りたがらないものであるが、それは、やはり自然と「警戒心」が働くことになるからだろう。それと、もう一つ、奥さんは、「……あなたはこの何か為さなくっちゃ本当にいいやしませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」と言うと、「……ごろごろばかりしていいやしないさ」と言う。つまり、

奥さんは、先生が世に出て働かないことに対しては、まあ仕方ないかなあと思いながらも、やはり「心の底」では、「夫（先生）には世に出て何か仕事をして欲しい」と思っているのである。だからこそ、「……あなたはこれから何か為（な）さらくつちゃ本当に、いけませんよ」という言葉になるのである。

五九、これから何をする気ですか（三十四）其の四

私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国する筈（はず）になっていたので、座を立つ前に私はちよつと暇（いとま）乞（こ）いの言葉を述べた。「……また当分お目にかかれませんか」「……九月には出ていらつしやるんでしようね」、私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかった。「……まあ九月頃（ころ）になるでしょう」、「……じゃ随分（ずいぶん）ご機嫌（きげん）よう。私たちもこの夏はことによると何処（どこ）かへ行くかも知れないのよ。随分（ずいぶん）暑（あつ）そうだから。行ったらまた絵端書（えがき）でも送って上げましょう」、「……どちらの見当（まど）です。若（も）しいらつしやると思（おも）えば」、先生はこの問答（もんた）をにやにや笑（わら）って聞いていた。「……何（なに）まだ行くとも行かないとも極（き）めていやしいんです」と言うのであった。——席（せき）を立（た）とうとした時、先生は急に私（わたし）をつらまえて、「……時（とき）にお父（とう）さんの病（びょう）気（き）はどうなんです」と聞いた。私は父（ちち）の健康（けんこう）について殆（ほとんど）ど知（し）るところがなかった。何（なに）とも言（い）って来（こ）ない以上、悪（わる）くはないのだろう位（くらい）に考（かん）えていた。（本文）

さて、ここまでの「内容」は、そのまま書いてある通りかと思うが、ここで大事なところは、先生は急に私（わたし）をつらまえて、「……時（とき）にお父（とう）さんの病（びょう）気（き）はどうなんですか」と聞いて来たことであり、それを「切（き）つ、掛（か）け」として、再び、「父（ちち）の病（びょう）気（き）」の話（はなし）になるとともに、やがて、「……先生（せんせい）と奥（おく）さんのど（ど）ちらが先（ま）に死（し）ぬか」という問題（もんだい）へと展開（てんげん）して行くのである。——これは、以前（いぜん）に、「……奥（おく）さんが先（ま）に死（し）んだら、先生（せんせい）はどうなるでしょうか」という談義（だんぎ）があり、その時には、奥（おく）さんは、「……先生（せんせい）は私（わたし）を離（はな）れれば不幸（ふこう）になるだけです。あるいは生きていられないかも知（し）れませんが」と言（い）っていたが、今度は、「……先生（せんせい）が先に死（し）んだら奥（おく）さんはどうなるのか」という問題（もんだい）であり、先生（せんせい）は、この話（はなし）を何（なに）気（き）なく持（も）ち出してはいるが、実は、先生（せんせい）が何（なに）よりも知（し）りたいと思（おも）っていたことは、まさに「このこと」だったのである。

*

*

六十、父の病気の話からどちらが先に死ぬか

六十、父の病氣の話からどちらが先に死ぬか(三十四)

先生は、「……そんなに容易く考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」、尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな術語をまるで聞かなかつた。「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」、無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしていた。「……どうせ助からない病氣ですから、いくら心配したって仕方がありません」、「……そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」、奥さんは昔同じ病氣で死んだという自分のお母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこう言った下を向いた。私も父の運命が本当に氣の毒になつた。

すると、先生が突然奥さんの方を向いた。「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」、「なぜ」、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになつてゐるね」、「……そう極つた訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしよう」、「……だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」、「……あなたは特別よ」、「そうかね」、「……だって丈夫なんですもの。ほとんど煩らつた例がないじゃありませんか。そりやどうしたつて私の方が先だわ」、「先かな」、「……え、きつと先よ」、先生は私の顔を見た。私は笑つた。「……しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」、「……どうするつて……」、奥さんはそこで口籠つた。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう氣分を更えていた。「……どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定つていうくらいだから」、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう言つた。(本文)

さて、先生は、「……そんなに容易く考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたのである。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によつて、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廢物が血中にたまることの原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なつているのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。一方、無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしていた。「……どうせ助からない病氣ですから、いくら心配したつて仕方がありません」、「……そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」、奥さんは昔同じ病氣で死んだという自分のお母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこう言つた下を向いた。私も父の運命が本当に氣の毒になつたとある。——そして、この場面で大事なのは、次からの「内容」である。

*

*

すると、先生が突然奥さんの方を向いた。「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」、「なぜ」、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになってるね」とある。——まず、先生は、「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」と何気なく遠回しに聞いている。これは、むろん、自分の「本心」(本当は己が死んだらお前はどうか)と聞きたいのだが)それを奥さんに悟られないためであり、すると、奥さんは、当然の如くに「なぜ」と聞き返すので、先生は、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになってるね」と、話を「先生が一番聞きたいところ」へと持って来るのである。すると、奥さんは、それに気づかず、「……そう極った訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしよう」と言う。先生は、「……だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」と言うと、「……あなたは特別よ」、「そうかね」、「……だつて丈夫なんですもの。ほとんど煩らつた例がないじゃありませんか。そりやどうしたつて私の方が先だわ」、「先かな」、「……え、きつと先よ」と言う。先生は私の顔を見た。私は笑つたとある。

むろん、これでは、先生が「本当に知りたいこと」が少しも聞き出せていないので、あらためて、次のように「聞き直す」のである。それは、「……しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」と。今度は、直球を投げて来たのである。すると、奥さんは、さすがに動揺が生じてきて、「……どうするつて……」と、奥さんはそこで口籠つた、となるのである。先生の死に対する「想像的な悲哀」が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしくかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更えていた。「……どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定(ろうしやうふじょう)(人の寿命は、決まつたものではなく、老人でも若者であつても、いつ死ぬかは分からない)つて言うくらいだから」と、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしく言うつたとある。——これは、もちろん、奥さんは、いわば「本心」(答え)を避けたということになるが、その「本心」とは、すなわち、「……天下に一人しかいないと心の底から愛している夫を失えば、それは大変な悲しみに襲われることは間違いない」ことになるのである。

六一、先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか(三十五)

私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になつていた。「……君はどう思います」と先生が聞いた。——先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかつた。私はただ笑つていた。「……寿命は分りませぬね。私にも」、「……こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極つた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなつたのが」、「……亡くなられた日ですか」、「……まさか日までも同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」、「この知識は私にとつて新しいものであつた。私は不思議に思つた。「……どうしてそう一度に死なれたんですか」、奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを遮つた。「……そんな話はお止しよ。つまらないから」、先生は手に持つた団扇をわざとばたばたいわ

せた。そうしてまた奥さんを顧みた。「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」、奥さんは笑い出した。「……ついでに地面も下さいよ」、「……地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」、「……どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰つても仕様がないわね」、「……古本屋に売るさ」、「……売ればいくらぐらいになって」、先生はいくらとも言わなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。「……おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」。(本文)

*

*

さて、私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になつて来たのである。これは、席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「……時にお父さんの病氣はどうなんです」と聞かれて、そのままずっと「……話の区切りの付くまで二人の相手になつていた」ことになるが、そこには先生の「このような展開」に持つていこうという「思惑」(企て)があつたのかどうかは判別しがたいが、先生は、「……君はどう思います」と聞くのであつた、「私」という人は、——先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかつた。私はただ笑つていた。「……寿命は分りませんね。私にも」、「……こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極つた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなつたのが」、「……亡くなられた日ですか」、「……まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」、「この知識は私にとつて新しいものであつたとある。

これは、第三部(先生と遺言)を読めば、すぐにも分かることであるが、先生が「中学三年」の終わりの頃に、父親が「腸チフス」の病氣になり、それを看護していた「奥さん」もその「腸チフス」の病氣になつてしまひ、結局、二人とも「ほぼ同じ時期」に死んでしまつたということである。一方、私にとつてはこの「知識」は新しいものであつたので、私は不思議に思つた。「……どうしてそう一度に死なれたんですか」と聞くと、奥さんは私の問いに答えようとしたが、先生はそれを遮つた。「……そんな話はお止しよ。つまりないから」と言い、先生は手に持つた団扇をわざとばたばた言させたのである。——それでは、なぜそのようなことを敢えてしたのか問えば、それは、「先生」にはまだ「言うべき言葉」が残つていたのであり、それは、次のようなものである。

*

*

さて、大事なのは、この後であり、先生は、奥さんの方をまた顧みて、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」と言う。すると、奥さんは笑い出した。「……ついでに地面も下さいよ」と言うと、先生は、「……地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」と言う。奥さんは、「……どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰つても仕様がないわね」と言うと、先生は、「……古本屋に売るさ」と言う。奥さんは、「……売ればいくらぐらいになって」と聞くと、先生はいくら

とも言わなかったとある。——これは、一体、何かと問えば、これは、結局、先生が死んだ後の、いわば「先生の遺言」のような「内容」になっているのである。

そのように、先生の話は、容易に「自分の死」という「遠い問題」を離れなかった。そして、その「死」は、必ず「奥さんの前に起るもの」（つまり「先生が先に死ぬもの」と仮定されていたのである。——これは、結局、先生には「自殺願望」があつて、それゆえ、先生の「本心」というのは、一つは、「……己が死んだらお前はどうかと、奥さんの本心が聞きたいのであり」、そして、もう一つは、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」と言い、また、「……地面は他のものだから仕方がないが、その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」と言う。これは、結局、先生が死んだ後の、いわば「先生の遺言」のような「内容」になっているのである。

一方、奥さんも、最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えたが、それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。（これは「実際に夫が先に死んだらと思つたら、急に心が重苦しくなった」ということである）。だからこそ、次のように言うのである。つまり、「……おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」と言う。——これは、奥さんは、本気で怒っているのであり、それだけ奥さんは、心の底から先生のことを大事に思い、そして、心から愛しているのである。

六二、先生宅の玄関先にある木犀の木を見て（三十五）

先生は庭の方を向いて笑つた。しかしそれぎり奥さんの厭がる事を言わなくなった。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奥さんは玄関まで送つて出た。「……病人をお大事に」と奥さんが言つた。「……また九月に」と先生が言つた。——私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張つていた。私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被われているその梢を見て、来たるべき秋の花と香りを想い浮べた。私は先生の宅とこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事の出来ないもののように、いつしよに記憶していた。私が偶然その樹の前に立つて、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入つたらしかなかった。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。国へ帰る前に調える買物もあつたし、ご馳走を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあつたので、ただ賑やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしよに卒業したなにかしに会つた。彼は私を無理やりある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた。私の下宿へ帰つたのは十二時過ぎであつた。（本文）

*

*

さて、先生は庭の方を向いて笑つた。しかしそれぎり奥さんの厭がる事を言わなくなつたとある。——これは、先生がぜひとも「……聞きたかつたこと、また、言い残しておきたかつたこと」は、一通り言えたからであろう。私はあまり長くなるので、すぐ席を立つ

たとある。先生と奥さんは玄関まで送って出た。「……ご病人をお大事に」と奥さんが言った。「……また九月に」と先生が言った。——これは、非常に「大事な言葉」であり、先生は、この時にはまだ「……自殺のことなど考えてはいなかった」ということである。私は、挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。「玄関と門」との間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張っていたとある。——まず、「木犀」の木であるが、これは、中国から入って来た「木」であり、一般には、有名な「金木犀」と「銀木犀」とがあり、「金木犀」は、小さな橙色の花を無数に咲かせて、甘い香りが漂う。一方、「銀木犀」は、小さな白い花を無数に咲かせて、香りは、金木犀に比べると弱い。どちらも実は結ばず、花は、毎年秋の十月頃に咲き匂うことになるのである。

私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被われていてその梢を見て、来たるべき秋の花と香りを想い浮べた。私は先生の宅とこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事のできないもののように、一所に記憶していた。私が偶然その樹の前に立って、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入ったらしかった。私は一人暗い表へ出たとある。——例えば、「……私が偶然その樹の前に立って、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた」とある。これなどはほとんど誰も気づかないほどの自然な描写であるが、しかし、これは、実は暗に「或る事」を暗示しているのである。それは、次のようなことである。

つまり、この「私」という人が、再び、九月、この「先生の宅」にやって来るのは、実は、先生からの「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」という「長い手紙」（先生の遺書）を受け取って、急遽、慌てて「汽車」に乗り込んで、「先生の宅」へと駆けつけるといふ展開になるのである。

また、「……私は一人暗い表へ出た」とあるが、これなども先生が亡くなりいなくなれば、再び、この「先生の宅」を、再び、訪ねることもなく、また、親しく人生を語り合える唯一無二の「話し相手」もいなくなり、結局は、「……私は一人暗い表（世の中）へ出る（放り出される）」しかないということである。

*

*

私はすぐ下宿へは戻らなかった。国へ帰る前に調える買物もあったし、ご馳走を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあったので、ただ賑やかな町の方へ歩いて行った。町はまだ宵の口であった。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といっしょに卒業したなにかしに会った。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた。私の下宿へ帰ったのは十二時過ぎであったとある。

例えば、「……町はまだ宵の口であった。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といっしょに卒業したなにかしに会った。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた」とある。——例えば、用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く姿や、今日私といっしょに卒業したなにかしに、私は無理やりにある酒場へ連れ込まれ、そこで「麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた」とあるが、これなども、先生の「……ものの方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などと比べてみると、ほとんど取るに足らない「麦酒の泡のようなものに見えていた」ということになるのだろう。

*

*

六三、帰郷への準備

私はその翌日も暑さを冒して、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者を憎らしく思った。

私はこの一夏を無為に過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸善の二階で潰す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点検して行った。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であった。小僧に言うのと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になっては、ただ迷うだけであった。その上価が極めて不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかつたかを悔いた。

私は鞆を買った。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがびかびかしているので、田舎ものを威嚇かすには充分であった。この鞆を買うという事は、私の母の注文であった。卒業したら新しい鞆を買つて、そのなかに一切の土産ものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあった。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡が解らないと言うよりも、その言葉が一種の滑稽として訴えたのである。(本文)

*

*

さて、私は、「……その翌日も暑さを冒して、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者を憎らしく思った」とある。——これは、夏の「暑さ」とともに、もともと男性というものは、他人から頼まれた「買い物」などをあちこち買いまわること自体、女性とは違つて、それほど楽しいことではないのである。しかも、自分の時間を奪われ体も疲れるばかり、それが、まさに「……他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者(そういうことが全く分かつていない人)を憎らしく思った」ということである。

一方、私は、一夏を無為に過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸善の二階で潰す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点検して行ったとある。——例えば、「私」という人は、すでに「大学を卒業」しているのである。それゆえ、しばらくは「学問」から離れてもよいのであるが、この「私」という人は、まじめな性格で、「遊ぶ」ことよりは、むしろ「勉学」にこだわっている。また、「就職」はどうするのか? 全くその気がないとすれば、しばらくはぶらぶらするのか、それとも、さらに上の「大学院」へと進むのか、この辺のところは全く分らない。

また、買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であった。小僧に言うと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであつた。その上価が極めて不定であつた。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないもあつた。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかつたかを悔いたとある。

例えば、まだ大学出たての若者が、女性の「衣服類」などをあれこれ買い求めるとなれば、まさに「……さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであつた。その上価が極めて不定であつた。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないもあつた。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかつたかを悔いた」となるのである。

また、私は靴を買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがぴかぴかしているので、田舎ものを威嚇かすには充分であつた。この靴を買うという事は、私の母の注文であつた。卒業したら新しい靴を買つて、そのなかに一切の土産ものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあつた。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡が解らないと言うよりも、その言葉が一種の滑稽として訴えたのである。——これは、わが子が「東京の帝国大学」を立派に卒業して晴れがましいぴかぴかの姿で帰つて来る。それは、田舎の人たち（郷里の人たち）にも「自分の息子」をこれでもかと自慢出来るとともに、そのようなことが出来るのが、実の母親にとつては何よりも嬉しく誇らしいことでもあるのだろう。一方、それを「息子」から見れば、一種の滑稽のように感じられたということである。

六四、汽車で故郷へと帰る（三十六）

私は暇乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰つた。この冬以来父の病氣について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかつた。私はむしろ父がいなくなつたあとの母を想像して氣の毒に思つた。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覚悟していたに違ひなかつた。九州にいる兄へやつた手紙のなかにも、私は父の到底故のような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあるうが、出来るなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰つたらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりでも田舎にいるのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾の至りであるというような感傷的な文句さえ使つた。私は實際心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違つていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に氣の変わりやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になつた。私はまた先生夫婦の事を想ひ浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶い出した。「……どつちが先に死ぬだろう」、私はその晩先生と奥さんの間に起つた疑問を独り口の内でも繰り返して見た。そうしてこの疑問には誰も自信をもつて答える事が出来ないのだと思つた。しかしどつちが先

へ死ぬと判然分っていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思った。(死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事も出来ないように)。私は人間を果敢ないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。(本文)

*

*

さて、私は暇乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰った。(だとすれば、七月ということになる)。この冬以来父の病気について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかったとある。——これは、まだ若い生命力に満ち溢れている「私」という人にとっては、総じて「人の死」というものは、すべて「他人事」のように見えていて、たとえ「自分の父親」であつても、どこか「真実味」が感じられないようなところがあるのである。それは、なぜかと問えば、それはまだ若いので「死に直結する病気とか老いとか死への恐怖」などは経験もなく、それゆえ、実感として分かりやうがないからである。そして、私はむしろ父がいなくなったあとの母を想像して気の毒に思ったとある。(これはこれでもっともなことではあるが)、そのくらいだから私は心のどこかで、父はずでに亡くなるべきものと覚悟していたに違ひなかつたとあるが、これは、そのように「父親の死」を軽々しく決めつけて考えてしまうのも、父は、やがて病気で死んでいくという、その医学的「事実」だけを見ていて、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などが全く実感として理解できていないからである。ただ「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ考えているだけに過ぎないからである。それゆえ、大事なことは、父親の身になって、考えて見れば、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などがわが身に感じて実感として感じる、ことができ得るようになるのである。

*

*

また、九州にいる兄へやった手紙のなかにも、私は父の到底故のような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあるうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰ったらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりでも田舎にいらぬのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾の至りであるというような感傷的な文句さえ使った。私は實際心に浮ぶまを書いたとある。——これなども、ただ「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ思っているだけに過ぎないのであり、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などは何一つ実感として理解出来ていないのである。それゆえ、父親の身になって、考えてみることによつてこそ、初めて、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などがわが身に感じて実感として感じる、ことができ得るようになるのである。——つまり、ただ単に「頭の中」(或いは「心の中」)だけであれこれ考えることと、相手の身になってあれこれ真剣に親身に考えることでは、全く全然違うことになるのである。

それはともかく、「私」という人は、「……私は實際心に浮ぶまを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた」とある。——これは、一方では、「父の病気をあれこれ心配している自分と、一方では、もう治らないのだとあきらめているさめた自分とがいて、その「矛盾」を感じているということである。

* * *

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事を想い浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶い出した。「……どっちが先へ死ぬだろう」、私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもって答える事が出来ないのだと思った。しかしどっちが先へ死ぬと判然分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思つた。(死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事も出来ないように)。私は人間を果敢ないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じたとある。——例えば、私は人間を果敢ないものに観じた。それは、人の「生命の果敢なさ」とともに、死に近づきつつある父を前にして、当人も私も医師も、その他、誰でも、どうすることも出来ないままでいるからである。

* * *

例えば、人は、やがて「死ぬもの」である。これは、もう何を以てしてもどうにもならない事実である。しかし、生きている間は、誰でも出来るだけ「幸せ」であるべきであり、また、出来るだけ「痛みや苦しみ」などから少しでも解放されているべきである。

例えば、末期ガンのため、死を待つばかりの人がいるとする。この人は、やがて死ぬのだから、苦しんで死のうが楽に死のうがどっちでも結局同じではないかと考えてはいけないのである。——人間は、生きている限りは、死ぬその瞬間まで、出来るだけ「幸せ」であるべきであり、死ぬのは仕方がない。しかし、生きている限りは、少しでもその「痛みや苦しみ」などから解放されて、出来るだけ「幸せな状態」のまま、そして、みんなに「感謝」しながら死んでいく。それが、その人にとっては一番幸せなことであり、また、残された人たちにとつても一番幸せなことになるのである。——これが、まさに「ホスピス」(末期ケア)の根本的な「考え方」になるのである。

*

*

上「先生と私」のまとめ

さて、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）の海水浴場であった。そして、その「先生」と何回か浜辺で会って話をするようになるに連れて親しくなり、その後、東京に帰ったあとも、「私」という人は、なぜか「心惹かれる」その「先生」の家を頻繁に訪ねるようになって行くのである。そして、最初、訪ねた時には、留守であり、二度目も留守であると「下女」に言われるが、やがて「奥さん」が出てきて、奥さんは、美しい人であったが、先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある「或る仏」へ花を手向けに行く習慣があるということ、……たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは氣の毒そうに言うのであった。そこで、私も散歩がてら雑司ヶ谷の「墓地」へと行ってみると、茶店の中から先生らしい人がふいと出て来たので、出し抜けて「先生」と大きな声を掛けると、先生は突然立ち留まって私の顔を見るなり、「どうして……、どうして……」と、異様な調子をもって繰り返されるのであった。もちろん、この墓地の「仏」（親友）との関係においてこそ、先生の「謎」が奥深く隠されているのであるが、私は私がどうしてここへ来たかを先生に話すとともに、その先生の「奥さん」とも次第に親しくなるに連れて、いろいろと話をするようにもなるが、その前に、まず最初は、「恋」（恋愛）は罪悪である、について考えてみたいと思う。

一、恋（恋愛）は罪悪である

まず、本文から引用してみると、「……或る時花時分に私は先生といっしよに上野へ行った。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添って花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あった」とある。そして、「……新婚の夫婦のようだね」と先生が言った。「仲が好さそうです」と私が答えた。そのあと、「……君は恋をした事がありますか」と聞くので、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」と言われて、私は答えなかった。「……したくない事はないでしょう」と言うので、「ええ」と答えると、「……君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交っていますよ」と言うので、「……そんな風に聞こえましたか」と応えると、「……聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」と先生は言うのであった。私は急に驚かされた。何とも返事をしなかったとある。

さて、先生は、最後のところで、「……君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」と言っている。それを聞いて、「私」という人は、「……私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった」とある。——これは、まだ若い「私」という人にとっては、確かに「驚くべき言葉」かも知れないが、しかし、人生経験の長い「先生」にとっては、それは、それほど「驚くべき言葉」ではなく、むしろ、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、先生は、まさにわが身を以って誰よりも骨身に染みて

よく知っているのであり、だからこそ、「恋」(恋愛)は、罪悪です、と言うのである。

さて、まだ若い「私」という人は、先生の「恋は罪悪です」という言葉を聞いて、当然の如く、「……なぜですか」と聞くと、「……なぜだか今に解ります。今にじやない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじやありませんか」と言うので、私は一応自分の胸の中を調べて見た。しかし、「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」と言うと、先生は、「……目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きなくなるのです」とある。

これは、非常に「興味深い言葉」であり、つまり、「恋」というのは、すなわち、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであるが、例えば、自分は、「お金」がないから、恐らく、不幸なのだろう。だから、その「お金」(大金)が手に入れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、多くの人たちは、まさに「金儲け」に動き出すのである。また、自分は、「恋」(恋愛)をしていないから不幸なのだろう。だから、「恋」(恋愛)をして「恋人」でも出来れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、「恋」(恋愛)へと動き出すのである。しかし、「恋」(恋愛)というものは、一方では、確かに、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」を持ち合わせてはいるが、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、誰でも、遅かれ早かれ、嫌が上でもまさに「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などにさいなまれることにもなるのである。——つまり、何か欠けているから、自分は不幸なのだろう。だから、その「欠けているもの」を充たせば、きっと幸せになれるだろうと思つて、われわれ人間というのは、まさにその方向へと「動き出す」のである。

それはともかく、先生は、「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが。——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつたとある。——例えば、先生は、「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている。これは、例えば、この『こころ』という作品の中でも、例えば、親友とお嬢さんが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、抑え難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」(恨みや憎しみ)などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——つまり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥ってしまうのである。それが、まさに「恋」(恋愛)なのである。

これは、まだ若い「私」という人にとっては、男女間の「恋」(恋愛)については、どうしても、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」の方ばかりを見てしまう傾向があり、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」の方は、まだ経験がないからなかなかイメージ出来難いのである。——ところが、一方の、先生の方は、男女間の「恋」(恋愛)

については、その実に恐ろしい「悲劇の一面」を、まさに「わが身を以って誰よりも骨身に染みてよく知っている」のであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪です、と言うのである。しかも、ここで最も大事なことは、——これは、先生だけの問題ではなく、実は、この世の誰であれ、遅かれ早かれ、やがては、嫌が上でもそのことを「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などにさいなまれることにもなるのである。

二、私と奥さんとの最も重要な会話部分

それでは、第一部の「先生と私」という作品の中から、私と奥さんとの最も重要な会話部分を、その「本文」から少し引用してみたいと思うが、それは、次のようなものである。まず、「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟っていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょう。それでいて出来ないんです。だから気の毒ですわ」、「……しかし先生は健康から言って、別にどこも悪いところはないでしょ」、「……丈夫ですとも。何にも持病はありません」、「……それでなぜ活動が出来ないんでしょう」、「……それが解らないのよ、それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」、「……若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまったんです」、「……若い時ついでいつ頃ですか」、「書生時代よ」と言うのであった。

では、「……どんなだったんですか」、それは、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」、「……それがどうして急に変化なすったんですか」、「……急にじゃありません、段々あななって来たのよ」、「……じゃ先生がそう変って行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合ってくれないんです」、「……これでも私は先生のため出来るだけの事はしているつもりなんです」、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がなないんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」とある。

すると、「……実は私すこし思いあたる事があるんですけど」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちやうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、

そして、「……その事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々變つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思われたい事もないのよ」、「……しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに變化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪たまらないんです。だから、そこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」、私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

三、「外的事実」と「内的事実」

さて、これらが、まさに「先生と私」という第一部における、「私」(或いは「奥さん」という第三者から見た(つまり「外から見た」)時の「先生」という存在の描写(理解)であり、それは、まさに「外的事実」にあたるものである。そして、その最も「核心部分」については、第三者である「私」(或いは「奥さん」)からは、どうしても解くことができ得ない、まさに大きな「謎」として残されたままになるのである。

むろん、この問題は、彼らだけに限ったことではなく、実は、すべての人間に当てはまることなのである。——つまり、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」(つまりその人の表面的な「姿・形」すがたかたち)やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるかと思う。そして、そのような傾向がはつきりとあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになるとともに、結局は、それによつて、自分というものを少しでもよく見せようとするにもなるのである。

つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」(容姿・容貌)などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」等である。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に生じて来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」としての、今日まで生きてきたその「全過去」(つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などの膨大な量の蓄積(蓄え)と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、一体、どのようなものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということであり、それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。——そして、残された「謎」の部分には、まさに第三部の「先生と遺書」というその中で、はつきりと語られることになるのである。それは、

先生（自分）という第一者から見た（つまり「内から見た」）時の「先生」（自分自身）という存在の「内的世界」の描写であり、それが、まさに「内的事実」になるのである。

*

*

さて、第一部の終盤（二十一）の「本文」に戻りたいと思うが、それは、次のようなものである。――秋が暮れて、冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。父はかねてから腎臓を病んで慢性化していたのである。そこで、冬休みになる少し前、先生の所へ行つて、必要な金を一時立て替えてもらい、その晩の汽車で東京を立つたが、父の病気は思ったほど悪くはなかった。私という人は、三人兄妹であり、兄は、九州にいて仕事が多忙、また、妹は他国へ嫁にいき、今は妊娠中であり、二人とも「万一の時」ぐらいしか帰れないという状況であり、一番便利なのは書生をしている私だけであり、母の言いつけ通り、休み前に帰つて来たということが、父には大きな満足であつたとある。

これは、「父親と私」との関係であり、父親の病気は、今は健康そうに見えても、すでに末期に近く、やはりどこかに「心細さ」があつたに違ひなく、一方、「私」という人は、父親と将棋を差しながら、その父親と先生とを比較対照してみると、「……両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であつた。他に認められるという点から言えばどっちも零であつた。それでいて、この将棋を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭（や胸）に影響を与えていた」のである。これは、人間として父親よりも、むしろ先生の方に心惹かれていたということである。そこで、冬休みの尽きる少し前に故郷を立ち、東京へ帰つてみると、松飾はいつか取り払われていて、私は早速先生のうちへ椎茸も手土産に金を返しに行くと、父親の「病気」の話になり、実は奥さんの「母親」も「腎臓病」で亡くなつていたので、その病気のことをよく知つていて、この病気は、「……病気に罹つていながら、気が付かないで平氣でいるのが特徴」であり、十分に注意しなければならぬという話になるのである。

ところで、「私」という人は、その年の六月に卒業を控えていたので、何が何でも四月いっぱいまでには、まさに「卒業論文」を仕上げなければならず、それに専念することとなるが、予定通り書き上げるまでは、先生の敷居を跨がなかつた。そして、「私」が自由になつたのは、初夏の季節（五月）であり、私はすぐ先生の家へ行つたとある。すると、先生は、「……もう論文は片付いたんですか、結構ですね」ということになり、解放された気分だったので、先生を郊外に散歩へと誘い出し、一時間後、蕨とした小高い所には、門の柱に「何々園」（それは「植木屋」であつたが）という標札があり、その中へと二人して入つて行つた。そして、植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があつたが、静かで誰もいなかった。ここで、先生は、「……突然だが、君の家には財産がよっぽどあるんですか」と聞くので、「……あるというほどありません」という展開になるが、先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけない。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うのであつた。これは、先生にしては、あまりに実際的なので私は少し驚かされたのである。

しかし、これこそは、まさに「作者」（夏目漱石）がどうしても書き遺しておきたかつ

た「本題」の一つであり、それは、次のようなことである。まず、本文では、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだと言いましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」と言うのであった。

これに対して、「私」という人は、「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、先生は、「……意味と言って、深い意味はありません。——つまり事実なんです。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのには、いざという間にという意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は笑い出して、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えた。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰らなかつたとある。

四、人に裏切られる

やがて、先生は、「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負わされ通してしよう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をしにいます。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのです」とある。

これは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、「……（心から）信じていた人間から思いも寄らず裏切られてしまうと、その衝撃は、あまりにも強烈であり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いなどに深く陥りやすい」ということである。——それは、例えば、（心の底から）信じていた「……祖父母、両親（父や母）、夫、妻、兄弟（姉妹）、わが子、孫、親戚、その他」などをはじめ、（心から）信じていた「……恩師、先生、監督、コーチ、リーダー、上司、部下、同僚、親友、友だち、仲間、恋人、愛人、その他」などから思いも寄らず裏切られてしまうと、その衝撃は、あまりにも強烈となり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いなどに深く陥りやすい」ということである。

ふつう、われわれ人間というのは、「他人」というものをそれほど深くは信用していないものである。それゆえ、それほど信用していない「他人」からたとえ裏切られても、われわれ人間というのは、（ある程度はそういうこともあり得るだろうと想定している）、それほど深くは傷つかないものであり、確かに、その時には相手を心から強く恨んだり憎んだり呪ったりもするが、やがてはうすれていくものである。それゆえ、ここで最も大事なことは、われわれ人間が真に深く傷つくのは、まさに（心の底から）信じていた人間に裏切られた時であり、それは、先生のように、その衝撃は、あまりにも強烈となり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いに深く陥りやすいということである。

ある。(むろん、これだけでは、まだ「先生のような人間」にはならないのである。)

さて、本文に戻りたいと思うが、それは、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を、悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」と言う。先生はあきれたと言った風に、私の顔を見ては、「……あなたは大胆だ」と言い、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言う、「……私の過去を許してもですか」と、突然、恐ろしい響きを以て、私の耳を打った。「……あなたは本当に真面目ですか」と先生は念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言った事も真面目です」、私の声は顫えた。「……よろしい」と先生が言った。「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増しかも知れません。ただ、今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい」と言うのであった。

その後は、私が卒業したらと、先生の家へ御馳走に招かれていたので、その晩、訪ねてみると、先生は、「御目出とう」と杯を上げ、奥さんは、「結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言ってくれた。先生から、「……君は卒業して、これから何をやる気ですか」と聞かれ、奥さんは、「先生？ 役人？」と聞くが、「……本当言うと、まだ何を考える考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないからです」と答えると、「……財産があるからそんな呑気な事を言っているのですわ」となり、また、財産の問題になるが、これは、やはり家族等が財産(お金)で「骨肉の争い」をする悲惨さを骨身に染みてよく知っていたからであり、その後、夜の十時頃、席を立とうとした時、先生は急に私をつかまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんですか」と聞いて来た。そして、「……尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言うところから、今度は、「……先生と奥さんのどちらが先に死ぬか？」という問題になり、先生は、「……もしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」と聞くと、「……どうするって」と、奥さんはそこで口籠り、そして、「……どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定(人の寿命は、決まったものではなく、老人でも若者であっても、いつ死ぬかは分からない) って言うくらいだから」と、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしく言うたのである。

さて、ここでの「最大の問題」というのは、もちろん、先生の「……もしおれの方が先

へ行くとするね。そうしたらお前どうする」というこの言葉(問、いかけ)であり、これは、まさに先生の心の底からの「問、いかけ」であり、それゆえ、この「言葉」に対する反応(答え)が、先生は、ぜひとも知りたかったということである。——一方、奥さんは、通り一遍のありきたりの「答え方」しかしていない。それは、一体、なぜなのか？ それは、先生が近い将来「死ぬ」ということが全く考えられないからであり、若しも先生が病気がちでもあれば、少しは「真実味」を持つが、全くの健康体では、奥さんは、むしろ「自分の方が先に死ぬ」と思っている位なのである。そして、先生は、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」、また、「……おれの持っているものも皆お前にやるよ」と、(まるで遺言みたい)に言うのを聞いて、奥さんは、「……おれが死んだら、おれが死んだらって、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」と言い、先生は庭の方を向いて笑ったとある。これが奥さんの心の底からの「本心」であり、奥さんは、本気で怒っているのであり、それだけ、いわば「先生」を心の底から愛しているということにもなるのだろう。

*

*

一方、若しも「……奥さんが先に死んだら先生はどうなるのだろうか？」という問題が残されているが、これは、もつとずつと前の段階で、すでに「奥さんと私」との対話の中に出てきたものであり、それは、次のようなものである。——つまり、「私」という人から、「……奥さんは、先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか？」と聞かれた時に、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直して聞かなくとも好いじゃありませんか」、「……つまり、分り切っているとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てもいいじゃない。あなたから見てもいいじゃない。先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」、「……そりゃ私から見れば分っています。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己惚れるようになるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己惚れるようになるんですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」。「……私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんです。世間というより近頃では人間が嫌いになっていくんですよ。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」と答えるのであった。——これが、先生の「謎」に対する、いわば「奥さん」なりの「一つの解釈」(答え)であり、このような「解釈」によって、奥さんの「心」は、いわば「落ち付いていられた」ということになるのだろう。

*

*

中 両親と私（概略）

さて、今度の「両親と私」という第二部の「内容」であるが、それは、次のようなものである。まず、「私」という人は、大学を無事に卒業をしたので、母親に頼まれていた「買い物」（「半襟や鞆」など）と「本や卒業証書」などを新しい鞆につめて、汽車で故郷へと帰る。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになってい

まず、その冒頭は、「……宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった」。父親は、「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよっとお待ち、今顔を洗って来るから」と、父は庭へ出て何かしていたところであった。そして、父親は、何遍も「卒業が出来てまあ結構だ」と繰り返すのであったが、その言葉の「真意」（本当の「意味合い」）は、「……おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せっかく丹精した息子が、自分のいなくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろう。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」と言うのであった。これは、まさに世の中のすべての「親心」を代弁したような言葉であり、私は一言もなかったとある。

そこで、私は、父や母に「卒業証書」を大事そうに見せると、父は、誰の目にもすぐ這入るような正面へ証書を置き、一方、私は、母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。（しかし、この病気は、むしろ、そういうものではなかったのである）。しかも、両親は、私のために赤い飯を炊いて客を呼ぶという相談までしているのである。母親も、「……仰山仰山とお言いたが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言い、父親も、「……呼ばなくとも好いが、呼ばないとまた何とか言うから」、「……東京と違って田舎は蒼蠅からね」と言う。仕方なく、私は父と相談の上、招待の「日取り」を決めるのであった。

ところが、その「日取り」のまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であり、それは新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡り、結局、「……まあ、（祝いは）ご遠慮申した方がよからう」ということになるのである。やがて、崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ、天子様もとうとうお隠れになる。己も……」と、父の元気は、急速に衰えて行くのであった。（ちなみに、この「天子様がお隠れになる」という言葉は、太宰治の『思ひ出』という作品の冒頭にも出て来るものであり、それは、叔母が「……天子様がお隠れになったと言いなさい」と、幼い太宰治に言う場面である）。それはともかく、——母親は、父親を安心させるためにも、「……

：お前の先生先生という方にでも（就職先を）お願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言われて、そこで仕方なく、先生に手紙を書くが、いつまで経っても返事は来ない。それは、一体、なぜかと問えば、まず、なぜここに明治天皇の「崩御」という話題が登場するのかと言えば、それは、まさに先生の「自殺」の一つの大きな「切っ掛け」となるものであり、そのための「伏線」になっているとともに、先生は、この時、自分をどうしたらよいか深く悩んでいて、私の就職先どころではなかったということである。

そして、「私」という人は、九月になると、また東京へ出ようとしたが、父はまた私を引き留めたとある。「……お前が東京へ行く宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言い、私は出来るだけ父を慰めたとある。これは、（死を間近にしている）父親のこの「心細さ」や「淋しさ」というものには、恐らく、計り知れない程のものがあるに違いない。つまり、誰もがやがては（人生の最期には）いやでも味わうことになる「思いや感情」になるのだろう。——ところが、私がいよいよ立とうという間際になって、（たしか二日前の夕方であったが）、父は（風呂場で）突然引つ繰り返ったのである。そこで、東京行きは、もう少し様子を見てからということになり、しかも、三、四日後、再び風呂場で倒れるという事態となり、そこで兄に父の現状を知らせる長い手紙を出し、また、妹には母が同じような内容の手紙を書いて出すことになる。また、母と相談して、父の枕元へは、町の病院から看護婦を一人頼む事にし、しかも、病人がいるので、自然と家への見舞の出入りも多くなつたとある。

さて、父の病状は、面白くない方へ移っていくばかりで、ついに私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打ち、兄からはすぐ行くという返事が来、一方、妹の方は、流産を恐れて、妹の夫が来ることになるのである。もちろん、こちら辺の内容は、それほど重要なものはそれほどはなく、いわば世間一般で「よく交わされる会話」の内容になっているかと思うが、それゆえ、何よりも大事な場面は、むしろその次の「場面」からなのである。それは、次のようなものである。——まず、「兄」と「妹の夫」がやって来て、父の病状を見ると、「兄」は、新聞紙を読んでいる父親を見て、「……よつほど悪いかと思つて来たたら、大変好いようじゃないか」と言い、一方、「妹の夫」も、「……さつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもなく。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

*

*

さて、大事なのは、まさにここからであり、それは、明治天皇の「崩御」は、明治四十五年（一九一二年）の「七月三十日」であり、それから約一ヶ月半ほど経つた「九月十八日」は、まさに明治天皇の「御大葬の夜」、それを「第三部」（先生と遺書）の本文で見ると、先生は、「……御大葬の夜、私はいつもの通り書斎に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました」とある。一方、田舎では、「……乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。そして、『大変だ大変だ』と言つて、何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む

時間のない時は、そつと自分の室へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかった」とある。——つまり、この頃は、まだ「ラジオ放送」もなく、(ラジオ放送は大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送の開始)、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によっていたのである。

そして、(乃木大将の死という)悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。その電報には、「……ちよつと会いたいのが来られるかという意味が簡単に書いてあった」とある。それに対して、「私」という人は、父の病気の悪化により、「行かれない」という返電を打つ事にしたのである。そして、細かい事情は、その日に手紙に書いて郵便で送ることにした。

さて、ここで確認すべきことは、次のようなことである。まず、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来た。だとすれば、病気の父親が「乃木大将の殉死」を新聞で読んで知り、大変だ大変だと騒いだのは、恐らく、「朝」であり。しかも、東京にいる先生も、当然のことながら、「乃木大将の殉死」を、この時は夜号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことによつて、先生は、ある「決心」をして、その日(午前中)に、「私」に「……ちよつと会いたいのが来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」(実家)へと届くのである。それでは、なぜ、この「事実関係」が何よりも大事なことになるのかと問えば、それは、「この日」こそは、まさに先生が「……(よろしい)、話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」と、まさにそう「決心した日」になるからである。だからこそ、「電報」で、「……ちよつと会いたいのが来られるかという」内容の「電報」(急報)になるのである。——つまり、先生は、この段階では、まだ「私」という人に直接会つて、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたということである。

ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に(東京へは)「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手(私)に会つて、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」(つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変わってしまったのである。その「絶対的証拠」となるものは、それは、二日後、先生は、まさに「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打つて来るからである。

*

*

やがて、「……父の病気は最後の二撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するのうに見えた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入った。父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であった。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかった。(中略)、そして、私と兄は、一緒に蚊帳の中に寝て、妹の夫だけは、客扱いを受けて、独り離れた座敷に入つて休んだ」とある。——一人は、それほど仲の好い兄弟ではなかったとある。小さいうちはよく喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這入つて

からの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。私は長く兄に会わなかったのも、兄はいつでも私には近くなかった。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕元で、兄と私は握手したのであった。「…お前これからどうする」と兄は聞いた。一方、私は、「…：…一家の財産はどうなってるんだらう」と聞いた。すると、兄は、「…：…おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産って言ったところで金としては高の知れたものだらう」となるが、これらの一連の内容を見ると、先生が心配したような「財産」をめぐる「骨肉の争い」は、この「家族」の場合には、起こりそうもないという感じを受けるが、それとも、先生が言うように、「…：…いざという間際で、最後の最後で、悪人になる人が出て来るのだからか」、それらのことについては、「作者」（夏目漱石）は、何も書いてはいないのである。

さて、父親の病状は、変な黄色いものも嘔いたり、時々嚙語を言ったり、そのうち舌が段々縫れて来て、何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあったとある。そして、父の水枕を取り更て、新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せている、その時、兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を丁寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだとある。

そして、父親のいる病室から自分の室へ戻ってから、私は早速郵便物の中を開けて見ると、中から出たものは、いわば「原稿」のようなものであるが、その分量があまりに多過ぎて、一気に読み通す訳には行かず、また、同時に病室の事が気にかかっていたので、落ちついて読む気にもなれず、私はそわそわしながらただ最初の二頁を読んだ。その冒頭の文章は、「…：…あなたから過去を問いたされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従って、それを利用してできる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とある。（ちなみに、文中の「世間的の自由」というのは、先生の奥さんの叔母が病気で手が足りないというので、私が（妻を）勧めて行かせ、十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行っているその間のこと」であり、その「間」に、「…：…この長いものの大部分を書きました」ということになるのである。）

さて、一度、父親の流腸の手助けに病室に呼ばれ、また、自分の室へ戻っては、長い手紙を拾い読みする余裕すらなく、ただ最初から最後までその頁を順に開けて見て、それを元の通りに机の上に置こうとした時、ふと結末に近い一句が私の眼に入り、それは、「…：…この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」というものであり、この瞬間、今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結したような感じ

になり、ただ「先生の安否だけが気になった」とある、その結果、私は夢中で医者の家へ馳
け込み、父はあと何日保つのか聞こうとしたが、医者は生憎留守であり、私はすぐ俵を
停車場へ急がせた。その停車場で紙切れに母や兄あての簡単な手紙を書き、それを急いで宅
へ届けるように車夫に頼んだ。そして、思い切った勢いで東京行きたもの汽車に飛び乗ってし
まった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂から先生の手紙を出して、漸く始め
からしまいまで眼を通したのであった。(中・完)

*

*

「参考文献」

※底本「こころ」夏目漱石（「青空文庫」）